(一)一本に「上に引證するが如し」とす。

(二)六大云云　即鼻成佛義にあり。

も、同じく此の經說あるなり。

此の中臺の一字は秘明に用ふ、其の義は別の證文に及ばず、粗〻(一)上の如し。

大日經の第二に云く、我れ本不生を覺り、語言の道を出過し、諸過解脫することを得、因緣を遠離し、空は虛空に等しと知ると。大師云く、

(二)六大無碍にして常に瑜伽なり、四種曼荼各〻離れず、三密加持して速疾に顯れ、重重帝網なるを即身と名く。文

此の兩文は胎藏傳法灌頂の印明に之れを說くなり、而も經文は五大の義を說いて五股の印相と成し、下の頌は體相用を以て五大所成の身分の義を成す。此の文の中に、三密加持とは五股なり、杵に加持の用あるべきが故に。重重の詞は五叉の義を示す、差別の詞なるが故に、經文に於て委し。其の印相を云はゞ是れ外縛五股の印なり、所謂る我れ本不生を覺る等の一句は二小指なり。凡そ此の印の本體は合掌の故に、元の如く動せず、仍て本不生といふ、是れまた地大不動の義なり。次の一句は二水指外縛して兩邊に之れを出す、是れを出過といふ。同じくまた水輪平等一味の義を表して相ひ交ふるなり。殊に正傳に此の界の印は外五股を用ふ、此の文明證なり。次の句は火指を

高く立つ、是れを諸過解脫を得といふ、此の諸過とは、兩掌を以て煩惱過患の義となす、此の印或は外縛を以て本躰となすが故に、煩惱の縛となすべし。金剛頂の縛解解諸縛等の意は之れに在り、彼の普賢三昧耶に金剛解脫といふ、同じ意なり、此の火輪は上高三角の相を表するなり。次の句は二風相離れ立つ意の說なり、此に遠離といふ、また風輪離散不定の義なり。空は虛空に等しと知るとは、二大指相ひ並ぶの義、文の上の空とは是れ法性にして右の空なり、下の空とは是れ世間左の空なり、是れ空大の義なり。法性の大空を以て世間の虛空に喩へて虛空に等しといふ、此の虛空に等しとの文を以て、上來の說文に印相五大の義を成ず。大師の釋は、此の一句を以て上の句の五大の義を成ずるなり。若し此の如く之れを云はゞ、今の經文に五股の印契を說き、兼ねて五大五智の義を顯し、五大を以て五佛の三摩地となす。大師の釋文また此の傳法の秘印を示す、爾らば此の經は胎藏師位の大事を說くなり。此の五股は、五大なりと雖も、金剛灌頂の本旨に依らば五智となすべし。大師即身義の最初に現證菩提を擧ぐるは此の意なり。

(一)三摩地の軌に云く、

(一)三摩地の軌一字頂輪王經をいふ此の文金剛頂經にあり。

諸法本より不生なり、自性は言説を離れたり、清淨にして垢染なし、因業なり虛空に等しと。文　大師云く、

(一)法然に薩般若を具足し　心數心王刹塵に過ぎたり
各〻五智無際智を具し　圓鏡力の故に實覺智なり。文

此れ等の文は、金剛界傳法灌頂の秘印と之れを習ふ。中ん就く軌の文は專ら印契を說いて成立す、大師の詞は現證の智相を示す。此の中の法然具足等は所證の本智、圓鏡等は能證の果相、首尾は制底(セイテイ)顯出の智身なり。彼の經文の自性は言說を離るの文句を以て所詮となす、自性の言は法の實義を顯し、餘句は此の句の莊嚴なり。故に攝大軌の正覺は甚だ深密なり、言語の道を出過するを大率觀婆(タイソツカンバ)の文となし、前後を捨て此の句を取て率觀婆となす、專ら此の深旨なり。凡そ此の文は、五大を以て四句に合す、是れ四智四曼にして、此の界の大宗なり。今世間の塔婆は風空必ず別異ならず、火輪に於て輪を顯出して、輪は最上高勝の義を表す、是れ則ち心を以て頂と爲すの義なり。凡そ心を以て頂とする義に就て更に秘印あり、即ち是れ法界の智なり、金剛頂の眼目尤も秘すべし。此の心智を顯すを以て(二)人となし佛智法身となし、此の心を顯さゞる

(一)法然云云　即身成佛義中の偈なり。

(二)人となし　之れ五智明のまゝなるをいふ。

(一)開顯云云　之れ因塔を表す。

(二)火輪三角　火輪の形は五形に於て三角形なり。

(三)勝身云云　塔と佛と即ち人と法と同一なるを表す

(四)また風空云云　自下無所不至印の異名を揭ぐ。

(五)また此の云云　自下風大の空大に住する理を說く。

(六)今生死云云　因果修入を明す。

を以て非情となし凡夫となし理身とするなり。若し此の理具の義なくんば何んぞ成佛の身器とせん。此の身器とは胎藏界の五大なり、此の現證を以て金剛界の大事となすなり。之れに依て三昧耶の大日の印、或は塔印となし金剛界自在の印といふ。此の自在の印とは塔婆なり、此の印も風を上方に至す、彼の傳法の印も、風を空に置く其意是れ同じ。また彼の自在とは諸法に於て自在なり、是れ現證の義に依て、此の塔婆の(一)開顯表相なり。五輪塔婆は只だ(二)火輪三角形にして、支分を隱覆するの心相なり、故に因位となして自在の印と云はず。また此の三昧耶は大日の印、金剛薩埵の軌等には佛身形相となす、宛も(三)勝身三昧耶印の如し、然らば一印を以て或は塔となし或は佛となす、是れ人法一致の意なり。塔は心法の相を顯す、是れ則ち人の義の故に同物の名となす、而るに今の傳法の印また此れに同じ。(四)また風空一處に之れを取る、則ち無所不至の印なるが故に、因業なり虛空に等しといふ。また是れ成佛の義、無明の所因、流轉の業、法性大空に等同なるが故に、彼の業障除の名之れに同じ、大惠刀の意此の如し、惠刀を以て惑障を斷除するなり。(五)また此の風空一所なるは是れ無所不至の義、風、大空に依住して動轉なし、只だ周遍のみあり。(六)今生死の動轉なく、法界遍入の

大覺のみあるなり。金剛頂には五指を以て大指より小指に至るに、次第を立てゝ因果修入の次第となし、二大指を以て人となし、未入の時を行者となし、已入の時を佛となす。然らば果德の四智を機の冥契となし、是れを以て成佛の證果となす。此の印に於て風空二指を、或は風を以て空に置く、是れ今の義にして佛身衆生に歸命するの義なり。或は二空を以て風に置く、是れ機緣の修入にして衆生佛身に歸命するなり。(一)本說に付きて二義あり、而も前の義また智拳印の義に同じ。此の印は成佛授記の印の故に、定の人指、惠の五指を載す、是れ灌頂授職の位なり。今の率都婆の印も同じく此の義を存す、故に同一傳法の印となす。(二)凡そ金剛頂は、四智を以て所證の法となし專ら四智を明し、能證の人を以て法界智となすが故に中臺法身あり、(三)敎王・理趣等の文に此の旨あり。是れまた上にいふ所の秘印の深旨なり、是れ能所人法を合論して、(四)五智を立て五佛を分つ故に。人といふは自餘の四佛みな大日なり、之れに依て一切如來と云ふて別異ならず。法に約せば大日所證また四智なり、故に常に四智を說いて法界智を存せざるなり。今の印は五指を以て四智を顯す、是れ則ち總體また人なり。此の中東方智と法界智と、殊に是れ其の理一致なるが故に、大曼の人を以て東方智に

(一) 本說云云 智拳印も同意なるを示す。智拳印は金剛界大日如來の結び給ふ印にして、金剛拳を結び右手の頭を伸し、右の拳中に入れ、右の大指と左の頭指とを合す、是れ生佛不二の深旨を顯す。

(二) 凡そ云云 自下能所の人と所證の法となす。

(三) 敎王・理趣 敎王・理趣經と理趣經をいふ。

(四) 五智云云 自下五智を明す。

(一) 十五智云云 瑜祇灌頂の大事にして、作業灌頂なり。

(二) 因行云云 自下因・行・證・入・の四點を明す。

(三) 風の下に一本には大空を取るの字あり。

(四) また瑜伽云云 自下中手印を明す。

配す、四印會の四曼是れなり。また大日金薩を以て(一)十五智の所依となす、また是れなり。大師の、圓鏡力の故に實覺智といふに、此の義を習ふべきが故に、彼の傳法の印なり。また風を以て空を取り、大圓智を人の所證となす、一智既に爾なり、三智また同なるべし。また風指以下の(二)因・行・證・入は、因指の(三)風を以て、是れ果の最頂に同ずるなり、因既に果に同ず、餘の三位また爾なり、或は灌頂は萬行の尊主の故に、行以下は高勝なり。因とは初入の人の故に風空一所なり。凡そ兩部の經文に於て更に習ふべき事之れあり、尤も尋ね問ふべし。(四)また瑜伽の手印壇の中位を以て兩部の大事と知るべし、祖師此の秘旨を殘す、紙墨に說かず。或は一印に此れを示すは、是れ見法の大事なり、三昧耶の誓約此の事あり、或は二印を分つ、是れ傳法の大事なり、兩部の要樞は此に極まる、其の義趣敢て異なることなし。今諸法本不生の文は、大日の說に同なりと雖も、彼は一義に約し、或は覺悟となし、或は理性となす、一相の文義に五大を論ずるが故に、是れ彼の手印の中位を示す。今の文の第一句は理性に約し、第四の句は現證を示し、中間の二句は二義に通ず、一頌の終始を以て次での如く金胎となす、則ちまた中位は自在、印は横竪同處の標相なり、是れ傳法の要義、印可の祕

(一)行用云云　行用壇を示す。

(二)受明云云　傳法の義なり。

(三)彼の談云云　金剛頂義訣の文意なり。

(四)一刹云云　自下義訣に塔の事あるを示す。

(五)行儀云云　自下灌頂の正儀壇上の儀を述ぶ。

(六)泉智泉師に　泉師十大弟子の一人。

(七)また刹云云　塔を瓶とする旨を示す。

(八)まかしゃ　寶瓶と譯す。

旨なり、(一)行用中位の壇義之れに同すべし。薩埵所持の標示も兩手に在りて此の義を示す、此の間委旨あり、嫡嫡相承を尋ぬべし。兩部の大事は薩埵の掌中にあり、大師の兩部を傳來す、豈に是れ徒然ならんや。之れに依て此の兩部の大事を以て傳法師位の印明となす、其の旨常途の謂ひに混せず。而るに世人習學の大體は、みな大日の印明に於て淺深重重の義ありと思へり。其の條然るべしと雖も(二)受明の分齊に超えず、何んぞ傳法の用心となさん。今相承の意は(三)彼の談には非ず、傳法授職の儀に於て、重ねて此を決定するの印可なり。此れを以て傳法の大事となし、別に傳法阿闍梨位等の名を得、此の意に非ずや。先づ五股の印とは灌頂受法の時、淺深の兩位通相授與の金剛なるが故に、此の印を以て此の義を決定す、是れ則ち三昧耶本性戒相等なるが故に、本有の義邊を以て、暫く胎藏の因位傳法の印となす。然りと雖も猶ほ智體を取るが故に、金剛字句智智の明を誦し、(四)一刹五點の理を捨て、五大五智の言を取る。次に刹とは是れ果德三昧なるが故に、(五)行儀の時に彼の授與の上に潛かに觀行し、之れを置て印可となす、此の義なり。また一義あり、(六)泉師の圖並びに一經の行儀なり、此の事を決定せんが爲めなり、更に下に之れを出すべし。(七)また刹の印に於て、(八)まかの

(一)是れ云云　大鉢は水に異り瓶に異るを示す。

(二)而も云云　寶瓶の義を示す。

まかの義あり、殊に傳法の印となす、寫瓶の本、獨り此の職位に在て詮となす。また灌頂の名字は專ら此の事に依る。法佛は大悲を以て智水を衆生の身器に灌ぐ、阿闍梨(ジャリ)また彼の法水を傳持して遺漏せず他に傳流す、然れば則ち此の法水瀉瓶に非ずんば之れに湛へず、之れを持せず。此の義を顯さんが爲めにまかの標示を以て傳法の祕印となし、瓶水灌頂の儀を決定す、尤も是れ秘旨なり。(一)是れ釋迦の大鉢には供養を受け、彌勒の水罐には理水を納るゝが如きには非ず、其の本源も潛かに此の傳法の智水より出でたり。然りと雖も直ちに五智の奥旨に當らざるが故に、常敎の論說となす、彼の二器共に物を納れ物を受くるの器なり。而るに大鉢は世間の供養を受く、出世五智の寶に非ず、水を置いて傳持するに其の用に堪へざるをや。執の義是れ疎、また水罐只だ水を收むと雖も、偏へに水の執持在て、口を閉ぢ五智の花莖を生ず可からず、或は世間となし或は眞如の理水となす。(二)而も今寶瓶とは五智の種子法水の潤中に在り、花葉滋茂し果德開敷を成す、是の故に瓶の口の枝條に、或は花樹を用ゐ、或は蓮花を用ふ、而して花樹は五智菩提の樹王を表し、猶ほ深旨となす、蓮花は水生に約して理水の義に離れず、是れ當時の所用に於て勝劣を存すべし、灌頂の瓶の枝條

多く樹枝にあり、之れを思ふべし。(一)顯家は成佛の義なし、此の祕密の標相あり、既に五智の稱寶なし、何に因て花果を生せん、偏へに法水傳持あり、當會說法の一義なり。(二)また此の花瓶に於て二義あり、自ら兩部の用心なり。世間土地所生の花を取て瓶中の水に置き生長せしむとは、胎藏は無明の種子所生の花葉を以て、如來五智の法水に挿めば萎まず落ちず、是れ煩惱を以て菩提となすなり(三)また自在天の活命受記の灌頂なり。又た瓶中の別種より更に花葉を生ず、是れ無明の種因を取らず、直ちに五智法身の淨種より此の妙覺の敷花を成す、金剛界灌頂法佛傳來の宗要なり、此の間委曲あり、思ひを留むべし。

(四)檜ノ尾の口決(閼伽印處)に云く、次に平等智に入るとは、口決に云く、水性の平等に一切法に遍するが如く、性淨智水を顯さんが爲めに情非情を捨せず、一切の法に遍し方に平等性智に入るなり。次に文に、諸の聖身を浴して當に灌頂地を得當しと想へと、淨の沐浴を諸の如來に獻ずるに由て灌頂の位を得、諸佛の智水灌頂を被るなり。二手腕を合せ、二中指以下の四指頭相ひ合せ、右左の頭指(ハシ)を以て大指の甲の上を捻して、掌を仰け開き窪まして碗の如くす、即ち右の水碗を以て之れを上に置け、若し水碗なき

(一)顯家の異りを示す。顯家の

(二)また云云瓶と華の二あるを示す。

(三)また自在天云云三十卷の教王經の意を取る。

(四)檜ノ尾云云自下瓶說の本文を示す。

時は直ちに之の印を作り、印の中に鑁(バン)字を觀じて、想へ七寶の椀の餉伽(ショウギヤ)、法界の量に等しくして、清淨なる八功德水を滿すと。文 此の文の商佉(シヤウギヤ)の印となすは、是れ𑖭𑖽𑖨𑖿𑖮𑖿𑖮𑖿の印なり、𑖭𑖽𑖨𑖿𑖮𑖿𑖮𑖿(シヤウギヤ)是れ同じ、印形もまた全同なり。凡そ灌頂に寶瓶、綺綵、莊嚴、加持を用ふ、灌頂寶瓶の稱尤も此の由なり。(一)而して此の閼伽(ハ)また灌頂の義なり、平等性智は是れ寶部の三昧灌頂の總位なるが故に。決の文に印は此の傳法の印の𑖭𑖽𑖨𑖿𑖮𑖿𑖮𑖿なり、之れに依て閼伽の時に百字の明を誦す、是れ百八三昧諸佛の功德にして、彼の瓶中に納むる所の物體、水を持して行道加持し、殊に讃頌の諷詠を揚げて諸德の稱譽を示す。成佛の要事とは、偏へに諸德の圓滿の爲めに、彼の四智の讃嘆此の義を存す、是の故に他家百字を以て讃とするなり。長慶公の此の閼伽の處多く由あり乃至師の口決に云く、三水に從ふべし、其の情(こゝろ)甚深なり、密が中の秘密の故に、顯はに之れを載せず云云 此の意は灌頂の深旨を存するか、口決の意準知すべし。凡そ閼伽の作法、灌頂の得益の義は、諸尊の瑜伽に之れにあり、爾らば決の文に𑖭𑖽𑖨𑖿𑖮𑖿𑖮𑖿の印を以て一字の智水を觀ず、尤も是れ灌頂の祕旨なり、(二)彼の行儀は阿闍梨自ら持瓶の儀を作す、經文此の義あり。彼の中位四隅の現圖、自ら他の所持に非ることを顯すなり。また瓶

(一)而して云云閼伽亦た灌頂たるを示す。

(二)彼の行儀云云阿闍梨の瓶を持するを說く。

中に各〻五部を具すと雖も、一水の義に依て一字を觀ず。口決の文一師の口、所以ありや、(一)是れまた宗の大事なり、恐るべし憚るべし。然れば則ち率都婆とは現證高妙の果相ありと雖も、智水傳法の要義なし。ॐ ततः とは(二)偏へに法水收持の理あり、勝相の妙德を得ず、而るに此の一印兩義を兼ね深旨を失はず。中ん就く ॐ ततः の義は、傳法の義とすること之れを祕すべし、故に先づ率都婆に約して無所不至といふ、其の意明かに知んぬべし。また ॐ ततः 無所不至の名を得べし、納るゝ所の智水の功能なり、決の文の水性平等にして、一切法に遍すとは是れなり。敎王●略出の兩經の灌頂機の說文に云く、此の曼荼羅に入るゝには、是器●非器●簡擇す可からず。文 是れまた智水平等の灌頂を說いて兩部の通授の玄理を示すなり。凡そ灌頂受法の人は、瓶水の實義に依らば、(三)是器●非器●に通じて之れを授くべし。而るに其の所得は淺深前後の別なし、只だ是れ一相平等なり、彼の上界凡地の職位は、前成後成の軌則、功德全一にして時分平等なり。此の昇壇の一義に於ては三世の久近を論せず、體性周圍無滯無礙なるが故に、偏へに圓凝の勝相あり、前後不別なり、是れ法界性智の瓶水灌頂の實談なり、秘家速疾の要灌頂の妙儀にあり。是の故に最初の文は專ら宗旨を明す、決の文の情非情を

(一) 是れまた云云 塔と瓶の義を說く。

(二) 偏へに云云 瓶は傳法の一名のことを示す。

(三) 是器云云 授法するに塔へるものは是器、然らざるものは非器なり

捨てざるの釋また是れなり。非情とは非機の人なり、心識を具すと雖も未だ覺心を顯さゞるが故に。是器は是れ有情なり、(一)本具の心智を顯出するが故に。其の意世間の情非情に亘りて依正の別義を論ずることなし。また生●佛●是器●非器●に就て同じく一味の甘露に沐す、(二)而も佛は是器の故に、直ちに佛位に居し、凡夫は非器の故に暫く凡地に在り、今智水の流入に依て平等の法流を稟く、自今以後智水大海の上に大敎の船筏を泛べて、生死の群徒を渡すべし、專ら是れ諸佛灌頂の大益を明し、生●佛を分たざるが故に簡擇すべからずといふ。彼の阿難稱嘆の詞に云く、佛法の大海水といふ、此の意に合するか。然れば則ち灌頂の要旨最初の結緣にあり、傳法印可は瓶水灌灑の大事に極まる、凡聖同位の軌儀、水性平等の理を以て、灌頂の大義となす、簡擇すべからずの方軌大悲加持にあり、是れ等は直ちに佛位に(三)位するの行相、終に以て淺深初後の異なきなり。また此の灌水の義なくんば、倒懸の衆生法に安住すること莫し、水の任持加持に依て須彌の散動なきが如く、また五種三昧の中の安住三昧に準せば、渴乏の人の水を飲んで、蘇息するが如く、灌頂授職の時、智水の天の甘露を服す、此外進求安息の處なし、また此の智水の潤澤なくんば、無明枯竭の有情の佛種、既に死滅

(一) 本具云云 有情と非情の二を辨ず。

(二) 而も佛は云云 凡夫と聖者との別を判ず。

(三) 位 住の字か

すべきの義なり、決定して二乗趣寂の理に同ずべし、故に表制に聲聞小乘に對して菩薩大士の灌頂を嘆ず。(一)其の意は灌水寫瓶の義を明す、譬へば竭瘦の人、水を飲まずんば命盡き死至るべきが如し、今決定滅死無窮の患あり、而るに始めて此の生に於て智水を受用し、普ねく廣大の加持を以て自他を分たず、器●非器を簡ばず、(二)平等普灑の方便を作すが故に此の勝益あり、自身進入し他身も得道す。然れば則ち彼の結緣の輩は善趣に轉移して終成佛果の益あり、傳法の人は大法を持して、佛種相續の業を施す、皆な是れ智水灌頂の致す所なり。此れ等の義を以て、此の鈔の最初に、略出の簡擇すべからずとの文を引き、(三)最後に瓶水平等の義を成ず、初後一揆にして灌頂の奥旨を顯し、また大師の釋の中に、大日と宮城との依正を以て五智の義を釋す。敎王等の經に敎主五智等を說く等、殊に密乘不共の灌頂の大事なり、此の職位を踏むの人を以て尊主となすの義なり。其の正報とは所納の五智、其の依報とは是れ能納の寶瓶なり。此の能所の五智契合の時に、法身傳法開甘露門の說法あるが故なり。また是れ灌頂の深旨なり、此の意を得て義を察し萬文を見るに、灌頂の理致を說かざることなし。また大師(四)相承の密印に誠證あり、彼の(五)資の智泉師、圖像灌頂の二尊の(六)持する所は

(一) 其の意は云云。自下還生を明す。

(二) 平等云云。普く灌灑することを明す。

(三) 初後云云。自下依正智を明す。

(四) 相承。泉圖なり。

(五) 資云云。資泉師像圖灌頂に造る。

(六) 持する所。寶冠を示す。

此の兩印の義を示す、寶冠、寶瓶の兩儀則ち殊なり。則ち是れ灌頂の要儀なり。寶冠を以て三界法王の尊號を得、頂に在りて高勝の莊嚴を表し、灌頂寶冠を以て三界主とするなり。胎藏の五股の印は是れ寶冠の印、身分に約して此の界傳法の印を示す、寶瓶を以て平等性智を得、ॐ ॐ ॐ圓滿の腹中に於て平等の智氷を湛ふ、是れ寶部の福聚なり。金剛ॐ ॐ ॐの印は心智に約して、此の界の傳法の印を顯す。南方灌頂部諸儀の中に、兩種に依て兩名を得、其の說、餘に涉らず。(一)また殊に寶冠灌頂の故に、海會の聖尊諸天の名あり、經の中に念誦天と云ひ密語天と云ひ、漫荼羅衆の諸天といふ、冠帶の莊嚴に依るが故に此の名あり、況んや色界頂の成覺に此の義無きをや。彼の圖に諸天灌頂と名け、外相は天上の儀に約す、胎藏外迹の意なり。寶瓶を以てとは、彼の圖に一切菩薩灌頂と名け、是れ內證の密儀に依る、金剛秘要の內儀なり。彼の賢愚經に頂生王の灌頂を說て、四天●寶瓶を提げ、天帝●寶冠を持するの義を明す、是れ人王治世の淺儀たりと雖も、法帝傳法の深致に準知すべし。(二)また寶冠の印に兩說あり、大日三昧耶の印は、諸軌に寶冠の印となす、此のॐ印は諸師之れを用ふ、彼れ一佛を表して頂の五處に置き、此は五佛を盡して頂上に安ず、之れを以て異となす。彼の泉

(一) また殊に云云。自下天尊を示す。

(二) また寶冠。自下冠印に二あるを示す。

師の圖像左の如し、知り安からしめんが爲めの故に之れを出す。

朱 諸天灌頂神

朱 私云
天冠を持す是れ寶冠なり。

朱 菩薩灌頂　一切菩薩灌頂神は三所にあり形同じ

朱 私云寶瓶を持す、直く寶を盛り枝條あらず

朱 弘仁十二年四月十六日記　僧知泉云云

(一)また法三云云　自下二名の別を示す。

(二)彼の胎藏云云　自下二名同なるを示す。

(三)凡そ金剛界云云　金の二重を示す。

(四)灌頂　灌頂の梵語の略名。

(一)また法三大王授職の記の文に依らば、今兩部印可各字分別か、表裏の義あるべし。彼の記に金剛界の印を以て阿闍梨位の總印といふ、此の意は塔婆・寶瓶共に人の義を表す。故に阿闍梨位の印といふ、其の義上に分別するが如し。胎藏界の印を以て傳法の總印といふ、此の五股とは都法五智の三昧耶形なり、法に依て傳法といふ、二界を以て是れ人法とするなり。慶公の云く、慈恩の言く、[illegible]を阿闍梨位を結ぶ。云云　此の文は金剛界[illegible]の印を阿闍梨位とするなり。また檜ノ尾の東寺の授與の記に云く、最後に傳法の印を授く。云云或る本には傳法の一印

彼の檜ノ尾の秘口に、五股を以て大事となす、(二)彼の胎藏を授與するは後に之れを行ず、金剛は先きに之れを修す、然らば胎藏を以て傳法の印となし、五股の契を用ふるか。實義に依らば傳法則ち阿闍梨位なり、法を傳ふるの人、阿闍梨位に非ずや。大師の錄の文に、檜ノ尾奏狀等同一義を存せり。(三)凡そ金剛界の大事に於て、殊に傍正淺深の習あり、(四)[illegible]の要旨專ら此の界に在るが故に。然らば則ち先師僧正大阿闍梨耶の口決に三重の異を存す、餘人敢て知らず。或は印契に就き、或は密語に就きて自他相傳の同異、諸流屈曲の面受、此の界其の習多し、意を留めて稟受すべし。是れ則ち金剛

(一)凡そ高祖云云　弘法大師の證を出す。

(二)六大云云　六大の明を掲ぐ。

(三)大事云云　率都婆を以て極秘となすことを示す。

は智に依て邪正を差別す、唯理全一の胎藏に同じからざるなり。(一)凡そ高祖大師は、彼の兩部の經文の六大の文を以て、成佛義に之れを引いて本據となし、宗の玄理を談じ、兩頌を結んで秘要を顯し、六大を以て體性となす。みな此の兩部灌頂の印契密語を示す、況んや是れ唐の阿闍梨の頌文にして、兩部師位を兼ぬるの祖、誠に此の文を見て疑はず、中ん就く經文を以て印契の明證となし、(二)六大の種子眞言を以て秘明となし、而も分別して兩部の密語となす、尤も此の事を秘すなり。其の中一字は猶ほ以て秘惜して他の字を用ふ、此の二界の大事は、諸法の根本體性となす。此れを以て所釋の憑とするが故に、潛かに六大能生總體の儀之れを示す、偏へに是れ兩部の印可は即身成佛の要を指す、兩壇傳法の儀あるが故なり。また此の兩印の通途は自他家の先德、多く率都婆を以て(三)大事の最とするか。慶公等は梵文を以て此の名を書す、其の號を秘せんが爲めなり、無所不至の名を用ふ、また此の意なり。他家の安然、師口を記して云く、無所不至の印は、傳法の大阿闍梨、獨り此の印を作す、新學の者輙く之れを見聞すること勿れ。云云　而るに先師僧正、光明眞言を予に授くる時、示して云く、此の五股の印とは、灌頂の大事なり。自今以後尊法の中、灌頂同一の印明あるべきなり、入壇以後、傳授を許すの尊法は、此の意あるが故なり。云云　是れ則ち本軌を離れて阿闍梨の用心となす。先德傳習の時此れ等の印明を用ふる事なり、此の意は五ぁ字の契印とするか。法皇の金剛界の御次第に云く、吽字ありて五股杵を生ず、即ち五胎秘密を作すなり。文　先師此の御說を存するか、尤も以て甘心す。又た慶公、更に外縛五股の印を結んで、想へ心に於てぁ字あり、諸法言說を離れたり、想へ了りて眞言を誦す、歸命ぁ。乃至ぁた云く、定印に住し、想へ心に阿字あり、諸法本不生なり、此の字變して縛字と成り、自性言說を離れ、阿字と縛字と字門是れ異なりと雖も、所證の理に至ては究竟して皆な之れに同じ。是の如く想ひ了りて五股の印を結び、金剛手の眞言を誦して、身の五處を加持し、縛字を句の上に加へ誦す。是れ等は極秘密なり、輙く示す可からず。云云　此の文はぁぞの契並びに兩部同一の秘旨を嘆ずるなり。また阿字●縛字を成じ、此の字字轉生するは常說に非ず。然りと雖も、兩部元より異處に非ず、理智の本體是れ同じ、本來の理の上に諸佛の覺智あり、此の兩部の大宗に契ふを(一)毗盧遮那と號す。今兩壇の職位此の理を稟承す、一異を論せず、(二)彼の弖伽の中位手印、金剛頂の一偈、見法三昧耶全同此の義を顯す。殊に宗要の故に、顯露を恐ると雖も左に

(一)毘盧遮那　大日如來なり。

(二)彼の弖伽　瑜伽にして手印具法を示す。

載す、之れを思ふべし。

[朱]金剛解脱印　普賢三昧耶

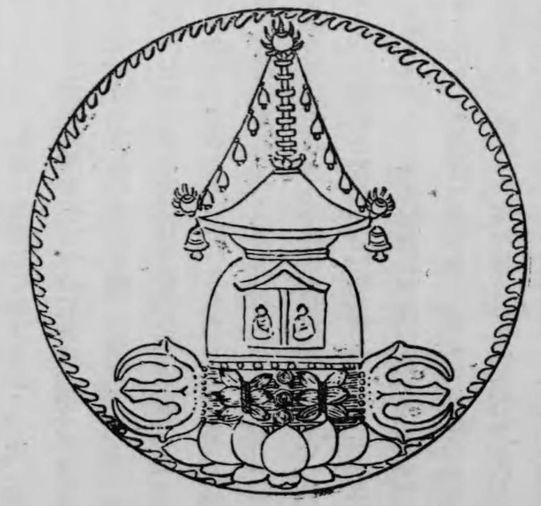
[朱]此印は上の三昧耶形の如し。大指の横なるは四智の邊なり、四佛の爲めに中指の竪なるは法界智中央なり、心を以て頂と爲すなり、是れ横竪合して五佛となす、四佛は理の故に横なり、大日は智の故に竪なり、是れ兩部二印を合體して義旨を顯す、生佛因果一處にして差別するが故に三昧耶平等の印の名之れあり。

[朱]略出に云く　能く一切契尊主となる云云

(一)また此の兩部の印明は、是れ所説の敕詔に於て印璽の驗を下すなり。所謂る印契とは手印の故に、殊に傳法の印璽といふ、密語とは是れ勅詔の文なり。(二)此の敕勅ありと雖も、若し印文無くんば虚妄の疑あり、衆生信敬奉行せざるが故に、此の印可を以て決定せ(三)令め、他の爲に明藏を説くなり。爾れば印契は猶ほ法帝の直體にして、其の義法佛に親し。密語は流來の宦符にして、其の理聊か疏遠なり、故に印を以て宗要となす。また是れ吾が家の恒規なり、諸敕に於て闕して書せず、誠に此の一事なり、仍て印可といふ、深意之れあり。自餘の三密の明藏に同じからず、而も傳法阿闍梨、

(一)また此の云云　自下印璽を示す。
(二)此の敕勅　以下印の不共を示す
(三)令　一本に合の字に作る。

[朱]中臺大日三昧耶



[朱]略出經第三に云く

鑁輪壇の中に於て蓮花臺座を畫き上に率堵婆を置く、此を金剛界自在の印と名く。文

六卷本　自然印文本より本來の義あるか

[朱]此の文に横杵の文なし、但し率覩婆必ず杵上に在るべし、故に別説せざるか、東方三昧耶形に横杵の文あり、此の圖は青龍寺本なり貞觀寺金剛界の敷曼荼羅の圖之れに同じ。

(一)然れば云云　自下兩部の位を說く。
(二)自今　以下敎誡を示す。
(三)總持　眞言なり。
(四)染着　自下其の過患を說く。
(五)今更　自下安樂を示す。
(六)此の外　自下離凡を示す。
(七)三界　自在を示す。
(八)胎藏云云　自下冥會を示す。
(九)ぼだい　正覺と譯す。

獨り如來の長子正嫡となり、此の二種の印明を以て、長夜の中に於て如來使となり、法炬を照して永劫に相續して佛種絕えず、此れ等の大事の因緣、自家傳法の要義あり。(一)然れば則ち我等本來理性の五智は、測らざるに自ら得、胎藏如來藏性に居し、今生尊者の所に於て明藏の附屬を得、妙覺の職位を歷。其の義は凡聖一味の瓶水に浴し、印可決定の契明を受け、(二)自今以後法界の群徒のために三昧耶を說き、(三)總持を傳布するの外他營ある可からず、是れまた大日薩埵以來、師師敎誡の誓約なり、此の生死の當處に於て化利を施すべし、(四)染着して元より生死に住する者には、此の生死を以て大過患となす。不染にして(五)今更に生死に住する者は、此の生死に於て大安樂あり。是れ瑜伽の秘要、大乘の詮旨なり。之れに依て金剛臺に昇て、金剛界の覺位を成じ、智身の勝位、(六)此の外何んぞ金剛秘號の稱譽を求めん。諸佛授記の儀則に同じく、更に凡境の族類を隔てたり、名體既に此の如し、豈に悅ばざらんや。然れば則ち生死に住して煩ならず、進向すべき處なし。(七)三界自在の利益は今正に是の時なり、宜しく意を留むべし。此れ等胎藏の理より出で、金剛の智に入り、また此の智より出で、(八)胎藏の理に住す、三世の(九)ぼだい正覺に到るの後、衆生の心性に冥會して大悲の加持を作し、勝益無窮なり、

(一)高祖云云　祖意を示す。
(二)路に作る。一本正路
(三)偏へに云云　自下信行を說く。

密家此れを以て用心となす、聖位の所說に此の意あり。彼の靑龍の三心等の詞は、(一)高祖の平等平等の義此の理を明す。生死に在て生死に染まざるは、殊に是れ灌頂の肝要、不同にして同、不異にして異、瑜伽者其の旨を存念すべし、兩部の義理既に殘ることなし、一宗の玄極今方に盡きたり、嫡嫡の稟承其の理此の如し、敢て以て疑を成すこと莫れ。凡そ上來義門の大綱、經軌の說文に依り、佛家の大宗に任せて、當代無窮の推義を破せん爲めに、童蒙愚昧の輩に對して、暫く一往の決擇を設く、敢て所案の義を以て正意とするに非ず、但だ潛かに悅ぶ所は、彼の本書、祖德の深重を貴び、翰墨を携へて相承の眞實を知る、是れ生涯の大幸、黃壤の資糧、此の記鈔に及ばずんば此の大利あらんや、而して心底に辯ずる所、筆端呈はし難し、理深ふして詞拙なき故なり、一を以て萬を察す斯の謂ひか。若し其の淺深の義旨を論せば、凡智豈に佛境の難思を測らんや、また彼の法相の是非に約せば、自宗屢〻常敎の談說に同ずるものか。然る間片言片義其の(二)路に當る可からず、其の一理を得べからず、但し是れ先師指授の餘潤なり、(三)偏へに僻解の謬義を言ふこと勿れ、海會の衆聖、慈恩哀矜して、義旨の正邪を證明すべし。良に以れば法佛直說の印明、祖師傳授の大事を以て、理致の合

違に依らず、智慧の明昧を糺さず、横に凡身を轉じて直ちに佛位に到る、手に此の印璽を執れば、法界其の理に應ず、此の密儀を佩ぶれば法爾に其の用を施す、佛陀猶ほ違越せずして方に恭敬す。吾れ等苟くも退下無くして信行すべし、詮要只だ此の事にあり、餘門に遊ぶ可からず。方に今相承の血脈を擧ぐれば、敎に於て兩部ありと雖も、傳持の人は別異ならず、傳法灌頂の大阿闍梨耶の一一の(一)名字をいはゝ、

第一大祖 マカビルシャナ サタタギャタ(大日如來)　第二 ハザラサトバ(金剛薩埵)　第三南天大德比丘(龍猛)

第四普賢阿闍梨耶(龍智)　第五大薦福寺三藏和尚(金剛智三藏)

第六大興善寺三藏和尚(不空三藏)　第七青龍寺東塔院和尚(惠果)

第八本朝根本高祖大師(空海)　第九貞觀寺僧正大和尚位(眞雅)

第十南池院僧都和尚位(源仁)　第十一圓成寺僧正大和尚位(二)(益信)

第十二寬平禪定聖主(三)(金剛覺)　第十三香隆寺僧正大和尚位(四)(寬空)

第十四遍照寺大僧正大和尚位(五)(寬朝)　第十五喜多院大僧正大和尚位(六)(濟信)

第十六禪定二品親王(七)(性信)　第十七成就院大僧正大和尚位(八)(寬助)

(一) 名字　弘法大師以後廣澤流の祖を揭げたり。
(二) 益信　圓城寺開祖德治三年勅して本覺大師と諡す。付法十六人。
(三) 金剛覺　宇多法皇、金剛覺と號す、仁和寺密嚴院開基、付法十三人。
(四) 寬空　香隆寺別當、寬空法皇の付法なり。
(五) 寬朝　遍照寺開山、圓融帝の師、付法十六人。
(六) 濟信　仁和寺喜多院。
(七) 性信　二品親王大御室と名く、長和帝の第四の王子、付法二十人。
(八) 寬助　付法三十三人。

第十八高野二品法親王(一)(覺法)　第十九紫金臺寺禪定二品親王(二)(覺性)

第二十喜多院二品法親王(三)(守覺)　第二十一蓮花光院大僧正大和尚位(道尊)

第二十二寶持院(四)權僧正大和尚位　第二十三先師(五)僧正大和尚位[朱]只法印極官の事血脈書落す

第二十四權律師法橋上人位弘融[朱]仁和寺心蓮院

已上毘盧遮那法身如來より予に至るまで、三國傳來師師稟承して、五智灌頂の職位傳燈相續して二十四代、今に斷絕せず。

當卷の內篇目百三十箇條、追て猶ほ之れを注加すべし。

(一) 覺法　高野御室と號す、白河帝の第四の王子、付法十二人。
(二) 覺性　天仁帝第五王子、付法四人。
(三) 守覺　後白河第二の王子、付法十三人。
(四) 權僧正　覺親僧正なり。
(五) 僧正　寬智僧正。

國譯秘密要秘鈔第八 終

國譯傳法灌頂戒場作法事記第一

金剛弟子曇寂

今此の記は、(一)遍智院僧都の授式に就て之を記す。然るに當流に於て近來の諸德、高雄地藏院、贈僧正恭畏和上、長州滿願寺宥雄和上、勢州眞常院亮典和上、同亮元和上、尾州性海寺實紹和上、同亮然和上、當山先師禪杲和上、各〻師承によりて口決を記す。少く異同あれども大旨違することなし。今余衆說を合會して以て一決となし、同なるものは之を削り、隨て出沒あれば彼を以て此を補ひ、此を以て彼に足して互相に具備し、之を牒文の下に係て以て檢覽に便す。又煩しく各各の名を標さず、但だ口決の兩字を安き、以て相承の說にして、胸臆に出づるにあらざることを顯す。若しその自ら謂るものは、更に自の名を標して、口決に濫せざらしむ。事記を以て名ることは行事を便せんが爲め、但だ事相を辨じて且らく甚深の理を檢覈することを置く、理記に於て之を明す而已。灌頂儀式に其の三種あり、一には(二)庭儀、二には(三)堂上、三には(四)無作法。今第三の義に就きて之を記す。

(一)遍智院　名を道教といふ、遍智院僧都と稱す、三寶院流中の地藏院流、略名十巨方の始祖なり。元と成賢僧正の室に入り密行精勤し其の嫡弟となる、是れ醍醐山の正嫡なり。付法に淨尊、親快、思融、深賢の四人あり。今此に掲ぐる處は道教の作製せし傳法灌頂授式の文を牒して、曇寂師之を細註せり。後此流より東寺の高慈、恭畏出で其の流を張り、德川時代に五智山曇寂出で、次て葛城の慈雲、豐山の法住出でたり、蓋し曇寂はその流祖の授式を注釋せるなり。此の流にては、三重の外に一多法界兩箇の三重の秘印明を相承するなり。

(二)庭儀　庭上の儀式をいふ、灌頂には庭上行列を大事となす。

一先づ(一)受者加持作法。　當山は齋食(サイジキ)の故に齋後に於て之を作す。

便宜の所に於て之を作す。　口決に云く、儀式の時は衆會所に於て阿闍梨の座を設く。無作法(ムサハウ)の時は便宜の所に隨て之を作す、治承記に、學問處に於て受者加持作法すといふ。

受者參入等。　口決に云く、阿闍梨房とは即ち衆會所なり、諸衆(二)大阿(ダイア)の房に集會し、而して後に大阿を供養して戒場に入るなり。その加持所と職衆(シキシウ)との間は簾を以て隔てを爲すなり。無作法の時は、但し屏風を以て相隔てゝ人をして其の作法を見せしめず。師は東に向ひ(三)資(シ)は西に向て相對して着座す。檜扇(ヒヲフギ)を開きて其の上に五股を置く、資も亦此の如し。扇の右の端に(四)柄香爐(ヘガウロ)を置き、但し其の柄は疊の上に在るなり　左の端に袈裟袋(ケサブクロ)を置き、その中間に(五)獨鈷(トクコ)を置く、(六)珠は尚ほ左の腕に在るなり。

次に師資共に(七)淨三業(ジヤウサンゴフ)等。　口決(クヅ)に云く、下に出す所の或說の(八)被甲(ヒカフ)●(九)空網(クウマウ)●(一〇)火院(クワヰン)の三種の印言は、若し之を用ふる時は、この被甲の次に之を結誦す。是れ或說の故に之を出す。

次に大阿闍梨五古(ゴコ)を取る等。　口決に云く、大阿五古を取り、不動慈救三世大児の

(一)堂上　堂に入りて後の儀式なり　(二)無作法　庭儀なき堂上の儀式なをいふ。　(三)受者加持　灌頂を受くるものに加持すること。　(四)大阿闍梨　大阿なり、略して大阿、灌頂阿闍梨とも主として阿闍梨なり。　(五)資　弟子なり　(六)柄香爐　柄の香爐なり　(七)淨三業　念珠なり　(八)被甲　前の護身法の一、甲冑を着し魔軍を降伏するの意、大悲門なり。　(九)空網　具名は虛空網にして、又は金剛網といふ。虛空に網を張りて諸魔入る能はざらしむるなり。印と眞言あり。　(一〇)火院　火炎とも金剛炎ともいふ、結界の一にして、火を圍繞せしめて魔の入るを防ぐなり、印と眞言あり。　(一一)當流　地藏院流なり、又は略名巨流ともいふ。　(一二)師　堯辰師なり。　(一三)三部　胎藏界の說相は三部門建立にして、即ち佛部、蓮花部、金剛部の三部なり、大の三業を淸淨なしむるなり。印は蓮花合掌、眞言は唵縛(ヒ)羅(ラ)縛(ウン)運(ウン)麼(ボ)羅(ラ)縛(ウン)鉢(ハツ)羅(ラ)薩(サ)縛(ウン)穆(ボク)度(ド)憾(カン)といふ。

明を誦して各〻七遍受者を加持す。縱使ひ受者數多なるも、只一度に加持す、一一各別に加持するにはあらず。

次に阿闍梨位印明。　此に二說あり。文永記に云く、印の說文に於て、或は合掌して肩と齊しと、或は掌をして肩と齊からしむと云ふ、異本同からず。若し合掌の本に就かば、二水●二火を掌に入れ、二空各〻二風の側に附け、指兩手を合し、二地●二風の端各〻相ひ附けて肩と齊からしむ。若し合掌の本に就かば、兩手各別に偃(ヘン)立てゝ之を捧る。私に云く印可の時は合掌、具支の時は合掌なり。文今は式に出す所は合掌の義なり。

口決に云く、(一)當流の相承は、具支灌頂(グシクワンデウ)には合掌●合掌共に之を作すなり。宥雄記に云く、(二)師云く具支灌頂の時は、先づ受者加持の時に之を授く、是れ佛果の入位なり。夜の作法の時は兩部の職位に登る、是れ佛果の住位なり。今授職成道佛果を遂ぐるが故に、先づ阿闍梨位を授けて、佛果に入らしむる是を入位と云ふ。具支灌頂は合掌●合掌共に之を授く。先づ合掌を授け、次に合掌を授く、合掌は是れ胎藏(三)三部の阿闍梨なり。地・風合せ立て、自身の首と三部を表す。合掌は金界(四)五部の阿闍梨位なり。左右の地風に首を加へて五部となす　是れ三部を

日経蘇悉地経は此の説相なり、行者の心中に智具足する自身中に浄菩提心清浄の理あるを佛部と云ひ、自身の理の蓮花部に智あるを金剛部といふ。

(四)五部　金剛界の説相は五部にして、胎蔵の外に羯磨部、宝部の二部を加ふ、三部の不同なり。

(五)太秦云云　澄禅上人。

(六)三部　被甲前に掲げし護身法の中の佛部、蓮花部、及び金剛部と、被甲護身を總稱す。

(七)三轉　三たび轉ずること。

(八)結護　印明を結誦して行者を護ふ。

(九)結界　一定の場所を結護して、魔障の入らざるようにするをいふ。

開きて五部と爲す、從因至果の次第なり。夜の作法の時は從果向因の次第なり。文 問ふ其の授け様如何。答ふ口決に云く、先づ合掌、次に合掌、明各〻三反、牒を取て之を授く。[illegible]一句一二切りに之を誦す、假令ひ受者多きも一同に之を授け、結誦せしむるなり。　寂云く、(一)太秦桂宮院本に、眞言の次に功能の文を出して云く、若し眞言行者この明を持せば、一切如來常に覆護すべし、金剛薩埵常に親友と爲て、常に行人の心中に住したまふ、乃至 常に此の眞言を持すれば、諸の明悉く皆成就す、乃至 一切の見るもの皆悉く足を禮し、降伏して歡喜す。云云

或説には被甲等。　口決に云く、此の三印言は、上の(二)三部●被甲の次に之を作す。但し師のみ之を結誦するなり。雄和上の云く、當流は必ず此の三印言を用ふるなり、皆順に(三)三轉、明は三反なること常の如し、是れ自身及び受者を(八)結護するなり。後亦壁代に入りての結誦は、道場を(九)結界するなり。此等の作法畢りて、次に頌文を授與す、大阿兼ねて用意して之を懐中するなり。頌文に云く、

及び執金剛菩薩想を生ずべし。
菩提淨戒儀を求め學ばん

當に尊者に於て佛想。
我等尊者の所を歸依し

(一)三昧耶戒傳法灌頂の前に授くる戒法にて灌頂の豫備作法なり、之れ流派に由りて、今は順序異にす。今は土巨流に由る。

(二)十弟子　法會の時、大阿闍梨に附随して其の所持の小僧なり。十弟子とい持物を持する弟子なり。

(三)二人　六人、四人、二人もいふ。今は二人を擧ぐ。

(四)一藏　法の上の年數を云ふもの、なるが、今は順番の意なり、一藏は一番に同じ。

(五)草鞋　法會の時に道場内を歩むに履く木履をいふ。

(六)三衣袋　裂袋、七條袋、五條の内の大衣を入れ置く袋をいふ。

(七)念珠　珠數に同じ。

唯願くは闍梨哀愍攝　・不退位を建立せんと欲せんが爲めに
兩部界曼荼羅に入り　慈悲教示して我をして見せしめ
諸佛の所共の灌頂を受けん　是の故に至心に歸命禮せん。

右の頌文は別紙を以て上包して、勸請頌文と上書するなり。

一(一)三昧耶戒作法。

先づ立列次第等。　口決に云く、堂上と庭儀との立列の作法は、具には治承記及び外儀法則等の如し、無作法の時は、職衆なしと雖も、晴の作法に準ず。聊か列の儀式あり、先づ大阿闍梨、次に(二)十弟子二人、居箱一(三)藏大阿左香爐箱二藏大阿右次に教授、次に受者、一行に立列して進んで戒場に入るなり。或は十弟子を用ゐずんば、其の物具等は兼て壁代の内に入れ置くなり。先づ大阿、壁代の内に入る。その作法は次の章の如し　次に教授●受者、各〻座に着く。其の着座の法は、先づ座前に於て一揖し、次に(四)草鞋を脱ぎて座に着く、次に(五)三衣袋を左の脇に置き、次に扇を以て草鞋を直す。先づ左次に右　次に扇を開き敷きて香爐を扇の上に置く。右端次に三衣袋を置く、左端　次に身の威儀を調へ、右の手に獨古を持し、左の手に(六)念珠を持する是れ師傳なり。

(一)壁代　他流にては「ヘキダイ」といふ、灌頂の時三味耶戒場を圍むに之を用ゆ。その本據は理趣經に依るなり。

(二)兩壇云云　西方の金剛曼荼羅、東方の胎蔵界曼荼羅の兩壇なり。

(三)戒場　三摩耶戒場なり。

(四)内庫　灌頂を行ふ道場の内をいふ。

(五)運心　心を運ぶ、即ち觀念と同じ。

(六)法爾　天然自然の實相の儘をいふ。

次に大阿闍梨上堂等。　口決に云く、(一)壁代の東を經てとは、南向の堂に約す。若し東向ならば北を經て入る可し、大阿逆順の故なり。若し十弟子を用ふる儀ならば、大阿且らく正面に立ち留まる、其の時に一蒔居箱大阿の左より進み出で、壁代を順に巡りて入りて、居箱を左の脇机の上に置くなり。又二蒔、軈て大阿の右より進み出で、壁代を逆に巡りて入りて、香爐箱を右の脇机の上に置くなり。次に大阿闍梨進んで壁代の前に至り、それより折れて東を經て是れ逆巡りなり戌亥の角より内に入るなり、是は南向に約す、若し東向ならば未申より入るなり。

聊か東西を禮す。　口決に云く、未だ壁代に入らざる前に、壁代の後に於て之を禮す、東西各〻一揖し、先づ西金次に東胎是れ莊り置きたる(二)兩壇曼荼羅を禮するなり。問ふ(三)戒場の(四)内庫各別に揖する時は、其の義爾るべし、若し戒場畢りて亦内庫を作る時は、未だ曼荼羅を莊らず爲た何をか禮せんや。答ふ未だ内庫を莊らざるも、必ず東西を禮すべし、是れ兩部の方位なるが故なり。寂云く、是は(五)運心なり、未だ内庫を莊らずと雖も、(六)法爾の曼荼常に是れ莊嚴せり、彼の方位を禮するは是れ運心なり、運心は即ち是れ實相禮なり。

(一)高座加持作法　阿闍梨の三摩耶戒壇に登らんとする時、その壇を加持するなり。

(二)室生山　奈良縣大和國宇陀郡室生村に在り、弘法大師如意寶珠を埋めし處にして之を如意寶珠不二の道場といふ、密家所崇の大事なり。

(三)醍醐　京都醍醐山三寶院をいふ。

(四)山一山　室生山の略字なり、又以て秘號となす。

十弟子二人之を褰ぐ等とは。　口決に云く、今時は爾らず、十弟子物具を置き了りて出で、大阿は其の後自ら引き開きて入るなり。

次に(一)高座加持作法。　壁代に入り畢りて、高座の前に於て此の作法あり。

戌亥の角に於て高座を拜す。一度　口決に云く、立ち乍ら少し揖するなり。問ふ必ず戌亥の角か。答ふ此は壁代の入口を戌亥に開く時の事なり。或は道場に隨て向ふ方同しからず、若し東向の時は是れ未申なり、假令ひ何れの方にまれ、入口の角に於て高座を拜するなり。

次に辰巳の方を向きて聊か觀念あり。　口決に云く、一拜の後、立ち乍ら觀念を作す、(二)室生山は(三)醍醐より辰巳に當る、故に爾かいふなり。若し他所の道場ならば、必ずしも辰巳に局るべからず、但し其の方に隨て室生山に向て、此の觀を作して念珠をば摺らざるなり。叡云く、今の道場は東向の故に、未申の方に於て彼の山を拜すべし。

問ふ、(四)山一山本尊とは何ぞや、答ふ、所謂る如意珠なり。

次に右の膝を地に着け等。　巳下は高座加持を明す、扇を開きて右の脇に置き、其の上に五古を置き、右の膝を地に着け、高座の方に向つて高座を加持するなり。

(一)印する浄三業の印を以て額、右肩、左肩、心、喉の五處を加するなり。
(二)小金剛輪、小金剛輪印といふ、此れ請事を成辦せしむる功德ある印契眞言なり。
(三)金剛鐘大壇の上にて、金剛鈴と五股杵とを載せる器具なり。
(四)片供本文中に釋せり。
(五)火舍香爐を いふ、修法の時は 六器と火舍を一列に列べ置き、その中央に火舍を置く、六器とは、閼伽器、塗香器、華鬘器、を左右に置く故に六となる。
(六)誓水金剛誓水なり、誓を立てる爲めに飲ましむる香水なり。

次に淨三業等。　口決に云く、眞言の遍數、處處を(一)印する等常の如し、(二)小金剛輪の印處も亦常の如し。

次に五古を取る等。　口決に云く、不動は慈救　三世は大呪　各〻廿一反　加座を加持するなり。

次に立ちて小禮。　口決に云く、立て少し高座を揖して登るなり、扇は脇机の香爐の邊、便宜の處に置くべし。

次に着座の後等。　口決に云く、作法の時は鉢の聲の間相を聞き合せて、所持の五古を(三)金剛盤の上に置く、其音高く聞ゆる樣に之を置くべし。職衆其の音を聞きて無言行道を始むるなり。但し無作法の時は此の義なし、念珠をば左の机に之を置く。

次に(四)片供を取りて前机に之を置く等。　口決に云く、片供等を打敷に並べ樣は別の圖の如し。前机に置く時は、先づ(五)火舍を置き、次に前供の片供右方　次に後供の片供左方　之を置くなり。但し右の閼伽器の下に小土器を重ね置く、是れ(六)誓水の料なり。土器の多少は受者の數に隨て之を置くなり。問ふ已に六器を具す何ぞ片供と云ふや。答ふ前後供を備ふと雖も、其の所用の者は但だ是れ右の方なり、故に片供と名く。其の左方の供は但だ莊嚴の爲に之を置くのみなり。小土器を火埦にシタル也とは、火埦とは何ぞ。答ふ亮元師云く、火埦とは若しは花盤か、其の音近きが故に通用するなり。寂云く、和にハナザラといふ、即ち花盤なり。

無言行道之を始む等。　職衆五古を置くの音を聞きて、即ち(一)無言行道を始む、無作法には此の事なし。

次に(二)塗香等。　常の如し。

次に(三)加持香水等。　口訣に云く、(四)小三古の印、(五)枳里枳里の呪、(六)ゑ●す二字の觀常の如し、自身と及び受者と堂内とに散灑す。云云　此の時に(七)洒水器の蓋を之を覆ふ可からず、枝木に洒ぎ了りて之を覆ふなり。

次に(八)結界。　口決に云く、何故ぞ結界を兩度に之を爲すや。答ふ。前には自身及び受者を結し、今此は道場を結界す。

已上護身等。　本文と朱書と二說なり。大秦の本の付紙に云く、(九)鈴は行道の後なり、師主も或は行道以後に塗香●淨三業等之を作す。或は行道の間に此等を作さ

(一)無言行道言語なく靜かに行道即道場内を巡るなり。
(二)塗香身を清淨にせんが爲めに香を塗るの義にして、略して手掌の内外に塗り全身に塗ると觀念す。
(三)加持香水香水を加持して清淨ならしむ。
(四)小三古右の手にて三股の印を結ぶ印なり。
(五)枳里枳里此の眞言を以て小三古印にて加持す。
(六)ゑ●す　ゑ字の義を以て水を觀ずるなり。す字の義を以て水を入るゝ器なり。
(七)洒水器香水器なり。
(八)結界前に頭注せり。
(九)鈴金剛鈴なり。之れ受者を煩惱の眠より驚覺せんが爲めに之を振り鳴らす。之を振鈴といふ。

しめて、行道し了れば鈴を振るなり、此の兩說なり。問ふて云く、兩說の中には何が能く候哉、答ふ同じ事なり。但し師主は行道以後に(一)灑水等之を用ふ、尤も然る可きか。文寂云く、此等の說は皆作法の時に約す、若し無作法ならば、直爾に文の如く先づ塗香、次に加持香水、次に結界、次に振鈴なり。文

次に振鈴。　口訣に云く、先づ(二)右に五鈷幷びに鈴を執て左の手に渡す等の事は常の如し、又五鈷を取る眞言及び加持抽擲等の事なし、直爾に之を振るなり、十計り寬寬と之を振り、其後カラカラ二ッ三ッ計り振り收むるなり。外儀の作法の時は、無言行道、了りて職衆着座、暫くわりて之を振るべし、其の鈴の聲を聞きて敎授座を立つなり。無作法の時は、結界の後、聽て振るべきなり。

敎授師驚振鈴等。　口決に云く、(三)敎授座を立て壁代の戌亥の角に於て、少し差しのぞいて、大阿の氣色を窺ひ、次に受者に向て聊か氣色あり。若し受者貴人ならば蹲踞して氣色をなす此の時受者座を立て壁代の內に入るなり。其の作法は前の如く物の具を持し、敎授を先と爲して壁代の內に入り、高座の北東を經るなり。敎授は辰巳の角に寄りて受者を通し過して(四)禮盤の前に至らしむるなり。南方香爐を取り直して、三禮を爲し了りて、此の間は敎授蹲踞す袋と爐とを前机に置きて、先づ香爐を置き、次に衣袋を置く次に禮盤に登るなり。若し作法の時は、法用あるが故に、此の時に於て(一)總禮を催すなり。或は着座の後に物の具を置く、是れ一說なり

敎授總禮を催す。　口決に云く、敎授は受者の右の邊に居て、受者禮盤に登りての後、蹲踞して總禮を催すべし、只總禮と一聲之を唱ふるなり。其の後敎授も高座の方に向て一同に三禮するなり。大阿は總禮の間香爐を取り、或は金剛合掌するなり。問ふ。受者も同じく禮するか。答ふ。受者は(二)登禮盤の時、已に三禮するが故に此の時は禮せざるなり。但し無作法の時は此等の義なし、敎授受者を引入して登禮盤せしめ了りて、聽て退出するなり。

受者金二丁。　口決に云く、敎授着座の裡に大阿之を示す。但し初には小、後には大、程能く打つべし。此等の事は初めに敎へ置くべきなり、金の音を聞きて(三)唄師音を發す。

(四)散花師本座に還り了りて次に金一打。　口決に云く、(五)對揚の終りの句を、職衆牒を取り、金剛手菩薩の句終る時、金を打つなり。但し無作法の時は、金を打つこと一向に之れ無きなり。

(一)灑水　洒水に同じ。

(二)右に右の手にて、金剛盤上の五股と鈴を執るなり。

(三)敎授受くる受者に一座の行儀を指導するものをいふ。灌頂を

(四)禮盤　修法の時、又は灌頂に受者の座する具なり。

(一)總禮　職衆總て禮をなす故に總禮といふ。

(二)登禮盤　禮盤に登るをいふ。

(三)唄師　唄匿を唱出す師をいふ。唄匿とは翻して止唄匿といふ、一座の寂靜を期す爲めなり。

(四)散花　法要の時に華を散らすなり。散花師ともいふ。

(五)對揚　佛の德を稱讚する梵唄にして、唱出す人を對揚師といふ。

(一) 表白　受者が法を受くる事由を本尊に白すといふ

(二) 齒木　前の要鈔に頭注せり。

(三) 散杖　洒水を散ずる杖なり。

(四) 正受者　受者多數ある内の第一の代表者といふ。

(五) 戒體箱　受戒の文を入れ置く法具なり。

次に受者(一)表白等。　口決に云く、近代は表白なし、只勸請の頌を微音に之を讀むなり。

次に大阿闍梨等。　受者頌文を讀み了りて、次に香水を受者に灑ぐなり。口決に云く、香水の蓋は前の加持香水の時より、尙ほ未だ之を覆はず、(二)齒木に洒ぎ了りて後に蓋を覆ふなり。其の作法は此の時は加持すること無し、只三度器の端を打つて受者の頂に洒ぐ、(三)散杖を振らず、少しく頂に觸るゝ勢を爲す。此の如くすること三度、受者多き時は、先づ(四)正受者に洒ぎ、その後次第に次次の受者に洒ぐ。その散杖は更に水器に入るに及ばず、直爾に之を洒ぐ、受者多しと雖も。其の洒ぐことは只三度なり。

次に身口意を淨む。　此より香爐を取るなり。付紙に云く、先づ戒體箱を開きて戒體を取り出し、次に香爐を取りて前机に置き、戒體を開きて文を讀むなり。口決に云く、今時は授式を用ゆるが故に、只(五)戒體箱を開きて本式は其の儘入れ置きて之を取り出さず、直に授式を讀むなり。其の讀み樣は先づ香爐を取りて、題號及び眞言皆悉く之を讀むこと一遍なり。但受者のみ聞きて外に聞えざる程に微音に之を讀むべし。

(一) 初胎後金　初夜に胎藏界、後夜に金剛界を授くるなり、初後の事要秘鈔に頭注せり。之れ廣澤流にして小野流は初金後胎なり、之れ一法界多法界の岐る、處なり。

次に金剛界諸尊等。　口訣に云く、廣澤は必ず(一)初胎後金なり、上古は小野方にも其の意樂に依りて、初胎後金と授けらるゝ師も之れあり。今は必ず初金後胎なるが故に、今の傳に其の意ありと云ふ。文　寂云く、太秦の本には、今の傳に其の意あり、口傳に作る。覺洞院の本式には此の注文なし。延命院の大馬道の式に云く、或傳は胎藏界を先となし、金剛界を後と爲す、今は金剛界を先と爲す、其の意あり口傳を聞くべし。文　即ち此の文に依るなり。

曩謨薄日羅等。　寂云く、勝覺の本式には但し次の微瑟耽の一眞言を出す、元杲の式には此の二眞言を出す。今は即ち元杲に依る。眞言の句義は曩謨は歸命なり、薄日羅耽都は金剛界なり、薩薄沒耽は一切佛なり、南は多の聲なり。次の佛名は微瑟耽は淸淨なり、達磨耽都は法界なり。餘の名號は知んぬべし。

曩謨本者等。　本とは納婆薄、功德生か。無堪忍の眞言なり。

次に胎藏界諸尊を禮す等。　三三昧耶の眞言、具には疏の第九卷及び第十三卷の釋の如し。摩訶佉嚕拏誐羅婆虞左は大悲胎藏なり。

南無清淨法身等。　口訣に云く、已下の禮佛は皆漢音に之を讀むべし。寂云く、本式に云く、南謨毘瑟駄達磨駄都摩訶吠盧舍那薩縛怛他誐多、今は延式に係る。彼の式は具に假名を付けて云く、南無清淨法身毘盧遮那佛、寶幢、花王、無量壽、雷音、文殊、觀世音、彌勒、三部界會（今の佛名は都て皆延式に依る、本式と異る。）

大阿闍梨表白。　口訣に云く、以下說戒の文に至て、題號を眞言といふも、殘さず皆讀むべし、但し微音に讀むなり。

是に於て。（初度等。）　太秦の本には、是に於て菜甲方に今金剛弟子ムに作る。彼の本の付紙に云く、是に於て菜甲適〻引攝に遇ふて親り（そのあた）傳受を得たり。抑も遠くは大日如來より、有以和上に至るまで、胎藏界は三十九代、金剛界は三十八代、金剛界は三十九代相承傳來したまへり。然れば則ち小僧胎藏界は三十九代、金剛界は第四十代、傳授の次第師資血脈相承明鏡なり、方に今。文　此の付紙は本式に依る、其の原は延式に出づ。この一件は阿闍梨自ら相承の明鏡なることを述ぶるなり。延式の表白の題下の注に云く、（師資相傳は人に隨ふべし、但し規模となして此の一傳を擧ず、時に隨て改むべし）時に隨て改むべきは。後後は代葉次第に增加す、故に時に隨て之を改むといふ、謂く第葉を改むるなり。

方に今佛子ム。　寂云く、ムは當にム甲に作るべし。太秦の本にも今に同じ。本式には方に今金剛子菜甲といふ。文　初度重受は人に隨ふとは、太秦の本は方に今金剛佛子の上の傍に細注す、恐くは此の本を是となす。此より已下は受者の事を明す。夫れ受者には(一)初受重受の不同あり、二種の異りに隨て已下の文を改むべし。今の文は且らく初受の人に約す、若し重受ならば、重ねて覺位の灌頂を受けんと欲す等といふべきのみ。亮典上人云く、若し重受ならば、表白に重ねて菩提の勝心を發すと唱へよ。云云

又雄師云く、方さに今佛子とは受者の實名を唱ふべし。云云

何以忍緒。　口決に云く、忍に緒（ゆるがせ）ん。

佛子至心等。　已上は正しく(二)羯磨（コンマ）を明す。

但し佛性戒を授けん等。　初めに八門を標す。寂云く、佛性戒とは、下に出す所の四重十重を拵す。此の戒は菩提心を體と爲す、要を以て文を言はゞ、所謂る(三)ゑ（カリダ）ゑ心蓮花藏なり、蓮花三昧の因と名く、此を以て(四)戒體と爲す故に佛性と云ふなり。三昧耶とは平等の義なり、一切衆生等しく此の性を具す、故に佛性三昧耶戒といふなり。

(一) 初受重受　初めて受くるを、重れて受くるものとのこと。

(二) 羯磨　梵語にて業と譯す、戒の實際の作法に關することを明す。

(三) ゑ　于栗多心と翻す、自身の肉團心をいふ。

(四) 戒體　受戒に由りて受者の身心に生じ、心中に確持して失はざるものをいふ。

亦は菩提心戒と名け、亦は三世無碍智戒と名く、即ち此戒の異稱なり。

一には歸命等。　付紙に、香呂を置き(一)如意を取るとは、文永記に云く、問ふ如意と香呂を取り代る時は、毎度香呂箱を置くか。仰せに云く、便宜に隨て香呂箱に入れ、或は前机に置く、定まれる法則なし。云云　口訣に云く、此の中讀み曲異りあり。大馬道の式には、一つんば歸命等、此は律の假名を讀むなり。三卷式には、一つには歸命等と朱を以て假名を付けたり、授式には点なし、一者歸命、二者運心等と讀むべし、ハをタと讀むべし。寂云く、ニなンと云ふは所謂る連聲なり

第一歸命。佛子某甲　口訣に云く、某甲とは大阿の自身なり。

歸命眞言に曰く。　口決に云く、已下は皆眞言は一遍、印なし。云云

今須らく(二)五體投地等。　此に二說あり、一には五體投地せず、受者をして居ながら合掌して、南無懺愧懺悔無量所犯の文を唱へ、此の事兼て之を示し置くべし。今の朱書は、即ち此の義なり。二には畏師の付紙に云く、五體投地は(三)如法に之れあるべきか。師の云く然らざるなり、大阿聊か受者を見遣りて文を唱ふべし、南無懺愧懺悔等の詞も、大阿觀心に受者を見遣りて微音に之を唱ふ。云云　今も朱書の如きは當時は行せざるなり。

(一) 如意　法會の時に採る法具なり

(二) 五體投地　佛を禮す法、右の膝、左の膝、右の手、左の手、次に頭を何れも順に地に着け、佛を禮するなり。

(三) 如法　法の如くの意なり。

寂云く、此の二說は、各〻其の謂あり、當に人に隨て改め用ふべきのみ。初心の者は、畏師の義の如く、其の義爾るべし、若し重受の人等には初の義を用ふべきか。

第七請師の下、慈愍故。三反　付紙に云く、丁寧には三反之を唱ふ、略義には慈愍故許り三反之を唱ふ。

次に敎授を請ふの下。　太秦の本に云く、慈氏菩薩摩訶薩、佛性戒を受けんが爲に敎授阿闍梨、唯願くは慈悲を以て、佛性戒を受くることを得、慈愍の故に。雄師の云く、朱書に當流の式は何れぞや、答へて曰く、權僧正勝覺の式なり。文　寂按ずるに、本式と延式と共に此の二句わり。太秦の本は恐くは二句を脫す。今の本を正と爲す、今の本の奥書に云く、房玄の本を以て之を寫す。文　亦是れ當流の本なり。雄師所持の本も亦太秦の本に同じきか。

第八羯磨。　口決に云く、此の段許りは三遍之を唱ふ、是れ師說なり。問ふ。何故に但だ(一)羊石門のみ三遍唱ふるか。答ふ。本說三唱なる故か。禪要第八羯磨門に、終に是の如く三たびに至れ。云云　寂云く、羯磨とは、梵網述記勝莊上に云く、次に正く羯磨とは瑜伽に說くが如し、此より已後、まさに是の如く言ふべし。汝是の如く善男子、

(一) 羊石　略字なり。羯磨の

或は法弟と名く、我が所に於て諸の菩薩の一切學處を受け、諸の菩薩の一切の淨戒を受けんと欲す。(一)謂く攝律儀戒と攝善法戒と饒益有情戒となり。是の如くの學處、是の如くの淨戒は、過去の一切の菩薩は已に具し、未來の一切の菩薩は當に具し、普く十方現在の一切の菩薩に於ては今具す。此の學處に於て是の淨戒に於て、過去の一切の菩薩は已に學し、未來の一切の菩薩は當に學し、現在の一切の菩薩は今學す、汝能く受くるや否や。答へて能く受くと言ふ。能く菩薩を授くる、第二第三亦是の如く說き、能く菩薩を受く、第二第三亦是の如く答ふ。云云 又梵網文集第一に、瑜伽を引き畢て云く、若は一分受け若は全部受け、皆三聚淨戒の羯磨を用ゆ、故に三聚戒と曰ふ。文 問ふ。翻名は何ん。答ふ。羯磨疏一上に云く、初に釋名は所謂る羯磨とは中梵の本音なり、此には翻して業となす、謂く前務を成濟するに必ず達遂の功あるが故なり。明了論の中に亦同じく業と翻ず、現今の譯經、聲、羯磨を傳へて必ず翻じて業と稱す、古より今に至て羯磨を翻じて辨事と爲ることあるものは、此の義なきにはあらず、但だ功能を用ゐて往て翻ずるなり。云云

今正しく得戒に至るの時等。　此の時とは見れ三昧耶の時なり、何となれば、

(一)謂く云云 三聚淨戒といふ、國譯無畏三藏禪要を對讀せよ。

佛性三昧耶戒、嘉會の時なるが故に、具に疏の第九卷に之を明すが如し。

佛性三摩耶戒とは。　寂云く、下に出す所の眞言を指すべし。此の戒を受けんと欲するが爲めの故に、先に諸戒を具す。故に下に今佛性三昧耶戒の前表たる三聚●四重●十無盡戒●堅持し畢る等と云ふなり。

(二)五篇七聚。　寂云く、聲聞の二百五十戒なり。行事抄中一丁八に云く、五篇の名を言はゞ、一には(三)波羅夷、二には(四)僧殘、三には(五)波逸提、四には(六)提舍尼、五には(七)突吉羅なり。(七)七聚と言ふは、一には波羅夷、二には僧殘、三には(八)偸蘭遮、四には波逸提、五には提舍尼、六には突吉羅、七には惡說なり。且く兩名を列ぬ、廣くは戒品の疏に說くが如し。(九)戒疏一下十七に云く、言位立とは、僧に四重あり尼に八棄あり、以て初篇と爲す。僧に十三あり尼に十七あり、第二篇となす。僧に百二十あり尼に二百八あるを第三篇と爲す。僧に四、尼に八を第四篇となす。僧尼同じく百を第五篇となす。斯れは戒本に約す、故に數を以て分つなり。律の五犯の如きは、名を以て罪を收む、此れ則ち義通せり、誠に旨あるなり。四重十無盡戒とは、謂く秘密の戒なり、下に之を出すが如し。三聚戒とは謂く秘密の三聚なり、下に三聚●四重●十無盡戒と標するが故な

(一)五篇の二部の戒の中に、僧戒の中に二百五十戒あり、之を分ちて八となす、この八段を攝事なす、名て五篇になす、名目は本文の如し。(二)波羅夷斷頭と譯す、再び僧侶となる能はざるなり。(三)僧殘生命尚殘存の義にて、斷頭に次く罪なり。(四)波逸提墮と譯す。(五)提舍尼顯示と譯す、義譯にて向彼悔といふ。(六)突吉羅惡作と譯す。(七)七聚五篇の外に二罪を加ふるなり。(八)偸蘭遮麤惡と翻す。(九)戒疏南山律師の著、四卷あり

り。五篇七聚とは等の下は、是は顯の具足戒なることを顯示するなり。是等の戒は登壇等とは、本朝古昔の法は、凡そ出家たるものは顯密を簡ばず、皆先づ東大寺の戒壇に登りて具足戒を受く。中に於て傳密の人は、重ねて灌頂壇に入りて秘密三昧耶戒を受くるなり、故に登壇得戒の時皆持つと云ふ。今時は此の義なしと雖も、尙ほ舊軌に隨て此の言を爲す。若し大日經等の說に依らば直に秘密戒を受けて、必ずしも顯戒を具することを用ゐず。此の義具さには疏の第十七に、方便學處の中に釋するが如し、往て見よ。

四重戒とは。　寂云く、已下は正しく秘密の戒を明す。大日經に依らば根本四重と名け、亦は阿闍梨の戒と名く。疏の第九に云く、佛子汝今より、身命を惜まざる故に、(一)正法を捨し、菩提心を捨離し、一切法を慳悋し、衆生を利せざる行をなす可からず。佛三昧耶を說く、汝善く戒に住せば、自の身命を護るが如く、戒を護ることも亦是の如し。今此の四戒は更に具し竟已りて略して戒相を示すが如し。當に知るべし即ち是れ秘密藏中の四波羅夷なり、人の他の爲に頭を斷ち、命根續かざれば、則ち一切の支分能く爲す所なし、久しからずして皆散壞すべきが如し。今此の四夷の戒は、是れ眞言乘の

(一) 正法云云　自下四句は四重戒なり。

命根なり、亦正法の命根なり。若し破壞するものは、秘密藏の中に於て、猶ほ死尸の如し、具に種々の功行を修すと雖も、久しからずして敗壞す。云云　廣く戒相を釋す、繁を恐れて出さず。問ふ。大日經及び略出經に依らば、此の四重戒は第七夜に於て阿闍梨の(一)傘蓋行道畢りて、大壇の前に於て之を授くるなり。疏の第八に云く、既に周り畢已りなば、後西門の二龍廊衛の所に至て、其をして慇懃に禮拜せしめよ。其の傘は身に隨て上下して之を蔭ふ、即ち爲に三昧耶の偈を說くべし。所謂る秘密藏の中の四種重禁なり。此等は皆(二)阿利沙の偈なり、下に當に之を釋すべし。文　今何が故に灌頂已前に三昧耶戒場に於て之を授くるや。答ふ。彼の兩經の所說は是れ(三)七日造壇の法なり。夫れ彼の法は得道の者にあらざるよりんば之を行ずることを得ず、今行ずる所は、是れ祖師の別傳にして、(四)水壇の行軌なり、故に經說と同じからず。大師の秘密三昧耶戒に說く所は即ち此の義なり。應に知るべし、此は是れ祖師相承の別傳なることを。

能く持つ可きや否や。　畏師の付紙に云く、答の言は、當時は受者は之を唱へず、只だ大阿能く持つ可否やと云ふて、受者を見遣りて運心す可し。

十無盡戒とは。　寂云く、全く禪要に依て之を出す。彼に云く、第十一に十重

(一) 傘蓋行道　受者灌頂を受け終りて、法王の位に登り、以て曼荼羅及び傳燈の祖師に廻禮する時に、傘蓋を擎して行道するなり。

(二) 阿利沙偈　譯して聖主といふ、大日如來のことなり、即大日の讚なり。

(三) 七日造壇　前の要秘鈔に頭注せり。

(四) 水壇　木製の壇にて今に用ふる修法の壇なりいふ。

戒門に、諸の佛子菩薩戒を受持すべし、所謂十重戒とは、今當さに宣說すべし、諦かに聽け、一は菩提心を退すべからず、云云 而して今標して十無盡戒と云ふは、大日經の方便學處品に說く所の十善戒を亦は十無盡と名く。何となれば二乘の十善は盡形を期となし、菩薩は爾らず、盡未來際、捨の義あることなし、故に十無盡と名くるなり。第十七卷に云く、既に三歸を授け了りて、阿闍梨、次に其の心を勸發(クヮンポツ)して、決定の大誓を生ぜしむべし、此の十無盡藏を受くれば、三遍之を授けよ、受け已りて彼をして自ら表白せしむ。我某甲、今十方の諸佛及び阿闍梨の邊に依り、此の戒を受得し竟んぬ、今日今時、我某甲、名けて菩薩とすることを得ん。此の戒は時節あることなし、乃至盡形之を受く、未來際を盡して捨の義あることなし。文 問ふ。今出す所は是れ十善戒にあらず、何んぞ亦十無盡と名くるや。答ふ。戒相は異なりと雖も、無盡の義は同じ、故に今亦十無盡と云ふなり。然るに第十七卷に十善戒の外に、別に一種の十重戒を出す。禪要に對撿するに、文は不同なりと雖も、義は則ち異ならず、彼此相對して之を明すこと具さに疏の私記の如し。又大師の(一)三昧耶戒の序、及び嵯峨灌頂の文に出す所は、即ち初の十善戒なり。又(二)秘密三昧耶戒儀には、初に根本の四重を出し、次に禪要

(一) 三昧耶戒云云 戒序及び嵯峨灌頂の文本篇に收む
(二) 秘密云云 本篇に收む。

に明す所の十重戒を出す、彼に戒を釋し竟りて云く、今戒を授け已竟る、將さに法寶を紹ぐこと佛の在世と更に異なることなし、即ち是れ眞の佛子なり、當に佛處を補すべし、是れ則ち最上最尊無比無等の戒なりと。文 窃かに惟るに大師の意は、初の十善戒は結緣(ケチエン)の人の所受の戒となす、故に戒の序及び灌頂の文に於て之を出す。次の十重戒は正しく是れ傳法の人の所持の戒なり。疏に阿闍梨の戒と云ふ、又耳語に之を授く等と云ふ、應に之を思ふべし 秘密三昧耶戒儀と號するは意こゝにあり。故に知る(一)延命院及び(二)覺洞院の式は皆大師の秘密佛戒儀に依て之を出すことを。

今佛性三昧耶の前表となす等。　寂云く、已下は正く佛性三昧耶戒を明す、今は眞言を名けて佛性三昧耶戒と爲すなり。然るに大日經疏には前の四重戒を三昧耶戒と名け、亦は根本四重と名く、正しく是れ第七夜に授くる所の阿闍梨の戒なり。而るを今前表とすることは、恐らくは禪要に依るならん。禪要に十重戒を明し畢りて云く、已上は是れ菩薩戒を授け竟る、汝等まさに是の如く清淨に受持すべし、虧犯せしむるなかれ。已上三聚戒竟る。次に陀羅尼(ダラニ)を說て云く、前に菩薩の淨戒を受くと雖も、今須らく重ねて諸佛內證の無漏淸淨の法戒を受くべし○要らず此の陀羅尼を誦すべし。

(一) 延命院　元杲なり。
(二) 覺洞院　法師親快なり、道教の胞弟にして、又その資たり。

陀羅尼とは究竟至極して諸佛に同じく、法に乘じて一切智海に悟入す、是を眞法戒と名く。云云　次に廣く四種の眞言を說く、繁を恐れて出さず。此の中の意を明さく、四重・十無盡を其の前表と爲して、次に無漏の眞法戒を授く、是を佛性三昧耶戒と名くるなり。口決に云く、已下の四種の眞言は各〻一遍を誦す、題名及び功德等皆悉く之を讀むべし。

先佛性三昧耶戒眞言。　禪要に云く、此の法は秘密にして輙く聞かしめず。若し聞かんと欲ふものには、先づ一の陀羅尼を授けよ、(一)曰く、ランサンマ・ヤサトバン。此の陀羅尼を三遍誦せしめて、即ち戒及び餘の秘法を聞かしめ、亦能く一切の菩薩の淸淨の律儀を具す、諸の大功德具さに說くべし。文今は正しく此の眞言を以て三昧耶戒の體となす、故に佛性三昧耶戒の眞言と名く、即ち是れ無漏の眞法戒なり。此の戒を持するに由るが故に、無上菩提を成ずるに堪忍せり、故に無上菩提の勝因と云ふ。此の眞言を亦普賢三昧耶と名く、普賢とは毘盧遮那無上菩提の勝因なり。

次に發生本覺の菩提心の眞言。　禪要に云く、又證入の爲に復た一の陀羅尼を受けて曰く、唵冐地喞多母怛波娜野弭。此の陀羅尼は復た三遍を誦す、即ち菩提心を發して、及び成佛に至るまで堅固にして退せず。文寂云く、前の無漏を勝因となして、心自ら

(一) 曰く、自下眞言は唵三摩耶薩怛鑁なり、薩怛鑁は金剛薩埵の種子にして、染淨一體生佛不二の意なり。

心を證して(一)歡喜地に入る、是を初發淨菩提心と名く。疏に第三劫の菩薩を釋して云く、此の經宗は初地より即ち金剛寶藏に入ることを得と。文即ち是れなり。持するに由り。の下は眞言の功能を明す、謂く初地より第十一地に至る其の中間に於て究竟して退せず、故に初地を亦阿毘跋地と名くるなり。

次に發本覺種種智心眞言。　禪要に云く、又證入の爲めに復一の陀羅尼を受けて曰く、唵喞多鉢囉底吠曇迦嚕迷。此の陀羅尼を復た三遍を誦す、即ち一切の甚深の戒藏を得、及び一切種智を具し、速かに無上菩提を證し、一切の諸佛同聲に共に說く。文證入とは謂く成佛なり。故に具一切種種と云ふ、即ち是れ究竟の成覺第十一地なり。此の眞言は即ち是れ通達菩提心の眞言なり、具さに(二)理記の如し。

次に入秘密曼荼羅眞言。　禪要に云く、菩薩行位に入らんが爲めに、復た一の陀羅尼を受けて曰く、唵嚩日羅滿吒藍鉢囉避捨迷、此の陀羅尼を若し三遍を誦せば、即ち一切の灌頂曼荼羅の位を證し、諸の秘密に於て聽くに無碍無くして既に菩薩灌頂の位に入る。文此の眞言を誦するに由るが故に、灌頂壇に入りて菩薩の位を得、故に入秘密曼荼羅眞言と名くるなり。

(一) 歡喜地　菩薩位十地の第一位なり。

(二) 理記　本篇の後に揭載せり。

(一) 南瞻部州　世界建立に於て四大州あり、其の一なる南瞻部州にある、日本國は此の州にあり。

(二) 博士　梵唄を唱ふるに聲譜を用ふ、此を博士といふ。

(三) 線　金剛線なり、五色の糸を以て綯ひ合はせたる紐、受者の臂に繫けしむ、之れ弟子たる撫受するときは曼荼羅の中に入るに諸の障難を離るゝなり。

(四) 慈救の呪　不動明王の呪なり。

次に啓白(カイビヤク)等。　如意を置き香爐を取る。

(二) 今南瞻部州(ナンセンブシウ)に於て等。　口決に云く、處に隨て文を改む。文今南瞻部州日本國山城州葛野郡蓮花寺灌頂道場に於て等なり。金剛弟子某とは、口決に云く只某等(ソレガシラ)といふべし、實名には及ばず。

次に佛名。　呂を置き如意を取る。口決に云く微音に之を唱ふ。

大悲護念等。　口決に云く、此の一句は(二)博士(ハカセ)を付けて少し高く之を唱ふ、教授を聞きて軈て用意して座を起て壁代に入る故なり、教授も當に意を付けて聞くべし。又今時は大阿如意を置く時に音あらしむるなり。

次に大阿闍梨自ら戒體箱を等。　口決に云く、(三)線を金剛盤の上に置て加持す。此に兩說あり、或は(四)慈救の呪を以て、或は心念密語を以てす。今は授僧正朱書の如く、五股を以て心念密語三遍を誦し、順に之を加持す、加持し畢りて二ソゲにして左の臂に懸く。但し受者多き時は、其の髆(ロウ)次第に先づ正受者の線を臂の口に懸く、授與の時に先づ正受者に與ふる故なり。

次に加持塗香(カヂヅカウ)。　口決に云く、大阿右の手を以て塗香器を取り、燒香を薰ずることを用ゐず左の手の掌に置き。(一)小三古の印を以て、(二)枳里枳里(キリキリ)の明を三遍加持し、次に塗香の明一遍之を誦し、次に右の大●頭●中●の三指を以て之を持して教授に與ふ。教授禮盤の右の邊に立て、左の手の掌を捧げて之を受け、又右の大●頭●中●の三指を以て之を持し、受者に與ふるなり。此の間に大阿功能の文を唱ふるなり。受者は兩掌を開き之を受けて頂戴す。先づ正受者、次に傍受者、次第に其の次ぎ次ぎの受者に之を與ふ。その所作皆正受者の如し。次に之を返す時も、又初の如く次第に返して正受者に止む。その時教授、器を取り右の掌に置き之を大阿に奉す、大阿之を取り、本所に置き、餘の(三)花鬘等も皆當さに准知すべし。此の時教授能能意を付て所作あるべし。

次に(四)加持花鬘(クワマン)。　法作前の如し、但し花を散さゞるなり。

次に加持(五)燒香。　口決に云く、文に受者の兩手に薰ず云云　今は薰ずる義なし、但し塗香等の如く之を頂戴するなり。

次に加持(六)燈明。　口決に云く、東向きの道場には折櫃の切懸たる口を北に向て之を置き、加持し了りて受者の方へ押し向けて之を見せしむるなり。

次に掠手洗。　口決に云く、三種の物は、初より前机の下、便宜能き處に入れ

(一) 小三古　前に頭註せり。

(二) 枳里云云　前に頭註せり。

(三) 花鬘　前に註せり。

(四) 加持花鬘　花鬘を加持する法なり。

(五) 燒香　香を盛れる燒香器即ち火舍を加持するなり。

(六) 燈明　燈明を加持するなり。

置く故に、前垂にて外には見えざるなり、事畢りても又前机の下に入るゝなり。此の時教授取り出して、禮盤の南の邊に置く。寂云く、若し南向きの時は、東邊に置くべし、若し東南の時は、北邊に置くべし、南邊とは不審。次に受者下禮盤して草鞋を着け、禮盤の前に於て東に向て蹲踞(ソンコ)す。次に教授薦を取り禮盤の上に敷く。具には教授記の如し。其の薦は三折にして切口を東西に向けるなり。三折に二說あり、其の圖の樣は卍、此の如し、具には文永記等の如し。

次に(一)齒木。　口決に云く、若し受者四人の時は、八支一度に前机の上に置て、(二)劒印(ケンインジク)慈救の呪(シュ)三遍之を加持す。次に八支一度に細き方を、左の手に持て灑水三度、加持香水の義なし。只器の端(ハシ)を打て枝木に觸るゝ勢を爲し、次に燒香に薰ず、八枝一度に薰じ、薰じ了りて机の上に置くなり。此の時西水の蓋を覆ふなり。次に飾れる支木一枝を取り、兩手に捧げて之を持し、(三)普供養(フクヨウ)の明を誦して、一遍諸佛に獻ず、獻じ了りて机の上に置くなり。次に飾らざる一枝を取りて、眞言及び功能の文を誦して一反之を教授に授く、教授取り傳へて受者をして之を嚼(カ)まし む。嚼む間に大阿は、汝、無等の利を獲る等の偈を誦し、次に其の嚼みたる方を、受者をして之を洗はしむ、教授は掾の水カクルなり。洗ひ了りて枝木を薦の上に指す。具には教授記の如し。指し了りて教授之を取りて大阿に奉る。大阿取りて箱

(一)齒木　要秘鈔に頭註せり。
(二)劒印　不動明王の印なり、慈救のこと前にあり。
(三)普供養　三世十方の諸佛に普く供養するといふ、如何なるものも、此の普供養の眞言に由つて加持すれば、無量廣大の功德を成ず。眞言は普唵阿謨伽布慈摩尼跋納縛日羅摩訶薩埵他蘇多尼路枳帝三滿多鉢羅薩羅吽。

に收む、一一受者、皆此の如く之を作すなり。但し此の間は正受者は壁代の角に蹲踞す、同壇の作法了りて本の如く登禮盤するなり　此の如く所作了りて、二支の齒木を一紙に包みて、上に實名を記し戒體箱に入るゝなり。

次に金剛線。　口決に云く、次に大阿の臂の金剛線を取りて前机の上に置く、假令は受者四人ならば、四筋一度に之を加持す、加持し畢りて次に一筋を持て教授に與ふ。教授之を取りて正受者の左臂に懸く、外に見えざる樣、押し入れて懸くべし。次次の受者も皆此の如し。寂按ずるに、太秦の本に、仍て具せずの次に、是れ離諸障難等の八九行の文あり、是は疏の第五の文なり、恐くは後人の加ふる所ならん。

次に(一)金剛水。　口決に云く、閼伽器を土器の上に置き乍ら、右の手を以て之を取りて左の手の掌に置き、小三古の印、枳里枳里の明を以て之を加持し、次に閼伽水を少し土器に入る、其の閼伽(アカキ)器は前机の上に置き、右の手を以て土器を持して教授に與ふ、教授左の手に之を承け、又右の手を以て受者に與ふ。此の間に、大阿香水の眞言三遍を誦す。受者兩掌を開き承けて之を飲むこと一度なり、飲む間に大阿功能の文を唱ふ。飲み已りて教授は彼の土器を取りて、脇机の下へ指し入れ置くなり。同壇の受者も亦皆是の如し。其の土器は受者の數に隨て折敷に居へ、高座の陰に置きて、教授次次に取り出して大阿に

(一)金剛水　誓水なり前に頭註せり

奉るなり。誓水を飲むこと、或は三度、或は一度、兩説の中に當流の師傳は一度の義を用ふるなり。寂云く、余先師に隨て灌頂を受く、其の時は土器四枚を閼伽器の下に重ね置くなり。文永記に云く、受者二人、誓水の下に小土器二を重ねて之を置くなり、先師は即ち文永の記に依れり。

次教授受者を具して等。　口決に云く、受者の作法訖ては、(一)下禮盤(ケライバン)一拜して三衣袋等を持して、本座に着く可きの由、教授之を示すべし。故に教授壁代の内を能能見合ひて道具等を取り納れて、次に受者を具して退出す。壁代の内は、教授は前、受者は後なり。次に教授且く壁代の角に止つて、先づ受者を出し、次に教授出るなり、出て畢りて各本座に着するなり。

次に(二)解界(カイ)火院等　口決に云く、常の如し、眞言一遍、左に轉じて之を解くなり。

次に片供元の如し等。　口決に云く、三づゝ重ねて折敷に之を置く。先づ花鬘器を取りて、塗香器の上に重ね、次に二器を取りて閼伽の器に重ぬ。其の圖は 此の如し、折櫃は火を消して其任(ま)前机に置くなり。座具は元より敷き置く故に、今も其の儘之を置くなり、式は卷き返すに及ばず、其の儘戒體箱に入れて其の緒を結ぶ。其の後五古●

(一) 下禮盤　禮盤を下ることなり。

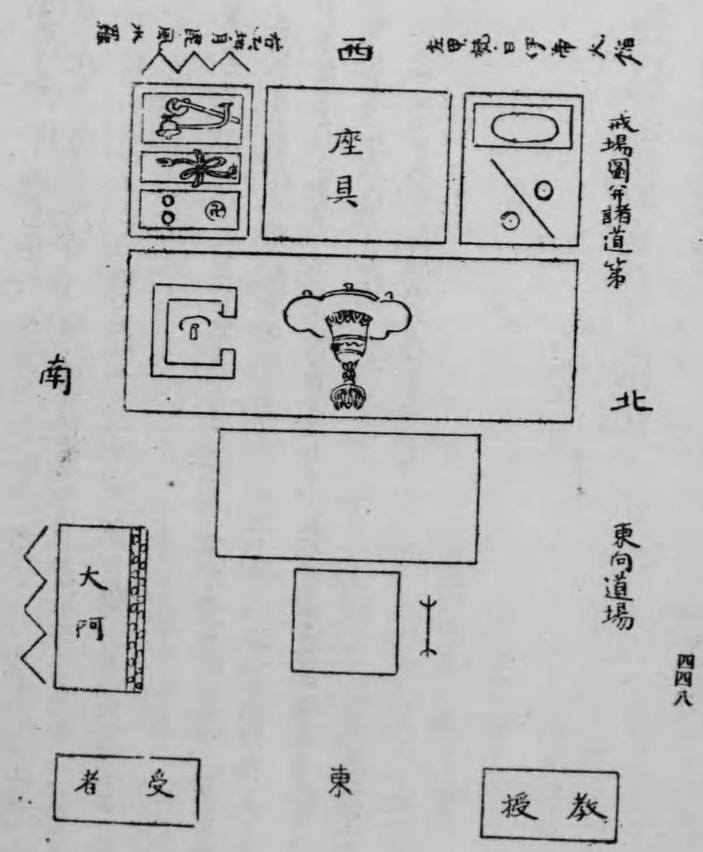
(二) 解界　護身法及結界のこと前に註せり、此の護身法及び結界を解くなり。

檜扇等を取り具し高座を下り、少し一揖して平座に着くなり。無作法の時は着座に及ばず、直ちに退出するなり。一説には無作法の時は、大阿平座に着て後、二人の弟子壁代を擧ぐ、擧げ了りて、軈て大阿●教授は一同に座を起て、初の如く後戸より房に皈る。云云

次に十弟子等。　口決に云く、十弟子二人、後戸より壁代に入り、法具を取りて大阿の左右に置く、左は居箱右は香爐草鞋は十弟子の一蒲之を直(なほ)し、其の後亦壁代に入る、受者の半帖など取り置き、次に壁代を擧ぐるなり。前机の折櫃●金剛盤●灑水●塗香●戒體箱等は皆其の儘莊り置くなり。

元文元年歳は丙辰に次る秋八月九日閲筆　　洛西五智山沙門　曇　寂

國譯傳法灌頂戒場作法事記 終



國譯傳法灌頂初夜作法事記

金剛子曇寂

職衆(シキシュウ)并びに受者禮堂着座等。

口決に云く、受者(一)三衣(サンネ)袋と香呂(カウロ)と獨古(トクコ)と念珠(ネンジュ)とを持し、金剛線(コンガウセン)を臂に懸けて着座し了りて扇(セン)を開き、其の上に三衣袋と香爐とを置く、香爐に香煙を斷さざるなり。

大阿闍梨後戸より入堂。

口決に云く、(二)水精の念珠は之を持せず、但し常の念珠と及び獨古とを持するなり。云云 文永記に云く、師の云く三昧耶戒時の五古と水精の念珠とは、初夜の作法の間は、香呂箱に入れ置くなり。云云 寂云く、是は(三)教誡の時の料なり。

弟子一人相ひ具す等。

口決に云く、居箱を脇机の上に置き、香呂箱は禮盤(ライバン)と(四)磬臺との中間の板敷(イタジキ)の上に置く、其の(五)次第(シダイ)等は、香呂箱に入るゝなり、此等の物具は大阿入堂已前に兼て設け置くなり。其の(六)十弟子は相ひ具するに及ばざるなり、入堂已前に入れ置くなり。

國譯傳法灌頂初夜作法事記

(一)三衣袋　傳法灌頂初夜作法とあるは、金剛界灌頂に屬す、金剛界灌頂なり、初夜に行ずる故なり、其の作法の外、儀なき述べたる故に事記さいふ、元より初夜の式文の要點を摘して委釋したるものなれば、雖も、自ら本式の如何なるかを知ることを得ん。云云 三衣袋云云 自下前卷に註す。

(二)水精の念珠　特に晴の時に用ゆるが故なり。

(三)教誡　受者に教誡するの意。

(四)磬臺　磬を載せる臺なり、磬とは金屬に造りて打ちて鳴らす法具なり。

(五)次第　修法の順序を記したる念誦法ないふ。

(六)十弟子　前卷に頭註せり。

(一)承仕　給使なり。

(二)張佛供　五色の紙にて張りたる佛供なり、佛供とは飯を一定の型にしたる供物なり。

(三)普禮　禮拜するをいふ。

(四)三禮　普禮と同意に用ふ。

(五)金剛持　金剛界諸尊を逼禮する禮なりと云ふ、之に印相と眞言あり、次第の中に金剛持逼禮の一段あり。

(六)神分祈願　神分は曼荼羅外金剛部の神祇に擁護を祈り、祈願は志求小の神祇に祈願する所なり。

(七)五悔　金剛界の諸尊を歸依する文、一至心歸命、二至心懺悔、三至心隨喜、四至心勸請、五至心廻向の五段に分つ。

(八)勸請　佛菩薩を招ぐと云ふ。

(九)四方四智　四方の四智如來と四波羅蜜菩薩の略稱。

(一〇)十六菩薩　十六菩薩と四攝智菩薩の略稱。

(一一)敎令　敎令輪者降三世の略稱。

(一二)兩部界會　兩部界會如來の略稱。

(一三)外金剛部　外金剛部威德天の略稱。

(一四)不越本誓三昧耶　不越本誓三昧耶の略稱。

(一五)降臨壇場　降臨壇場の略稱。

(一六)護持受者　護持受者の略稱。

(一七)滅罪　滅罪生義成大願の四智の略稱。

(一八)天下法界同利益　天下法界同利益の四智の讃。

又(一)承仕に仰せて等。　口決に云く、能く承仕に仰せて香煙を斷さず、燈油を差し加へ燈炷を挑げしめよ。辨じ已らば速に出で、後戸の邊に於て半疊を儲け置きて居らしむべし。都て內庫の所作をば承仕等には之を見せしむべからず。又大阿登禮盤の前に、壇上の莊嚴、造花、張(二)佛供、等の備へ樣、能能見分し、其の後に作法に入るべし。云云

先づ壇前(三)普禮。　口決に云く、禮盤の前に蹲踞し、扇を磬臺と禮盤との間に置き、香呂を取りて(四)三禮す、三禮了りて香呂を箱の內に入れ置く、柄を箱の端に掛るなり、その後に登禮盤す。云云

次に着座普禮。　(五)金剛持遍禮に至る、皆常の如し。

次に表白兼れて新草を設く　香呂を取りて金二丁して之を始む。

次に(六)神分祈願。

次に(七)五悔。　文永記に云く、職衆は同音、受者は助音せず。云云

次に(八)勸請。香呂を取る　歸命摩訶毘盧遮那佛。(九)四方四智。(一〇)十六八供。(一一)敎令。(一二)兩部界會。(一三)外金剛部。(一四)不越本誓三。(一五)降臨壇場。(一六)護持受者。(一七)滅罪。　天下法界同利益。

次に五大願　衆生無邊誓。　福智。　法門無邊誓。　如來無。

菩提無上誓願證。　終に護持受者成悉地の句あるべし。　口決に云く、助音の菩提無上の句を唱ふる間に、大阿微音に護持受者成悉地の句を唱へて香呂を置くなり。

次に前供養讃。讃の頭之を誦す　口決に云く、總じて前後中間の讃は、皆悉く三昧耶戒時の讃の頭之を勸むるなり。(一)四智、(二)心略、(三)金剛薩埵、作法別にあり、

次に(四)普供養三力。

唵阿謨伽布惹摩扼跋納摩縛曰(ランアボキャボ ジャマニハンドマバジレイ)隸已上微音怛他蘗多(タヂギャタ)此の句は大阿發音諸衆助音

以我、　如來、　及以普供養(金一打前供二切)

職衆(ブッグン)(五)佛眼の眞言を誦す。　口決に云く、職衆三力(サンリキ)の金を聞きて佛眼の眞言を微音に之を誦せよ。

次に(六)供養法等。　口決に云く、(七)振鈴の後は(八)當界の大日眞言を誦す(鞞磨會 ぶすぐるうん)讃を催す時に至るまで之を誦するなり。此の時に護摩師座を立て裝束を改む、鈍色に五條袈裟なり。(九)世天段の時に神供師座を起つ、裝束を改めず。(兩人共に役了りて本座に帰る)

(五)佛眼　前に頭註せり。

(六)供養法　本尊を供養する法をいふ。
(七)振鈴　鈴を振ること、修法中の一行法なり。
(八)當界　本書は金剛界の故に金剛界の大日なり。
(九)世天段　護摩法の中の世天の一段なり。
(一〇)正念誦　修法中最も重要の觀念にして、本尊の眞言を誦し、本尊と彼此涉入する法なり。
(一一)散念誦　正念誦に對す、普く諸尊の眞言を念誦する故に名く。
(一二)引入所　內庫に隣れる處に受者を引入する所あり。
(一三)輪寶　輪寶といふ、法具なり、輪を如來の德となし大壇上に置く。金剛盤は鈴五股等を載せ置く法具なり。
(一四)敷曼茶羅　大壇上に敷く曼茶羅の要秘鈔にあり。

次に振鈴の後等。　口決に云く、教授(一)正念誦頃座を起ち、後戸より堂內に入る、引入口よりは入るべからず。

次に(一一)散念誦の初め佛眼●大日等。　口決に云く、佛眼 廿一反 胎大日百反當界大日千反少し誦し始めて座を起つ、禮なし 平座に着し念誦し、早速に數を取る、五瓶行道の間に之を滿するなり。云云

次に禮盤等便宜の所に取り移さしむ。　口決に云く、教授承仕を召して相共に之を取り移すべし。先づ香呂箱 大阿の右の邊 居箱 大阿の左の邊 平座の兩脇に之を置くべし。禮盤の上に脇机と磬臺と之を置きて、(一二)引入所の屏風の西の傍に之を置くべし。但し便宜の所に之を置くべし 又(一三)輪●金剛盤等を移して脇机の上に置くなり。文永記に云く、師云く先づ壇上の輪を脇机の上に置き、金剛盤ながら鈴杵を脇机の上に移し置け、(一四)敷曼荼羅の上をサワ〳〵とすべしと。云云

次に教授(一五)五瓶。　教授の作法を明す、作法別にあり。

次に壇前に引入す等。　口決に云く、教授、引入所の所作了りて將に內庫に入らんとする時、未だ(一六)香象を越えざる以前に、大阿、大壇の正面の邊に立て、受者に向

(一五)五瓶　この事前の要秘鈔第八に註釋あり。
(一六)香象　象形の香爐なり、灌頂入壇の時受者をして之を跨かしめ、其身心を清むるものなり。
(一)大鈎召　佛を召請する印なり。
(二)針の上　之れ三摩耶の印にして外縛して二中指を立て合せるなり、立て合せたる二中指を針といふ。
(三)花を投　敷曼茶羅に投げしむ。敷曼茶羅の中央の位置にある大日如來座なり。
(四)中臺

て(一)大鈎召の印明を結誦し、三遍鈎召し已りて、香象を越えしむるなり。香象の向け方一壇構への樣 口決に云く、道場の向ふ方に依りて香象を置くこと異りあり、或は北に向ひ或は西に向ふ、今は東向きなるが故に象の頭を西に向けて越えしむ。先づ右の足を擧げしめ次に左の足なり。受者は中に立ち教授は右、大阿は左なり。教授の左の手に受者の印を執り大阿と與に相助け香象を越えしむ、越え已りて相引て壇前に到るなり。

次に受者大壇の前に立つ等。　口決に云く、大壇の前に到て賚は曼荼羅に向ひ師は弟子に向ふ、此の間に教授樒を取て賚の(二)針の上に挿して、花の莖を印に挿むなり 此の時師告げて言ふべし。佛子今已に云云 此の文は受者の耳の邊に於て一遍之を告げよ。次に密語三遍を誦せよ、二切に之を授く、受者牒を取りて之を唱へよ。

唵三昧耶薩怛鑁一句　鉢羅底車嚩日羅穀一句

口決に云く、三遍誦し了りて(三)花を投げしむ、花と敷曼荼羅との間、殆んど七寸許り、教授左の手に受者の前を挂へ、右の手を以て花を挿んで手をシカと握りて、(四)中臺より少し過ぎる程にノゾマセテ、花を尊位に落す、印を解かしむべからず、二中少

し開きて花を落すなり、大阿は受者の左に在りて相助くるなり。若し空地に落ち或は外部を打てば打ち直さしむること三度に至るべし、若し三度に尙ほ尊位を得ずんば是れ(一)無縁の人なり、灌頂を授くべからず、隱に後戸より出さしむるなり。文永記に云く、其の打ち損じたる花たれば、教授之を取り壇の邊に之を捨る云云　寂云く、文に白花と雖も今時は五葉の樒を用ゆ、(二)五葉は即ち五智の標相か。

次に(三)覆面(フクメン)を脫せしめ了る。　口決に云く、投華畢りて、教授覆面を脫せしめて、之を左の手に掛け、受者に告げて尊位を知らしむ。次に資をして大阿の方に向はしむ。大阿資に向て相對して告げて云く、(四)金剛薩埵攝受。云云　口決に云く、師一遍之を唱へ了りて亦資を曼荼羅に向はしむ。

次に前の投華を取りて眞言。　口決に云く、教授(五)散杖を以て兼れて脇机の散杖を取り大壇の右の方に置く(六)五色の上より其の花を攪き寄せて、五色の下より之を取るなり、左の手に持て大阿に奉る、大阿左の手に之を取り、右の手に取り直して、此の明を誦し乍ら受者の頂に安す。葉の末を上に向く安き已りて、其の花を左の手に取り直して教授に渡す、教授之を取りて亦大阿に進む、是の如く取り傳ふること資の前にて之を作す、受者の後に繞らすこと之れなし、總して三度、明三遍なり。

(一)無縁　投華して花が何等の尊の上にも落ちざるは佛に縁なきなり。
(二)五葉　五葉は五智如來を標するなり。
(三)覆面　前の要秘鈔に頭註せり。
(四)金剛薩埵　大阿受者に向て願くは金剛薩埵汝を攝受したまへと唱ふ。
(五)散杖　前に頭註せり。
(六)五色　壇の四隅を圍繞せる五色の線なり。

(一)教授　大壇に投華する時は受者を中央に、左に大阿、右に教授立つなり。
(二)初後夜　初夜(金剛界)と後夜(胎藏界)となり。
(三)護身　護身法を結ばしむ。
(四)小壇所　正覺壇なり要秘鈔にあり。
(五)屏風　十二天像を畫きたる屏風なり。
(六)花葉　正覺壇の受者の座する處には中臺の蓮花の繪を畫きたる座あり、之に花葉と花臺とあり。

想へ大力の菩薩我が身を攝受すと。　口決に云く、前の如く三遍了りて大阿花を持し、此の文を唱ふること一遍、資をして之を聞かしめ、其後花を(一)教授に渡す、教授花を取りて大壇の傍の小机の上に置く。大壇の右の邊に、兼て小机を置き、其の上に投花の折櫃及び硯箱投花の包紙等之を置く　次に覆面を取りて屏風に掛け、次に投華を紙に包みて上に種子等を書く、若し(二)初後夜共大日なれば、[寺 實名]　[悉 實名]　又若し餘尊ならば　[種子 金剛名 密 實名]　是の如く假包して後に能く包み直して之を與ふるなり。

次に受者をして(三)護身せしむ。　口決に云く、立ちながら之を作す。觀念の文を讀まず、眞言の反數(ヘンスウ)等は常の如し。文永記に云く、立ち乍ら之を行ず。云云

次に四禮。口決に云く、明各〻一遍、明を誦するごとに立ち乍ら少し揖するなり、或は云く一尊一禮す、起居禮なり。

次に大阿闍梨受者を引き等。　口決に云く、右に繞るとは是れ三匝圍繞するにあらず。四禮了りて右に順行して(四)小壇所に至るなり。先づ師次に資、小壇に入り畢りて(五)屏風を引き廻すなり。時に師告示して資をして左の足に(六)花葉を踏み、右の足に

花臺を踏みて東座に着せしむ。（半伽座也）次に師は西座に着し、（寂云く、今の小壇の所は、是れ南北の故に資は南に坐し師は北に坐す。）敎授の記に云く、大阿は讃と仰せらる、其を聞て敎授又讃と一聲之を催す。若し聞かずんば今一聲催すべし。（二）讃の頭心得て聞くには、聲ックロヒをするなり。云云賴瑜記に云く、（三）西南院の御記に云く、阿闍梨密かに讃と云ふ、敎授之を聞きて高く讃と一音之を唱ふ。文 又或る記に云く、敎授は聲明の骨（コツ）に讃と一聲之を催す。寂按ずるに讃の字は本と平聲なり、今去聲に呼ぶをば自ら聲明の骨と爲す、此の義其の謂れあり。口決に云く。讃を催し畢りて大阿箱の緒を解き、散杖を取り出し五本中瓶より次第に之を立つ。問ふ。秘密箱は何れの時小壇所に安ずるや。答ふ。口決に云く、大阿入道場の時、敎授上箱を去り中箱を符の儘に持ち來り、後戸より入れて、小壇の脇机の上に安んず。寂云く、此の時符を切て机の上に置く可きか。　問ふ。道具を一一取り出して蓋の上に並べ置くや。答ふ。爾らず、但し當用の物許り之を取り出し、授け了りて蓋の上に並べ置くなり。

決に云く、畏僧正の云く、キキャウの讃を廣澤にはキックイと云ふなり。又受者一人の時は、五段了りて起座す、若し（五）同壇多き時は、正受者の作

（一）讃　諸佛の德を讃頌する梵唄なり。
（二）讃の頭　讃の頭の句を出すもの なり。
（三）西南院　親快師なり。
（四）吉慶讃　灌頂の際、新弟子が覺位に登りたるを慶賀して唱ふる梵唄なり、梵文は三頌のみなれども漢譯せられたるものは、四句一偈にして四頌を出せり現今の讃は四句五頌あり。
（五）同壇　受者多くあるをいふ。

法終り次第に大阿板敷を叩く、敎授之を聞きて亦叩いて讃の音を止む、讃の音止みて起座するなり。假令ひ受者一人なりとも、時刻遲遲せば讃の音を止むべし、是れ故實なり。又同壇の時も亦前の如し。漢語は五段之を唱ふ、然るに前の時に讃を止むるに五段終らざれば、則ち次の時は殘る所の讃を初めとなして之を唱ふ、假令は第四段の讃止まれば、次には第五段を初めとなして之を唱ふるなり。寂云く、（一）鉢の突樣（ツキヨウ）如何、異本の式に、畏師傍註して云く、鉢は（二）段別に中段之を突くなり、早鉢（ハヤバチ）なり。文 外儀法則に云く、吉慶五段之を誦す、鉢は段別に中段之を突く、少し拍子早く突くなり、亦暫くありて前の如く敎授之を催せば亦梵語之を出す、鉢の突き樣は同じ。

漢語五段了る等。　亮典師云く、五段了る等の七行は一向入らざることなり。此に此の如く出し玉ふは何事ぞや、不審云云（七行は漢語五段より之を催す可きなりに至る是れなり。）實紹師云く、此は後の讃を引き上げて記せらると見えたり。（後讃とは、次に小壇に入る時よりなり。）文永記に云く、吉慶の漢語五段畢りて、暫くありて又讃と之を催す、梵語三段なり。師の云く、初夜に讃を催すことは、此れ二度計りなり、此の讃の間に小壇の作法之を行ずるなり。云云寂按ずるに式に云くイッホトト云ふ事なり。文永記に此の文を釋して云く、暫らく又讃と之を催す。又云

（一）鉢　鉢は資鉢と稱し諸尊之を持し、釋迦如來は之を三昧耶形となす、今其の鉢を形どりて金屬に製し突き鳴らす法器とせり。
（二）段別　鉢の突鳴らすに上中下段等の突き方あり。

く後夜には只一度讃を催す、初夜には二度之を催す。云云 若し爾らば古昔は初めに小壇に入る時に兩度讃を催し、初は漢、次には梵と、二度誦するか、爾らずと云はゞ云何んが此の文を解かん、若し爾らば後段に合して惣じて三度之を催すなり。今時は此の義なし、初催の時は漢語五段、後催の時は梵語三段、是の義を定めとなす、賴瑜等の記は皆亦此の義なり。

次に(一)五鈷を取り首を加持す。　口決に云く、道具箱の五鈷を以て𑖀字を誦して七遍之を加持するなり。文 文永の記に云く、先づ大阿闍梨、五古を以て金剛界の五佛の言を誦じ首を加持す、後夜には胎界の五佛の言を用ふ各〻七反許り。(二)私に云く、傳受の時の口授此の如し。然りと雖も追て又(三)大僧都の口決を檢見するに、𑖀を以て受者の首を加持し已りて、五瓶の水を以て受者の頂に灑ぐ時は、(四)五佛灌頂の眞言を誦し、中東南西北の次第に之を灑ぐ、瓶別に三度、(五)師主も此の定めたるべきの由示さる。云云 教舜記は、治承記の如く、𑖀等の五字の明を誦すと云云 先師云く是は稟承の作法なり。今の授式に出す所の𑖀字の加持は、是れ(六)道教不共の相承說なり。故に治承記と異なれり。

次に五瓶の水を以て等。　正しく灌頂を明すなり。遍照尊中とは異本細註して云く、頂上●額●頂右●頂左●頂後●(此の本は恐らくは文永の記等に依りて後人註加ならん。)口決に云く、資は先づ印を成じ、師は明を誦して各一遍之を灑ぐこと三度、但し所所を印することなし、只頂の一所に洒ぐなり。其の樣は師先づ(一)中瓶を取りて左手に持し、瓶の頭を執るなり右の手を以て散杖を抽き出し、瓶の端を叩きて、初の一は打ち離ち、後の二は打ち纏く散杖を轉ずること無し。頂上に洒ぐなり。餘の四佛の瓶皆此の如し。云云 同壇の受者、皆洒ぎ了る迄は、散杖は尙ほ瓶中に立つ、同壇皆了りて杖を拔きて箱の蓋の上に置くなり。後夜に取り出し取り收るも亦初夜の如し。云云 寂云く、一本の式に頂上●額等の當て所の註なし、恐くは是れ所所に當てず、總じて頂上に灑ぐ義か。

次に受者をして(二)寶冠を被らしむ。　口決に云く、大阿左の手に寶冠を持し、右の手は(三)𑖀印にして慈救の呪を誦し、三反之を加持す、次に頭を傾けしめ、冠の合せ目を後と爲して之を着せしむるなり。寂云く、後夜の式に畏の註に云く、(四)辨事明を以て加持して之を被らしむ。云云

次に四佛加持、五佛灌頂等常の如し。

文永記に云く、次に受者(五)羊石會三十七尊の印明

次に成身會を行せしむ等。

(一) 五鈷　五股、五古とも書す、五股杵なり、法具なり、要秘鈔に委說あり。
(二) 私云く　大僧都　道教　親玄なり。
(三) 五佛灌頂　大日、阿閦、寶生、彌陀、釋迦の五佛、受者に灌頂を授くる印と眞言なり。大日は頂、阿閦は額、寶生は右頂、彌陀は頂後、釋迦は頂左に配し行者に洒ぐなり。
(四) 師主　親快。
(五) 道教不共　上述の如くあの字を以て加持するは道教方の特色なり。
(一) 中瓶　五佛に配すれば大日に當る、他の四瓶は四佛なり。
(二) 寶冠　五智如來の寶冠。
(三) 𑖀印　右の手なる𑖀印の形になす、𑖀印の時は明は慈救の呪なり、獨股の印の時は大呪なり、即ち火界呪なり。
(四) 辨事明　辨事明王の明、即ち呪なり、佛部に屬す、明王は諸佛に不動明王は佛部の明王なり。
(五) 羊石　羯磨の略稱、金剛界の中央の曼荼羅、成身會ともいふ。

(一)三昧耶　金剛界曼荼羅の一なり

(二)三印羯言　三昧耶會の印契に羯磨會の眞言なり。

(三)白拂　拂子ともいふ、盤牛の尾を以て製す、灌頂の時は受者の身を拂ふて諸の塵垢を拂ふ爲に用ふ。

(四)四邊　中親上人云く、四邊とは先づ總身、次に受者の前右後左と思ひ當てゝ之を扇ぐ云云。

を行ず。師の云く、成身會の三十七尊とは是れなり、別に成身會の三十七尊と云ふ事は之れなし。問ふて云く、羊石會の言と(一)三昧耶會の印か。師の云く尒らず、同じく羊石會の印言を用ふるなり。文

口決に云く、今は羊石會の印言を用ゐず、略次第の如く(二)三印羯言を用ふるなり。朱書は兩樣なりと雖も、今は必ず三印羯言を用ふるなり。

(三)白拂。　口決に云く、右の手に拂を持し、慈救の呪を誦して三遍之を加持す、拂ふ時は明なし、拂を以て受者に向けて右より左へ之き、左より右に之きて此の如く三遍なり、其の圖は 初 Z 終 此の如し。

次に扇を取る。　口決に云く、加持すること前の如し。其の扇ぐ樣は、先づ横、後に竪、十文字の如く之を作す 十 ——是の如く扇ぐ時は、則ち受者の(四)四邊を扇ぐなり、扇ぐ時は明なし。寂に云く、太秦の本に出す所の圖は、拂ふには 上 (一) 十 ——、扇ぐは 初 Z 終 今の口決と相前却するなり。

次に塗香。　口決に云く、塗香の器を取り左の手の上に安じ加持すること前の如し、香を取りて資に與ふ。資は右の手に受けて雙腕に塗ること常の如し、其の後袖より兩手を懷に入れて直ちに胸上に塗るなり、香を多く與ふ可し。道快記に云く、香をば少くは與へざるなり。

次に五鈷を以て偈を誦する等。　口決に云く、先づ受者をして合掌せしめ、師は右の手に杵を執りて竪てに之を持し、(一)頌文を四切に之を誦す、資は牒を取り之を誦し、誦し已りて合掌を開かしめ、竪に掌中に安して、頂戴すること三度、共時に師密語を誦すること一遍、牒を取らず是の如く三度之を授くるなり。亮奥記に、偈及び明共に牒を取る云云今は之を用ゐざるなり。

次に金剛杵を收め取り等。　口決に云く、前の如く三度授け畢りて、師右の手に金剛杵を持し、金剛佛子實名唵縛日羅等と、一遍之を誦す。但し師のみ之を誦す牒を取ること無れ

次に(二)金篦。　口決に云く、右の手に篦を取り、先づ(三)皈命を三反を誦して之を加持し、次に偈一遍を唱へ、次に資の兩眼に於て字を觀じ、右の目頭より目尻へ一遍、次に左の目頭より目尻へ一遍、是の如く兩度之を拭ふ勢を爲す、偈をば訓に誦するなり。

(四)金輪。　口決に云く、師右の手に輪を取り、皈命を三遍を誦して之を加持し、印なし次に机の下より之を與へ、受者に命して兩足を合さしめ、其の兩足の間に竪に之を

(一)頌文　諸佛金剛灌頂儀、汝已如法灌頂竟、爲成如來體性故、汝應授此金剛杵と音讀するなり。

(二)金篦　灌頂の時に授けて心眼を開かしむるなり。金を以て箸の如く製したる法具なり之を授くる時は次の偈あり、佛子佛爲汝決除無智暝、猶如世醫王、善用於金鑠、の四句あり、之を訓讀す。

(三)歸命　ナウマクサマンダと讀む以下皆同じ。

(四)金輪　金屬製の輪なり、前に頭註せり、蓋し輪は義を表し說權破の義あり、授けて曰く、汝自今日に於て、世法斷疑の德あり、救世輪を轉ぜよと。

挿立しむるなり。

(一)商佉（シャウキャ）。　口決に云く、右の手に螺を取り、皈命引三遍を誦して之を加持す、印なし次に偈一遍を誦して、次に之を資に授く。資は輪を挿みながら、右の手に螺を受けて、口の右の邊に寄せて吹く勢を爲す、一度而して後に師先きに螺を取り、次に輪を取りて之を收むるなり。

次に明鏡。　口決に云く、先づ蓋を開き除いて右の手に之を持し、皈命引三遍を誦して之を加持し、印なし引字を資の心上に置きて、彼の妄執の垢を除かんと觀じ、次に偈を誦すること一遍して之を授く、資は右の手を以て之を受く、兩手に捧げて之を見るなり、其の後取返して蓋を覆ひ箱に收むるなり。

右八種の道具は皆箱の蓋の上に置きて小壇所を出るなり。寂云く、略出經と及び大日經とは、篦●鏡●輪●螺の次第なり。今の式の次第は經と相違す、此の具さには理記の如し、本式も亦此れと同なり。

次に大阿闍梨(二)白傘蓋（ビヤクサンガイ）を執る等。　口決に云く、小壇を出る時は、資は先き師は後なり、資尚ほ冠を着す。此の時に敎授白傘蓋を持し來りて大阿に進す、大阿之を

(一)商佉　法螺と云ふ、要秘鈔にあり、大疏には一音聲を以て普く十方世界に遍じて衆生を警悟するが故に一大法螺を吹くと曰ふ、大日經に輪と法螺を授くる時の偈に曰く、「一汝白於今日、轉於世輪、其聲普周遍、吹無上法螺、勿生於異慧、當離疑海心、開示於世間、勝行眞言道、常作如是願、宣唱佛恩德、一切持金剛、皆當護念汝」といふ。

(二)白傘蓋　白き傘蓋なり、白淸の慈悲を以て周く法界の衆生を遍覆すること傘の人を覆ふが如くなる故に名く。

(一)諸尊云云　我某甲、某甲に灌頂を與へ畢んぬ、今諸尊に付屬して明藏を持せしむ等。

(二)前供　右の方の閼伽、塗香、華鬘、燈明、飲食、燒香なり、前供の事、前に頭註せり。

(三)小三古　片手に結ぶ三股の印なり、無名指と大指、又は小指と大指を捻ず、流派に依つて異にす。

(四)理供　事供養に對す、理供養の略稱、塗香、華鬘、閼伽、淨の印明を結誦して理に依りて供養するをいふ。

取り、弟子の頂に覆ふて徐歩して直に大壇の後を經て正面に到り、資をして三禮せしむるなり。起居禮なり其の蓋、身に隨て上下す、此の如く三匝し、每度三禮す、總して九禮なり。第三度の時に正面に立ち止まり、資は北に立て曼荼羅に向ひ、師は南に立ちて資に向て告げて曰く、佛子汝今等。云云

次に共に小壇に還り着す等。　口決に云く、壇前の所作畢りて將に小壇に入らんとする時に、屏風の外に於て、師蓋を持しながら此の語を作す。(一)諸尊に白して言く等。云云　此の語を作し已りて蓋を放ちて、敎授進みて之を取る而して小壇に入る。資は西座に着き、花葉を踏む等前の如し師は東座に着く、東向きの時は、資は北、師は南なり　此の時又讃を催すこと前の如し、梵語三段等、鉢は中段少し早く突くなり。

次に閼伽（アカ）の印眞言を行ず等。　口決に云く、先づ(二)前供の方の閼伽器を取り揚げ、香に薰せず、只手に居きて(三)小三古の印を結び、ラン字三反（ペン）之を加持し、タン を一遍誦して之を供ずること常の如し。但し五供の印言幷びに偈の文、之を結誦することなし。又閼伽を盤に滴らし花鬘を散ずる等の儀、都て之れなし、(四)理供を用ゐざる故なり。文永紀に云く

次に八供の印言を行ず。　口決に云く、師傳に依りて此を用ゐざるなり。

(一) 事供、事供養なり、前に註す。

(二) ヲシスル念珠を押し摺るなり。

(三) 無所不至の印、前の要秘鈔にあり。

師云く今は行せざるなり後夜の五供にも之を行せず、只事供計りなり。

次に(一)事供。　塗香●花鬘●燒香●飯食●燈明●皆香に薫せざること前の闕伽の作法の如し、理供の印言を用ゐざること是れ當流の師傳なり。

種々の花香を以て供養することは等。　此れ受者を供養するの所以を明す、此の文は誦せざるなり。

次に大阿念誦を取る等。　口決に云く、當界の大日の眞言 ばざらだどばん の明百遍、數を越し早卒に念誦し、念誦し了りて少し珠を(二)ヲシスルなり。

次に後供を行すべし等。　先づ塗香等皆前供の如し。

次に印可の偈を授く等。　口決に云く、(三)無所不至の印、飯命ばんと師資同じく結誦し、牒を取りて三遍之に授く、次に偈一遍、但師のみ之を誦す、訓に讀むなり。

次に寶冠を脱すべし。　口決に云く、寶冠を取り收む、受者頭を傾けて、師自ら之を取るなり。次に諸具皆收め畢りて、其後箱の蓋を覆ふ、但し緒を結ばず。同壇の受者、所作皆了りて後、緒を結ぶなり。

私に云く大阿闍梨等。　口決に云く、此の時に道具箱、東座の大阿の左方へ、

(一) 赤蓋、白傘蓋に對す。　赤傘蓋なり。

(二) 新阿闍梨、受者灌頂を受けて新阿闍梨となるなり。

(三) 八祖師眞言宗の傳持の八祖、龍猛、龍智、金剛智、不空、善無畏、一行、惠果、弘法大師の八人なり。

(四) 大金剛輪大金剛輪は諸尊の受茶羅を主る故に其の能生の德に依りて、諸法の闕分を補ふ、如何なる破戒者も此の功德に依りて、滿足するなり、故に修法中に此の印言を加ふ。

(五) 一字金　梵字の一字を金剛輪の眞言とするものなり、普通には一字金輪の眞言に一字を誦す、此の時一打の金を打つ故に一字金と稱す。

教授指し心得て直し置くべし。西の方に在れば寶冠等を取り收むるに便宜惡敷なり。

次に讃聲を止む。　口決に云く、檜扇を以て板敷叩きて聲を止む、教授も亦此の如くするなり。若し受者一人ならば自然に聲の止むを待つなり。

次に大阿闍梨受者を相具し等。　口決に云く、小壇を出る時は、先づ資、次に師、其の時教授は(一)赤蓋を大阿に進む、大阿之を取り(二)新阿闍梨の頂に覆ひ、大壇の前に到りて三禮蓋の上下は三禮畢りて蓋を教授に渡して平座に着くなり。教授蓋を取りて又新阿に覆ひて(三)八祖師を巡禮せしむ、合掌して一揖す畢りて蓋を本所に置き、受者を引きて引入所の机の邊に至り、三衣等の物具、本の如く之を持せしむ、戸を開きて受者を出す、同壇幾人も皆此の如きなり。又其の禮の樣は、西は龍猛より順に之を禮し、東は先師より逆に之を禮す、其の禮の間は大阿平座に着するなり。

次に教授小壇の五瓶等。　其の作法は具に教授記の如し。

次に大阿闍梨大壇に還着す。　口決に云く、教授退出し畢りて大阿登禮盤し、禮なし、此の時承仕、居箱香呂箱を本所に直し置きて退出するなり

(四) 大金剛輪眞言七遍を誦し、次に(五)一字金を打ちて一打一字の呪百遍を誦するなり、一字の金を聞きて、職衆徽音に一字の呪を誦す。大阿念誦了り

て、念珠を摺りて受者の悉地を祈る、後珠を蟠げて脇机に置くなり。

次に後供養。　宥雄師云く、(一)四面の供具を供ずるに三義あり。一には云く三方の供養は、前の方は前供養の次に一一に之を供し、閼伽は前の方の閼伽の次に之を供じ、乃至燈明は燒香の次に之を供ず、後供は准知せよ。一には云く、前の方の前供を供じ了りて、三方の前供一度に之を供ず、後供も亦爾かなり。一には右方の中瓶迄は前供の時之を供じ、中瓶より左の方は後供の時之を供ずるなり。又曰く、八祖の供具は何時之を供ずるや。師答へて曰く、金剛界には前供養の方計(はかり)を、前供の燈明の次に、八祖の閼伽等を一度に前供養の方計りを供ずるなり。後夜胎藏には後供養の燈明の次に、八祖の閼伽等、一度に後供養の方を供ずるなり。樣多き中に、師主畏は此を用ゐ給ひしなり。金界は前供を本となすが故に前供の次に供じ、灌頂の開白なるが故に前供を本と爲す胎藏は灌頂の(二)結願なるが故に、後供を本となす、仍て後供の次に之を供ず。云云　已上。又亮然和上の云く、本壇の前供の燈明の次に、龍猛の前に供ずる閼伽乃至燒香一度に𑖨𑖨𑖨にて之を加持し、𑖨字にて之を供ず、(三)佛供●汁●田菓子●一度に之を供ずるなり、次に燈明なり、餘皆准知せよ、後供も亦復此の如きなり。文　今は後の義を用ゆ。初夜の時

(一)四面の供具　四角なる大壇上に莊嚴せるは四面にあり、例へば六器等四面に飾りあるが如し。

(二)結願　修法の最後をいふ。

(三)佛供云々　飯にて寶形、團形等に握りて佛に供するもの、汁は小豆等を煮たるもの、田菓子は餅なり。

に前後の供物皆供じ畢るなり。

次に(一)佛布施。後供の閼伽の次なり　口決に云く、閼伽の次に左の手を以て脇机の佛布施を取り、右の手に移し、(二)五色の下より燒香の煙に薰じ、亦左の手に取り直して、右の手に小三古の印を結び、𑖨字三遍を誦して加持し、𑖨字一遍を誦して供養すること、常の如し。次に(三)普供養の印を結んで、佛布施を印の上に置きて、普供養の明三及び偈を誦して、金界の曼荼界會に供じ奉り、供じ了りて右の手を以て大壇の左の方に置くなり。後供の方なり、次に祖師壇の佛布施は、龍猛●龍智等の八祖各別に、𑖨●𑖨にて之を供ずるなり。

次に(四)後鈴(レイ)。　口決に云く、惣じて外儀の法用には(五)拍掌(ハクショウ)を用ゐざるが故に、讃の了る迄は大阿所作なし。道快記に云く、拍掌は之を用ゐず、或る人は之を用ゆ。云云

次に讃。　四智漢語鉢は初の一一を除く。心略漢語鉢は前供養の如し　四波羅蜜前供の下段の鉢に反し

次に(六)普供養●三力●祈願。

唵阿謨伽布惹摩尼跋納摩縛羅怛他蘗多(七)(八)●以我　●如來　●及以　●普供養四切

(一)佛布施　佛に供養するといふ、絹を布施するといふ、最良とするも、奉書紙を用ふるもあり。

(二)五色　五色線といふ。五色、壇線といふ。

(三)普供養　前に頭註せり。

(四)後鈴　前に鈴を振りしに對し、後鈴後にある故にといふ。

(五)拍掌　兩掌を合せ拍ちて聲あらしむること三度、これ聖衆を歡喜せしむ。

(六)普供養云云　前に頭註せり。

(七)怛他蘗多の下に尾路枳帝三滿多鉢羅薩羅吽の句あり、之れ普供養の眞言なるも、梵唄にて謂ある時は本文の如くす。

(八)以我云云　自下四句は三力を擧ぐるも、修法の時は句を略す、三力の事前に註せり。

(一)南部云云　自下決定に至る迄小祈願なり、文は普供養兩部、諸尊護法、所設哀愍、護持消除、増長恒受、無邊決定。

(二)六種廻向、六種供養に同じ、此の事前に在り。

(三)解界　結界を解くを云ふ、即ち修法の法に印明にて結界ぜるときは一座修法の終に其の結界の印明を解くなり。

(四)地結　地の結界、即ち道場の結界なり。

(五)撥遣　要秘鈔にあり。

(六)三部云云　前に頭註ぜり。

(七)四色　色を付けるは食粉の色を掛るなり。

(八)五瓶造花　五瓶に挿む五色の花なり。

(一)南部　●諸尊　●護法　●所設　●哀愍　●護持　●消除　●無邊　●決定

次に禮佛。　南無摩訶　●南無阿閦　●南無寶生　●南無無量　●南無不空

南無四波羅　●南無十六　●南無八供養　●南無四攝　●南無金剛界　●南無大悲胎藏界

次に(二)六種廻向。　常の如し、但し終りに護持受者成大願の句を加ふ。

次に(三)解界。　口決に云く、一壇の時は、初夜には(四)地結を解かず、後夜には必ず解く可し。

次に(五)撥遣。　次に(六)三部●被甲護身等。

次に普禮。　次に出堂。　後戸より出で房に還る。

(此處に次頁の初夜の圖あり)

已上初夜の作法了る。

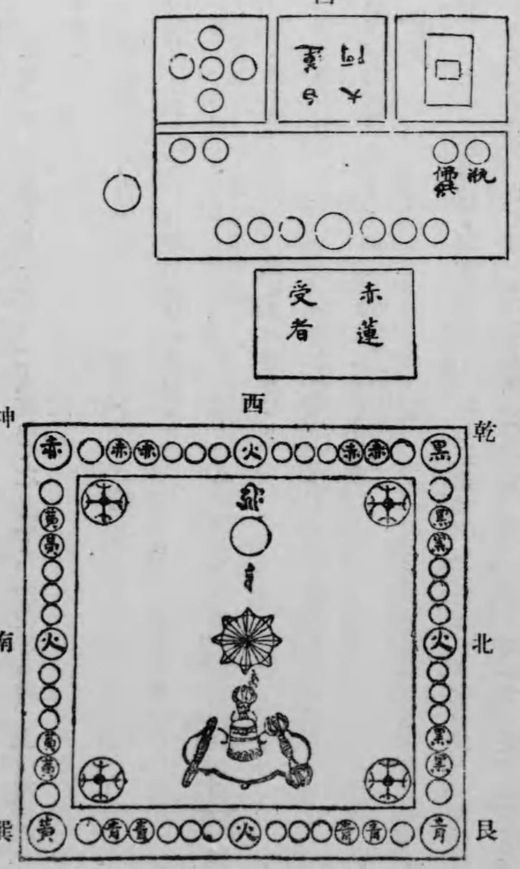
一佛布施。　初夜畢りて佛布施は便宜の所へ取り移し、後夜の佛布施は取り替へ置くべし、其の數は惣じて二なり。

一(七)四色佛供。　初夜は東青南黄西赤北黒四面各〻四杯。惣計十六杯、圖の如く知るべし。

一(八)五瓶造花　初夜は中白艮青巽黄坤赤乾黒。

一小壇所の供物は初後に皆備へ替るなり、又同壇の時も一一の受者に、皆改め備ふ。

初夜の圖　○燈　蓮座赤白は初後異ふべきなり



一祖師壇。　諸供物等は初夜の儘に之を改めず、但だ香を盛り替て斷やさず燈

明に油を加ふ、是れ師傳なり。

一　敷曼荼羅は當界を上に爲し、二枚重ねて之を敷き、初夜畢る時、上の曼荼羅を取り去るなり。

一　曼荼羅運心の掛け樣。　東向きの堂に就く。

北胎○何方にても行者の右胎左金是れ運心なり。

南金○寂云く、南は因、北は果なり、因の方に果を掛け果の方に因を掛く、是れ運心なり。若し隨方ならば東向きの時北金南胎南向東胎西金西向南金北胎因果の方に隨て曼荼を掛く、故に是れ隨方なり。

(一)壇の糸の引樣は。　一切隨方を用ゐて艮より引き始むるなり。

五瓶及び佛供等は皆糸と同じ。隨方運心等の義は、皆高然和上の口說なり。

(二)護摩（ゴマ）

金剛盤の上に、鈴●五鈷●獨鈷を置かず、但し三鈷を少しスジカヘテ之を置く、獨鈷は(三)護摩師之を持す、故に置かず。又本尊を懸けず、又(四)打鳴（ウチナラシ）を置かず、此等は皆故實の口傳なり。

一　同壇幾人なりとも終りの受者の引入の程を考えて座を起つ。晴（ハレ）の時は裝束を改む

(一)壇の糸云云大壇上の橛の圍りを繞る五色線をいふ。

(二)護摩　護摩の事は要秘鈔に委說せり。

(三)護摩師　護摩を修するものを護摩師といふ。

(四)打鳴　打ち鳴らす金なり。

る等の義あり、無作法の時は其の義なし。

一　護摩所に到り、先づ香呂を取りて大壇に向つて一禮、次に護摩壇に向て三禮、着座し、直に(一)入護摩なり。今は大日即ち本尊なるが故に別に本尊加持無し。中觀記に云く、仰せに云く總して(二)召請●撥遣なし、(三)五段各各の召請●撥遣は皆滿足するが故に、前後供養の義無き程では何ぞ獨り此儀あらん、但事供養は五段の護摩了て總じて普供養の印明を以て之を供ず、謂く世天段の撥遣以前に普供養の印明を結誦する也。

一　大阿闍梨行するを受者の規模となす。實紹記に云く、宥雄口決大阿闍梨兼行の時に、若し同壇あらば、加持物を更に土器に入れ脇机に置き、正受者の加持の作法了て、又土器の加持を取りて、本器に移し入れ、作法すること前の如し、後の度は觀念は投る間に之を觀ぜよ。受者は左の脇机の傍に坐し、大阿闍梨の左の手に受者の右の手大指を握りて加持物を投ぐ、數を記するに及ばず、其の盡るを期となす。又亮然和上の云く、紹師は此の如く記さると雖も、予が入壇の時に亮元和上護摩を兼行し、其の時予は正受者なり。加持物を投る間、師の左の手を以て予が大指を握りて如法に之を行せらる。同壇の受者には此の作法なし、傍受者に於ては行せず、但し是れ略の義か、進んで考

(一)入護摩　護摩法は初めに本尊の供養次に護摩の順序なるも、こゝには直に護摩に入るなり。

(二)召請云云　本尊を招待するの印明となり。印には大鉤召の印を用ゆ眞言は噎醯噎嚧娑婆訶と云ふ、撥遣のこと前に註せり。

(三)五段護摩法　五段護摩法は、流派に由りて異れども、其の五段とは小野流にては火天段、部主段、本尊段、諸尊段、世天段の五つなり。

ふ可し。云云 寂云く、淨光と及び余と同壇にて先師に隨て灌頂を受く、其の時は兼行なり、兩人共に大指を執りて加持物を投ず、實紹の記と同じ。其の時は亮元和上を證明となす。若し爾らば其の具略は但是れ師師の意樂のみ。疏の第八に云く、又闕伽を奉じ、然る後に諸尊を頂禮し、諸の弟子を召して上の文の記す所の如く、散花等の法を作り、乃ち告げ語ること都て竟らば、方に一一の弟子を護摩所に引て阿闍梨左邊に於て、恭敬の心を以て蹲踞して住す、師左の手を以て弟子が右の手の大指を執り寂灾の眞言を誦じ、一誦ごとに一び火食を施す、此の如く廿一遍に至る。諸の弟子是の如く之を作す。文 若し本文に依らば諸の同壇に於て皆悉く此の作法を作すこと其の義見るべし。

一(一)神供師(ジングシ)は、諸尊段の頃より用意して、世天段の程を經て之を行ず可し、常の神供に異らず、總して東に向て之を修するなり。

(一) 神供師 諸鬼神に供養する作法を神供といふ、此の作法を行ずるものを神供師といふ。

國譯傳法灌頂初夜作法事記 終

國譯傳法灌頂後夜作法事記

金剛子 曇寂

先づ卯の一點とは。　文永記に云く、(一)後夜の鐘を以て、衆會の時刻となす、山上には寅の螺に鐘を撞くなり此等の說は皆受者一人の時に約す。若し同壇ある時は、(二)初夜畢りて後夜の道場、供具等を畢りて、暫く休息ありて軈て道場に入る、必ずしも時刻を期せず。

次に大阿闍梨、東曼荼羅等。　壇前普禮、着座等作法、皆初夜の如し。

次に金二打。　口決に云く、後夜は常の(三)結願の作法の如し、(四)神分を用ゐず、金二丁、直ちに(五)唱禮を出すなり。

次に(六)一切恭敬敬禮等。

次に(七)入佛三昧耶。　曩莫(ナウマクサ)三曼多(マンダ)沒駄南(ボダナン)、一切(イチサイ)●阿三迷怛哩三迷二切(アサンメイチリサンメイ)●三摩曳三切(サンマエイ)音(リ)

次に(八)法界生。　曩莫(ナウマクサ)三曼多(マンダ)沒駄南(ボダナン)一切(イチサイ)●達磨駄覩薩縛婆縛句含(タラマダドソハバクカン)二切に牒を取る。

次に(九)九方便長音

(一) 後夜の鐘なり、朝の鐘なり。

(二) 初夜 灌頂は初夜即ち夕刻より金剛界灌頂を始め其の夜に了り、翌朝未明より胎藏界灌頂を行ずるものなり、勿論初金後胎の方法なり。

(三) 結願 前にあり。

(四) 神分 前に在り。

(五) 唱禮 禮佛にして、大阿の說法稱揚に擬するなり

(六) 一切恭敬 金剛界は五悔を唱へ胎藏界は九方便を唱ふ、阿闍梨發音し、職衆助音するなり。

(七) 入佛三昧耶 九方便の句に恭敬の句に一切恭敬と云ふ

(八) 法界生 常住三寶と云ふ

(九) 九方便 入佛三昧耶大日經具緣品に出づ。

後夜作法は胎藏界灌頂作法なり、その修法及び外儀に在りては金界と大に同じ、故に頭註の略するもの多し

(八)法界生生眞言にして、法界日經具緣品に出づ。

(九)九方便　小野仁海僧正の作、即ち作禮、出現、歸依、施身、發菩提心、隨喜、勸請、奉請法身、遍向の九方便をいふ、今文は略ぜり。

(一)轉法輪　轉法輪眞言なり。

(二)仰願云云の下の〔　〕ハ句の明瞭の爲めに私に入るなり、下の句之に準ず。

(三)五誓　五誓願なり。

(四)中間の讃頂の際、修法の間に受者を引入し受者に華佛位に登りたる佛位に登りたる讃嘆せんが爲めに唱ふる讃なるが故に名く。

(五)爰莫自下の句は普供養眞言の全句の内の一部なり。

次に(一)轉法輪。　　曩莫三曼多縛日羅赦●縛日羅怛摩句舍二切に牒を取る。

次に擬金剛。　　曩莫三曼多沒馱南●唵縛日羅迦縛遮吽二に牒を取る。

次に勸請。香呂を取る

(二)仰願胎藏大(日尊)　●八葉(蓮華請如來)　●十三大會(摩利衆)　●敎令(輪者不動尊)　●南部界會(諸如來)

●外金剛部(威德天)　●不越本誓三(味耶)　●降臨壇場(受妙供)　●護持受者(成悉地)　●滅罪(生善成大願)

●消除無明　●顯得薩埵　●決定不退　●自他圓滿　●天下法界同利益

次に(三)五誓

誓願斷除一(切惡)　●誓願度(脫一切生)　●誓願修習一(切法)　●誓願奉(仕一切佛)　●誓願證得大菩提

口決に云く、誓願證得大菩提の句を唱ふる間に、護得受者成悉地の句を微音に之を唱へ、其の後に香呂を置くなり。

次に前供養讃。　　讃頭之を誦すとは、三昧耶戒時の讃の頭、初後夜の前後の讃、

及び(四)中間の讃皆之を出すなり。　四智、心略、西方、鉢は常の如し、

次に普供養三力

(五)曩莫薩縛怛他蘖帝瓢尾濕縛日契微音　烏娜蘖帝此の一句助音

(一)以我云云　自下三力なり。

(二)佛眼　前に出づ。

(三)四無量觀　慈と悲と喜と捨の佛の四德を觀じて、一切衆生を等同ならしむるの觀なり

(四)正念誦　要秘鈔に出づ。

(五)散念誦　前に在り。

(六)西に向ふ　是れ東向きの堂の故なり。

(一)以我如來　及以普供養金一丁、前供二切り

口決に云く、金巳後職衆は(一)佛眼の眞言、微音に之を誦す。

次に(二)四無量觀。　口決に云く、此は廣次第に就く、今は略次第を行ずるが故に此の義なし。

次に振鈴。　振鈴の後、職衆は當界の大日の眞言之を誦す。

次に鈴の後暫くありて等。　口決に云く、敎授は(四)正念誦の比より座を起て後戸より堂内に入るなり。

次に(五)散念誦。　佛眼廿一反　金大日百反　當界千反　少し誦し始めて起座する等初夜の如し。

次に禮盤等便宜の所に取り移さしむるなり。　皆初夜の如し、大阿平座に着し念誦す。

次に敎授五瓶行道。　行道了りて受者を引入する等、此の一件は皆敎授の記の如し。

次に壇前に引入す等。　口決に云く、一壇の時は初後夜同じく象の頭を(六)西に

(一)大鈎召の印前に出づ。

(二)佛子云云　佛子今已に如来眷屬の部中に入りて、當に一切如来の寂勝の悉地を得べし。未入壇の者の前に此の法事を說く事なかれ、其の罪重しと唱ふるなり。

(三)唵三云云　唵三昧耶薩怛鑁といふ。

(四)鑁す云云　受者、佛の印璽を授る時に吉慶讃を唱ふる時に阿闍梨より鑁ふ。之を初鑁(シヨモヨカ)といふ。

向ふなり。その越する時は、先に右の足、次に左の足なり、初後夜同なり。

次に大阿(一)大鈎召の印等。　皆初夜の如し。

次に受者壇前に立つ。　口決に云く、大壇の前に到て、資は曼荼に向ひ、師は受者に向ふ。此の間に教授樒を取りて資の印端に挿む。師告げて云く、(二)佛子今已に入る等。此の語は一遍、耳邊にして之を誦す。次に密語三遍は牒を取て二〻切りに之を授く、微音なり、

(三)唵三昧耶。云云　三遍誦し了りて投花せしむる等、皆初夜の如し。寂の云く、此等の眞言等は、大日經及び瞿醯經には之を說かず、皆是れ師承なり。

次に覆面を脫せしむ。　次に投花せし所の花を取る等。　次に受者護身。

次に四禮せしむ。已上の作法は、皆初夜の如く異ならざるなり。　次に大阿受者を引きて小壇に到る。

次に讃を大阿は(四)鑁すべし等。　小壇に到り畢らば聽て讃を鑁す。漢語五段、鉢は中段に之を突く。初夜の如し　其の後、箱の緒を解きて散杖を取り出し五本中瓶より次第に之を立つ。

次に又讃大阿乃至梵語三段誦す。　寂云く、此の事は具に初夜の事記に之を辨

(一)理記　本記の次に出す。

(二)彌陀の印、彌陀定印、阿彌陀定印、金剛界、胎藏界、其他種種々の印あるも阿彌陀如來の定印なす、印は二手仰て相背け、兩頭指竪て相叉へ、兩大指は其の端に横ふなり。

(三)卅餘云云　疏に大惡刀乃至平等尊なる開悟は二十五尊なり、此に三十餘させしは大數に約せしものか。

ずるが如し。

次に五股を取り首を加持す。(五)字七反を誦す。　口決に云く、次第に載せずと雖も、師傳に依て初夜の如く之を作す。寂の云く、大秦の本に云く、私に問ふて云く、初夜には、此の所に於て五古を以て首を加持す。云云　而るに今之を見ざるは如何。師主答へて曰く、初夜に加持したれば然らざるか。本式の文に見ざるは、サテコソアラメと示し給ふ。首加持𥝩𥝩𥝩𥝩已上　寂云く此の問答恐らくは是れ畏の問、淳僧正の答へか。

寂云く、問答の意は、初夜に加持するが故に、後夜には之を略す。本式にも後夜には此の義なきのみ。此の問答は今の口決と大に違す、今は用ゐざるなり。又太秦の付紙に云く、師の云く初夜の如くせ太等の明を用ゆ云云、口說甚深なり。文當流の傳を得ざること見るべし。

次に五瓶の水を以て等。　受者の頂に灌ぐこと皆初夜の如し、眞言も亦同じ、大日經等には五佛灌頂の眞言を說かざるが故に。寂按ずるに大日經には四大菩薩の瓶を說く、此の義具には(一)理記の如し。

次に大阿(二)彌陀定印を結ぶ等。　此の中の觀文は、具に疏の第十三九紙卷に之を明すが如し、理記に具に之を辨ず。　口決に云く、(三)卅餘印言は具には疏の第

次に如來身會卅餘印を行すべし等。

十三に之を明すが如し。今略次第に依る故に、只(一)大惠刀●大法螺●滿願●毫相●悲生眼●の五箇の印明を用ゆ、受者をして之を結誦せしむ。

白拂。　團扇。　塗香。　其の作法は初夜の如し。

次に五股。　頌及び眞言を誦する等の作法、皆初夜の如し。

金篦。　明鏡。　法輪。　商佉。　其の作法、皆初夜の如し。但し其の次第は初夜と異る。此の義は理記に辨ずるが如し。

次に大阿闍梨白傘を執る等。　次に立て曼荼羅に對して等。

次に共に小壇に還り着す等。　此等の作法は皆初夜の如し。

次に大阿闍梨西座に着す。　寂云く、今の小壇は南北の故に、大阿北に着し受者南に着するなり。着座畢れば即ち讃を催す、梵語三段、作法初夜の如し。

次に閼伽の印言を行ず等。　先づ前供、閼伽作法、初夜の如し。

次に五供印言を行ず。　皆初夜の如し、理供を用ゐざるなり。

次に事供。　皆初夜の如し。

次に種種の花香を以て等。　此の文は讀まず、只大阿の觀念なり。

(一) 大惠刀云云　大惠刀、大法螺は前に在り、滿願は一切滿足の印、毫相は如來眉間の白毫相をなしたる印、肉眼を加持して佛眼を開かしむる爲めの印なり依て悲生眼といふ。

次に大阿念珠を收る等。　口決に云く、當界大日眞言、ボダラウンケン の明百反、早卒に之を誦す、誦し了りて少しく念珠を摺るなり。

次に後供を行ずべし。　但し事供を行ず、作法前の如し。

次に道具を授く。寂云く、此より教理に違せざるに至て五古杵を授くる文は、本と略出經に出づ、今は稍々文を略して之を出すなり。

次に殊に五股を授く。　口決に云く、先づ大阿、右の手に五鈷を持し、(一)偈を誦すること一遍、次に眞言一遍、牒を收りて之を授く、告げて曰く。

此の金剛杵等と。云云　次に決定要誓の密語を授く。云云口決に云く、師右に五股を持ち、偈及び密語を誦し了りて、次に杵を受者に授く、一度受者虛心合掌して二大二頭の間に杵を横に之を挿みて一度頂戴す。次に師杵を執り、又右の手を持して弟子に告て曰く、汝一切衆生に於て等。云云　又頌に曰く。云云　口決に云く、一遍之を誦し、其の後、杵を箱に收るなり。

實紹云く、横に杵を授くるも杵を受くるも、師資共に横平等の意か。云云　先師云く、恭畏口傳に云く、金界は竪差別の故に、大阿横に之を持し頌と明とを誦す。受者は合掌して、頭と大との二指を大に開きて竪に之を受くるなり。胎界は横平等の故に、大

(一) 偈　前に在り

阿は堅に之を持し、受者は金界の如く、掌を大に開きて之を受け、二大を以て之を押すなり。云云

次に受者此の如きの敎を受く等。　口決に云く、大阿闍梨、机の下より右の足を指し出す。其の時、資は右の手を以て師の足の程を撫でゝ之を頂戴すること三度、但し直に三度頂戴するにあらず、一度足の裏に觸れて三度頂戴する運心なり。次に次第を指し出して資に唱へしむるなり。

大師の敎の如く我れ誓て敎理に違せざるに至る。云云

又口決に云く、未練の弟子ならば、師、牒を収りて、如大師敎等と之を唱へしむ。云云

又畏師付紙に云く、此の一段受者に敎へて之を誦せしむ。近來は其の義なし、只大阿密密に之を誦するか。

次に印信。　當界の印信を授くること、印信文に之を出すが如し。

灌頂を授與し竟る等。　口決に云く、此の頌一遍、但師のみ之を唱ふ。

次に寶冠を脱ぎ、諸の道具を收め、蓋を覆ふ等の義、皆初夜の如し。

次に讃聲を止む。　私に云く、自然等とは一人の時に約す、若し同壇あらば、

板敷を叩て之を止む、作法初夜の如し。

次に大阿受者を相具す等。　作法皆初夜の如し。

受者禮し了り、堂内に着座すべし。　口決に云く、若し堂内狹くんば、便宜の所を相許して居らしむべし。後夜には敎誡ある故なり。若し座處なくんば、且らく本座に着せしむるなり。

次に敎授師等。　具に敎授作法の如し。

次に承仕を召して禮盤を等。　此等の所作皆初夜の如し、但し道具等直し了らば、敎授承仕に仰せて、香を盛り次ぎ、燈明を挑げさせ、其の後退出すべし。若し儀式の時は暫く出すべからず。正受者の裝束など改めて、還列の用意之れあるべし、若し無作法ならば則ち此の義なし。

次に大阿闍梨大壇に返り着す等。　一字金一丁、職衆は金の聲を聞きて一字の呪之を唱ふ徽音大阿念誦し了りて、珠を摺りて受者の悉地を祈る。次に珠を蟠げて脇机に置くなり。

次に後供養。　作法初夜の如し。

次に佛布施。　加持供養作法は初夜の如し、但し壇の北方に之を置く、東し向きの堂に約す。

當界の方なり、此の時祖師の佛布施も、龍猛より次第にもちにて之を供ずるなり。

次に結願の事由。　珠及び香呂を執りて金一打。微音に之を唱ふ、兩部傳法の行法等。

以下常の如しとは。　外金剛部金剛天等。云云　神分祈願等常の如し。

次に讃。　心略字を加ふ　佛讃、不動鉢常の如し　口決に云く、祈願の金の終りの音を聞き合せて之を出す。大阿終りの金を高く分明に之を打つなり。

次に普供養三力等。　曩莫薩縛怛他蘖帝瓢尾濕縛目契微音　烏娜蘖帝此の句の發音は、牒を取りを唱ふ

●以我●如來●及以●普供養後供四切り●兩部●諸尊●護法●所設●哀愍●護持●消除●無邊●決定

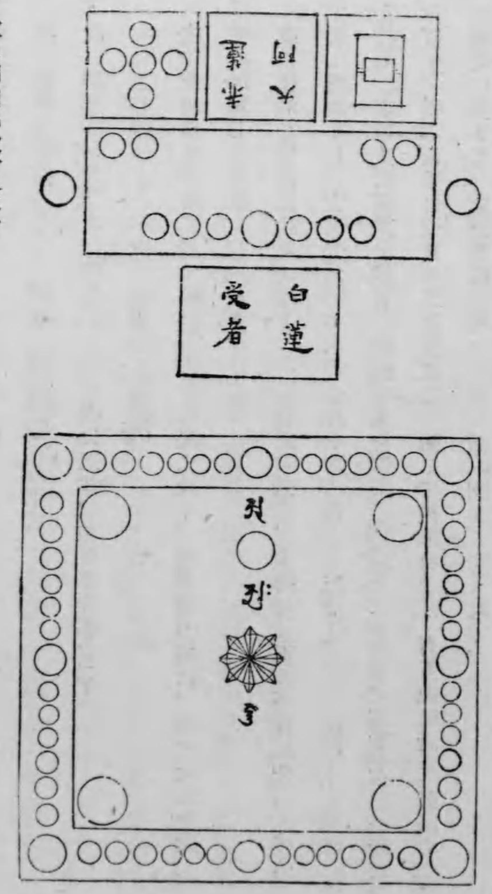
次に禮佛。

●南無摩訶●南無寶幢●南無開敷●南無無量●南無天鼓●南無普賢●南無文殊師利●南無觀世音●南無彌勒●南無阿里也●縛日羅娑縛儞●縛日羅軍荼利●縛日羅焰曼德迦●縛日羅藥叉●南無大悲胎藏●南無金剛界一切

次に後鈴。

次に後夜偈呂を取り金一丁、大阿頭を出す、諸衆助音

衆等に白さく、各〻此の時の清淨の偈を念せよ、諸法は影像（エイシヤウ）の如し、清淨にして瑕穢なし、取說するに不可得なり、皆因業より生ずと。



次に回向呂を取り金一丁

修する所の功德、三寶願海を廻向し、三界天人を廻向し、一切神等を廻向し、世賢靈

等を廻向し、聖朝安穩を廻向し、法界を廻向し、無上大菩提を廻向し、護持受者大願を成せん。

次に廻向大菩提。　所修一切（此の二句は香呂を置き金剛合掌）

次に解界。（地結を解くべし）　次に撥遣。　次に三部、被甲護身等金二丁

次に下禮盤。　次に禮佛（呂を取り三禮起居常の如し）　口決に云く、無作法の時は、但だ大衣を脱し、受者に付属して着せしむるなり。

次に堂内便宜の所に於て等。

次に受者を堂内に相具す等。　口決に云く、大阿は正面の平座に坐し、受者は半疊に着かしむ、大阿香呂箱の水精念珠を取り出して三匝となし、膝の上に兩掌に之を持し、其の上に五胡を置き、敎誡の文を唱ふ、（暗誦なり）唱へ了りて、念珠五古を一所に之を授く、受者兩手に受けて之を頂戴し、而して後退出。（云云）有る記に云く、敎誡の詞は受者慥に聞きて、信仰を發す樣に丁寧に讀み聞かす可きなり。

國譯傳法灌頂後夜作法事記 終

國譯傳法灌頂理記上 戒場

沙門曇寂記す

（理記は前掲載の事記中にある理を說明せしものなれば事記と對讀を要す。重語多きが故に頭註を除くこと多し）

余曾て(一)事記三卷を撰ぶ。事は謂く今時の灌頂、相承の事法なり。一一の事法みな本據あり、所表あるは之れを理と謂ふなり。事あれば必ず理あり、是れ一具の法門にして、知らずんばある可からざるなり。事あるが爲めの故に、久しく置て辨せず。今此の擧を事とする意は、同門の徒をして能く密義に達して、滯碍無から令めんが爲めなり。初に大意を辨ずるに、大に分て四となす。一には名義を辨じ、二には其の體を明し、三には功德を申べ、四には文に隨て解釋す。初に名義を辨ずとは、(二)梵に阿毘詵（アビシン）者といふ、此には灌頂といふ（略出(三)經）。仁王の陀羅尼（ダラニ）釋に云く、薩嚩毘嚧迦とは、此には一切灌頂といふなり。毘色訖帝とは此に所灌といふなり、會意して翻じて、灌頂の法を以て其の頂に灌（そそ）ぐといふなり。文解して云く、上の句は是れ能灌、故に灌頂の法を以てといふ。次の句は是れ所灌、故に而も其の頂に灌ぐといふ。阿毘（アビ）は灌なり、詵（シン）は

(一) 事記三卷前掲載の三卷をいふ。

(二) 阿毘詵者秘鈔にありたり、要見(ミル)べし。

(三) 仁王般若陀羅尼釋といふ一卷不空譯。

頂なり、ヿは所の義、故に所灌といふ、其の頂は是れ所灌の處なり。

次に其の義を明さば、(一)不空三藏の云く、菩薩大士灌頂法門は是れ最極の秘途、入佛の正位とするなり。頂は謂く頭頂、大行の尊高を表す。灌は謂く灌持、諸佛の護念を明す、超昇出離何んぞ斯れに由ること莫らん。文 按ずるに灌頂の梵に大悲護念の義を具す。畢醯經に云く、凡そ灌頂を蒙むれば、諸佛菩薩及び諸尊みな悉く證明し、加被護念したまふ。云云(二)秘藏記に云く、灌頂の義は、灌とは諸佛の大悲、頂とは上の義、菩薩の初地乃至等覺、究竟して妙覺に遷る時、諸佛大悲の水を以て頂に灌げば、即ち自行圓滿して佛果を證することを得、是れ頂の義なり、諸佛の大悲は是れ灌の義。云云また灌頂とは是れ佛種不斷の義。第十五に(三)傳敎灌頂を釋して云く、汝今より已後、亦た我の如く異なることなし、漫荼羅を造て諸の弟子を(四)度し、法をして久住にして佛種を斷たざらしむるが故に。云云また第一に(五)彌勒尊を釋して云く、此の慈は如來種姓の中より生じて、能く一切世間をして佛家を斷せざらしむ。また第八に二十九第四の讃を釋して云く、若し(六)兜率天に補處の菩薩あれば、則ち世間に佛種斷せず、彌勒尊は是れ灌頂地の菩薩なり、併せ思ふべし。また第十五に世間の國王の灌頂を明し畢て云く、今如來法王も亦た復た是の如

(一)不空三藏、付法第六祖、梵には阿目佉跋折羅と云ひ、翻じて智藏といふ、獅子國(錫蘭)の人。

(二)秘藏記、漢文に二卷、慧果阿闍梨の口說なり、大師記すといふ、或は不空三藏の口說なりとも、慧果阿闍梨記すとも傳ふ。

(三)傳敎灌頂、傳法灌頂と同じ、この事要秘鈔に委說あり。

(四)度、濟度なり、彌勒、慈氏又は慈尊とも云ふ。

(五)彌勒、菩薩なり、兜率天に補處の菩薩なり。

(六)兜率天、彌勒尊の淨土なり、兜率天に攝化すること、菩薩は佛處に補ひ、釋尊に次で此の世に降來し、衆生を救濟すべし、故に補處と信ぜる、といふ。

し、佛種をして斷せざらしめんが爲めの故に、甘露の法水を以て佛ずの頂に灌いで、佛種をして永く斷せざらしむるが故に、世法に順せんが爲めの故に、此の方便印持の法あり、此れより以後、一切の聖衆に咸く敬仰せらる、亦た知る是の人、畢竟して無上菩提を退せず、定んで法王の位を紹いで、諸有の所作、眞言身印、瑜伽等の業みな敢て違越せざるなり。文 畢竟して無上菩提を成じ、(一)一切智智の果を得るは、即ち是れ佛種不斷なり。また第八二十三阿闍梨、復た當さに漫荼羅の一切諸尊を頂禮すべし、灌頂の爲めの故に、至誠啓白し、即ち寶瓶を持し、徐く曼荼羅を遶ること三迴し已て、復た更に法の如く加持して弟子の所に至り、先づ囉字を用ゐて火となし、其の身を焚燒して悉く灰となし已りて、方に四瓶を用ゐて次第に之れに灌ぐ、灌ぎて已て此の灰中を觀じて嚩字門を作せ、其の色純白なり、此れより五字を出生す、所謂る阿鑁嚩斛欠、其の五(二)字輪を持し、次に暗字を說いて、其の頂上に在て轉じて中胎藏となる。また此の字より三重の光焰を生ず、一重は遍ねく咽の上を遶て照し及ぶ所の處に隨て、諸尊隨現して、即ち第一院の曼荼羅となる。次の一重は光遍ねく心上を遶て、諸尊隨て第二重の曼荼羅を成ず、次の一重の光は、遍ねく臍上を遶て、諸尊隨現して第三重

(一)一切智智、佛菩提の位を得るといふ。

(二)字、兩本の義釋及び承和古本にこれなし。

の曼荼羅を成ず。爾の時に弟子都て漫荼羅身となる。若し更に深釋せば、即ち是れ普門法界身なり。また十六十七廣く字を以て字を燒する義を明し畢て云く、當さに知るべし、火動く時即ち風と俱なり、風輪は即ち是れ訶佉字の義なり、また嚩字の上に點を加ふ、此の點は即ち是れ大空の欠字門なり、微妙の法水空より注いで、以て其の心器を淨む、當さに知るべし、即ち地●水●火●風●空、五字の義を具す。然るに此れは皆な是れ如來秘密の義、徒に文の如くなるのみに非ず、當さに善く之れを思ふべし。行者既に是の如く遍く無垢の身を照すを得、壽命還活して悉皆無垢なり、意生身義は、是の如く意生の身を堅固ならしめんと欲するが爲めの故に、更に方便あり。云云 行者、意生身を得ば、義は佛樹牙生と同じ、即ち是れ佛種不斷の義なり。また灌頂とは(一)我執を離るゝの義なり。第三卷二十五に云く、其の性調柔にして我執を離るとは、此の我執は、梵本に灌頂の字に作る。阿闍梨の云く、此の字義は相應せず、我執を離るといふべきなり。云云 解て云く、灌頂の梵の中に即ち我執を離るの義を含む、𑖭𑖼は離なり、𑖭𑖼に我執の義を具するなり。また𑖭𑖼𑖼𑖼といふ、𑖭𑖼は𑖼𑖼と通ず、(二)離薩迦の義を具す見るべし。夫れ我執を離るれば即ち佛種顯現す、其の義相關るのみ。また慈恩の理趣分

(一) 我執 我の執着をいふ。

(二) 離薩迦 薩迦を離るゝなり、薩迦さは我見なり。

疏上三十灌頂實冠超過三界の文を釋して云く、第五の灌頂智藏法門に顯る所なり、下經に解して言く、若し世間の灌頂の位を以て施せば、出世の灌頂果を得べし。西域に世間の(一)刹帝利種の太子、將に帝王の位を受けんとするに、先づ有德の婆羅門等を請ひて以て師傅となし、千里の象に乘じて四大海水を取り、吉祥の第、沽波海水を以て太子の頂に灑ぎ、其れをして淨潔ならしめて大吉祥と作り、四方を歸伏せしめ、方さに王位を受く。古翻の經には刹利水澆頭王といふ、今新に翻じて刹帝利種灌頂大王といふ、王の身は必ず是れ刹利種なり、婆羅門を請じて以て師傅となし、其の頭頂に灌ぐ。婆羅門姓は梵行淨戒を修するの族なるを以て、故に刹帝利請じて其の頂に灌ぐ、此れ乃ち法王の位を受くるの儀式に效ふなり。謂く第五地の究竟の菩薩、色界の上の大自在宮に生じて、蓮華臺の中に金剛定を起たんとするに、受佛の位、諸の菩薩に勝れ、菩薩の中に尊たり、佛の長子に名けて太子となす。十方の諸佛是れ其の師傅として各〻慧手及び右臂手を舒べ、三世佛の淸淨法水を以て其の頂に灌灑す。頂とは謂く心首と及び其の頭首となり、無始より來の(二)二障の垢穢、有漏の染汚を除く、遍滿淸淨無漏潔白の殊勝法王の位、世の太子の既に灌頂し已て、王の冠を戴き、王の服を著け、王の殿に處る

(一) 刹帝利 印度四姓の中、王族をいふ。

(二) 二障 煩惱障及び所知障。

が如し、佛法の太子亦た復た是の如し、將さに法王の位を受けんとするに佛の冠を戴く、謂く一切智と一切種智となり、是れ佛の心首に戴持する所なるが故に、即ち是れ(一)觀照般若波羅蜜多なり。此の功德の法は眞實の珍寶なり、七聖財の中、名けて慧財となす、故に此の冠冕を寶冠と名く。二際の佛の功德法衣を服するは、即ち是れ慙愧●柔和●忍辱の上衣なり、此の智慧の冠は是れ大智藏なり、一切の善法此れより生ずるが故に。十方佛の空寂寶殿に處り、是の如く冠衣等を戴するに由るが故に。無始の惡友、煩惱の水を以て其の心頂に澆ぎ、生死の心首に戴する所の愚癡醜惡の冠冕、生死に著する所の無慙無愧、剛强俱戾、瞋恚惡眼、悉く消滅することを得、永く棄捨を爲し、永に更に三界の牢獄にも入らず、故に降伏衆惡普勝法門と名け、亦たは灌頂智藏法門と名く。云云 今此の宗の意は、理に依て事を顯す、是を以て事灌頂に依て我執を離れば則ち一切智の果を得、應に知るべし頭頂に依て心頂を得、是れ灌頂の實義なり。疏第八二十四及び第十五十八廣く世間の國王の灌頂を明せり、繁を恐れて出さず、用ふる者往て披け。

二に灌頂の體を明さば、(二)第十五卷に(三)五種三昧耶を釋する中に云く、一に曼荼羅を遙見す、但し法會を見ることを得て未だ印及び眞言を授けず 二に曼荼羅座位を見る花を本位に投げ得佛印言を授與ずこれ結緣灌頂に當るなり 三に曼荼羅及び印位を見る、是れ受明灌頂なり 四に傳敎曼荼羅即ち今時の傳法灌頂に當るなり 五に秘密三昧耶、即ち秘密灌頂なり 又た金剛頂には五種の灌頂あり、所謂る寶冠●印契●以水●光明●及以び名號なり、三賢●十聖、正覺を成ぜんとするに、一一の位の中に或は佛菩薩與に灌頂す。文 然るに今時の灌頂は是れ相承說なり、唯だ二種あり、謂く結緣(ケチエン)及び傳法(デンパウ)なり、故に(一)承和宣符に云く、灌頂に二種あり、一には結緣灌頂、二には傳法灌頂なり云云 而るに近頃有人、水ノ尾受明灌頂の式に依り、受明灌頂を建立す、是れ相承の說には非るなり。

第三に灌頂の功德を明さば、(二)瞿醯經に云く、凡そ灌頂を蒙るに、諸佛菩薩及び諸尊、並びに眞言の菩薩皆悉く證明し加被護念したまひ、聖觀自在及び執金剛、所有の眞言悉く成就す、乃至生死の中に在りて惡趣に墮せず、貧家に生せず、當さに天人に生れて恒に佛世に遇ひ、菩提に於て曾て退轉せず、大福德を具し、久しからずして生死の苦海を出離して、當に無上菩提の果を得べし。文 灌頂の軌に大日經を引いて云く、爾の時(三)金剛手、佛に白して言く、世尊若し諸の善男子善女人有て、此の大悲藏生大曼荼羅王三昧耶に入る者は、彼れ幾所の福德聚を獲、是の如く說き已て、佛、金剛手に告げて言く、

(一)觀照云云 實相般若波羅蜜多に對す、般若即智慧の力用あるをいふ

(二)第十五卷 大日經疏なり。

(三)五種三昧耶 大日經秘密曼荼羅品の所說、密徒修行の階級を五種に分てるもの、初見三昧耶・入觀三昧耶・具壇三昧耶・傳敎三昧耶・秘密三昧耶是れなり。

(一)承和宣符 承和十年十一月十六日、東寺に於て傳法職位を定め并に結緣灌頂を修すべき官符にあり。

(二)瞿醯經 不空譯、三卷四十六紙、具には瞿醯壇跢羅經といふ密敎の曼荼羅建立及び灌頂に就て重要視せるもの。

(三)金剛手 手に金剛杵を持す故に名く。

秘密主、初發心より乃し如來を成ずるに至るまで、所有福德聚、是の善男子善女人の福德彼れと正等なり。秘密主、此の法門を以て當さに是の如く知るべし、彼の善男子善女人、如來の口より生ずる佛心の子なり、若し是の善男子善女人所在の方處には、即ち將さに佛あり、佛事を施作す。是の故に秘密主、若し佛を供養せんと樂はゞ、當さに此の善男子善女人を供養すべし。若し樂ふて佛を見たてまつらんと欲はゞ、即ち當さに彼を觀るべし、能く魔軍を摧破し一切を利樂す。是の故に汝等、一切如來の眞實の智慧を得んと欲せば、應に一心に此の法を修行すべし、能く速かに一切智を成就するが故に。文 問ふ。何故に必ず灌頂に入ることを用ふるや。答ふ。瞿醯經に云く、若し愚人有て曼荼羅に入らずして眞言を持誦し、遍數を滿すと雖も終に成就せず、後に邪見を起す、彼の人命終して地獄に墮す。若し彼に眞言法を與ふることあらば、彼れ亦た越三耶昧戒に墮し、命終の後、嚕羅婆地獄に墮せん。

因みに其の支流の義を辨せん。

問ふ。今時、灌頂前に於て一百箇日護摩法を修す、其の本據云何。答ふ。(一)攝眞實經に云く、若し阿闍梨、灌頂を與授せん時には、先づ三月其の心を觀察し、然る後

(一) 攝眞實經　具さには諸佛境界攝眞實經といふ三卷五十八紙、般若の譯。

灌頂の法を授與すべし。文

また(一)遺告に云く、三箇月練行せしめ、然る後に兩部大法を授くべし。云云古德皆此れ等の文に依て定法と爲すなり。故に文永記に云く、不動護摩百日三時、叮嚀に之れを勤修すべし。文 問ふ。受者が行は必ず百ケ日なるべきか。答ふ。三ケ月練行せしむべし。文然れば九十日許りを滿し憚ある可からざるか。若し吉日無くんば、九十日以後は百箇日に滿たずと雖も之れを遂ぐべきか、百日は常儀なり云云 師口に云く、(二)加行百日を滿すと雖も、支具調はずんば之れを延べ行ふべし、斷絶すべからず。云云

問ふ。(三)三昧耶戒前に於て、今時受者加持法ある本據云何。答ふ。(四)第五卷初紙に云く、第六夜に至て、乃至前所造の白檀曼荼羅處に、如法に自身と道場と及び諸弟子とを加持すべし。其の弟子を護るの法は、下の文の入灌頂時の所說の如し。云云下の文とは第十五八紙の二明王加持の文を指す、文は廣くは往いて披け。又た第十卷に云く、如來此の二明を說きたまふことは、皆是れ彼の法師の三昧なり、行人をして初發菩提心より守護し增長して、佛果の圓を生成せしめて終に退失せず非道に墮在せざらしめんが爲めには、即ち不動明王是れなり。世間の(五)難調の衆生を降伏せんが爲めの故

(一) 遺告　弘法大師遺告なり。

(二) 加行　本行を修するに前修行をなすこと。

(三) 三摩耶戒　前に在り。

(四) 第五卷　大日經疏なり。

(五) 難調　強剛難化の意。

には、即ち降三世明王是れなり、相ひ次で之れを說く、所謂る三世とは、世は貪●瞋●癡に名く、此の三毒を降すを降三世と名く。また云く、謂く降伏三世の明、及び不動明を以て諸事を護る、若し理說せば、此の降伏三世と不動明王とは即ち是れ大菩提心なり、一切衆生を守護し、彼の善根を自在成就せしむるに堪ふ。次に阿闍梨位印明を授くとは、金剛薩埵及び大日法身の阿闍梨位を成就せしめんが爲めなり。秘經に云く、爾の時金剛界如來、復た一切如來、眼色如明色三摩地に入る、復た攝一切阿闍梨行位の眞言を說いて曰く、

(一)唵、嚩日羅、素乞史麽、麻賀引娑入怛嚩、吽吽。若し眞言行者此の明を持し、日々に誦持し一月所を經、是の一切の阿闍梨、修行する所の法事と一切智慧と、通達義利と、善巧方便とを速かに獲得すべし、即ち爲めに一切如來常に應に要護し、金剛薩埵常に親友となり、常に行人の心中に住し、憶する所の處に便ち至り、更に請召及び印契眞言等を勞せず。若し常に此の眞言を持せば、一切諸明悉く皆成就し、諸の持明仙、常に小使となり、焰魔王●水天●火天●風天●主藏天●自在天●(二)那羅延天●(三)帝釋天等、常に使者となり、所須を供給す、一切の意願速に獲て久しからず、當に大

(一)唵　要秘鈔に在り。
(二)那羅延天　大疏五に一徒悉紐舊譯には吐紐といふ云云」とあり、迦樓羅鳥に乘じて空中に行く。
(三)帝釋天　十二天の一、八方天の一、東方の守護神なり。

金剛阿闍梨位、法性大日の身を得べし。一切見者皆な悉く足を禮し降伏歡喜す。其の印は定惠の手を以て肘を屬し上に向け、(一)合掌肩と齊ふして各〻戒●忍●方●願●を屬し、掌に入れ、或は坐し或は立す、皆な成就す。

第四に文に隨て解釋せば、當流の所傳に其の二本あり、一に(二)勝覺僧正所制の本式、及び(三)道教授式なり、今授式に就て之れを記す。

三昧耶戒作法。

東西を禮するなりとは。金を西曼荼羅と稱し、胎を東曼荼羅と名け、即ち兩部の曼荼羅を禮す。故に注に云く、是れ兩界を拜するの意なりと。問ふ。何故に東西と稱するか。答ふ。道場南に向ひ、金を西方に掛け、胎を東方に掛く、所以に東西の稱を立つ、假令運心の時は、左は金を安じ右は即ち胎、其の義知るべし。

大阿闍梨壁代に入るの時、逆行すること云何ん。本圓記に云く、鶴林鈔に云く、左遠行道して壁代に入る事。師の云く、或人說いて云く、大師始めて此の朝に於て(四)實惠僧都に授くるの時、戌亥の角に(五)青龍の阿闍梨を現せしめ給ふ、仍て大師憚を成して東方より遠りて入り給ふなり。云云是れ浮說なり。戒場の作法にして、戒師は左に遠る

(一)合　一本に令に作る。
(二)勝覺僧正　醍醐山三寶院流の開祖。
(三)道教　道教方なり、道教のこと前に頭註せり。
(四)實惠僧都　前に註す。
(五)青龍の阿闍梨　慧果阿闍梨。

なり。東大寺の戒壇式、並びに延暦寺の式等見るべきなり。云云 先師入寂の後、倩〻愚案を回すに云く、大師在唐の間、青龍和上早く歸寂の條、定んで遺憾に思食したまふか。本朝に於て大事傳授の時、現せしめ給はゝ、進み寄て尤も殘す所の法等を問はしめ給ふべき事か。遠く去るの條、實に其の謂なし、但し其の僞り尋ぬべき事なり。東大寺戒壇式に云く、次に和上十小師は東、教授師は引頭となり、近廊より徐行歩して堂前を過ぎ、〇下の層壇に登り左に遶ること一匝。次に堂達〇受者を引いて下の層壇に登て、左に遶て即ち東二面に在り、佛を禮すること三拜なり抄 叡山戒に云く、已上私に云く(一)常喜院の思案尤も謂あるか。然るに戒壇式に、左遶の本據分明なり、仍て大阿闍梨の左遶行道併ら此の義なり。

無言行道。是れ亦た戒壇を遶るの儀則なり。本圓記に云く、遍口に云く、(二)醍醐方には小金剛輪の眞言を誦するなり、輪壇の義なるが故なり。師口に云く、爾らず。凡そ三摩耶(三)戒體に於て二說あり、或は(四)住無戲論執金剛を以て體となす。云云 此の尊の三形は獨古と種子 或は金剛薩埵を以て戒體となす 三摩耶五古なり 故に持金剛衆、獨古を持して住無戲論三摩地に入る。大阿闍梨は五古を持し、金剛薩埵三摩地に入るなり。仍て持金剛衆、無言行道の

(一) 常喜院の思案 鶴林鈔の文を指す。常喜院の流は心覺を祖とす、高野山常喜院に相承す、又往生院流とも いひ、三十六流の一。

(二) 醍醐方 此には三寶院流と稱す。

(三) 戒體 前に註す。

(四) 住無戲論云云 妄想戲論を斷滅する德を有する、大日經の十九執金剛の一なり。

時には、獨古を取り直して右手に於き、心に𑖀字を念じ戒壇を加持す。大阿闍梨は此の戒壇に於て、三摩耶戒を授くべき故なり。謂く住無戲論を戒體とするの本據は、大日經疏第五九丁に云く、今此の淨戒は正しく住無戲論金剛智印を以て體と爲す。文今此の淨戒は三摩耶戒を指すなり。金剛薩埵を以て戒體となすことは、三摩耶戒の(一)眞言は金剛薩埵の眞言なるが故なり。兩說の中、(二)金薩戒體の義を以て深秘に習ふなり。仍て新阿闍梨灌頂以後は、五古を以て持金剛となす、是れ則ち持戒の義なり。獨古を以て持金剛には用ゐず、仍て金薩戒體深秘の義、之れを思ふべし。但し(三)五古●獨古を以て持金剛となし深秘に習ふ、是れ金剛薩埵と住無戲論と不二の義に約する故か。五古●獨古の本說は大日經疏に出づ、然りと雖も義に於て分明ならず。云云 師傳に云く、住無戲論執金剛は、即ち(四)金剛手院に住して、彼院に住する尊は皆是れ金剛薩埵の具德なり、仍て金剛薩埵、住無戲論、不二一體の義之れあるべし。云云

寂按ずるに此の恐くは爾らず。何となれば、住無戲論の戒を主るは、但だ是れ大日經說にして、金剛頂經更に此の說なし。今所授の戒は是れ兩部通戒なり、何ぞ獨り住無戲論を體とせんや。況んや且是れ只だ無言行道所誦の明呪なり、云何んぞ是に於て戒體を

(一) 眞言 チン、サンマヤ、サトバンは又金剛薩埵の眞言なり。

(二) 金薩 金剛薩埵の略稱。

(三) 五古●獨古 五古は五股杵の略 獨古は獨股杵のこと、獨一法界の標示なり、前に註す。

(四) 金剛手院 胎藏界曼荼羅の金剛手院なり。

論せんや、之れを思ふべし。彼れは但だ學者の意樂にして、是れ相承の說には非るなり。今當流小金剛輪の呪を誦するは、戒場を加持し、諸の弟子をして佛戒を成就し、所建の曼荼羅、吉祥淸淨ならしめんことを明すなり。今具さに其の證を擧げん。(一)軍荼利軌に小金剛輪の印呪を明して云く、即ち金剛因菩薩の印を結ぶ、(二)敎令輪曼荼羅を成就せしめんが爲めの故に。普ねく一切有情をして冥然として金剛界等曼荼羅に入るが故に。瑜伽者則ち同じく一切曼荼羅に入るが故に。一切灌頂を受くることを得るが故に。事業建立する所の一切曼荼羅、吉祥淸淨なることを成し、不增不減にして、一切如來稱讚したまふが故に。金剛因の(三)契を結び(四)及び密語を誦ずべし。二手各〻金剛拳に作り(五)進●力●檀●惠●互相に鉤げ印を結び、自の口上に安じて誦すること三遍すれば、則ち金剛界等、敎令輪、一切曼荼羅に入ることを成ず。次に頂上に安じ、復た印を以て所建の事相及び觀所成等、曼荼羅の上に按ずれば、則ち眞實を成じ金剛薩埵の如く親り輪壇を建立す、此の密語を誦して曰く、唵引一薩二婆羅合斫羯羅二合吽二弱吽鑁斛三。次に(六)振鈴とは所謂る驚覺の鈴なり、鈴は即ち驚覺の義なり。謂く弟子の心中の(七)如來藏性を驚覺して三昧耶佛戒を受得し、亦た諸佛を驚覺して弟子を加持し護念せんが

(一) 軍荼利軌具さには甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌亦は甘露軍荼利儀軌とも、いふ。一卷廿三紙、不空譯。
(二) 敎令輪 佛の怒怒身をいふ。
(三) 契 印契。
(四) 密語 眞言。
(五) 進●力 左右の頭指。左右の小指。
(六) 振鈴 法則に依りて鈴を振るこ
(七) 如來藏性 佛性なり。

爲めなり。夫れ三昧耶とは平等●本誓●除障●驚覺の義なり。第九十九(一)入佛三昧耶の眞言を釋して云く、結して三昧耶といふは、即ち是れ必定師子吼して、諸法平等の義を說くが故に。大誓願を立て、當に一切をして我の如くなることを得しむべきが故に。普ねく衆生のために淨知見を開かんと欲ふが故に。此れを以て衆生と及び諸佛とを警覺するが故に。是の故に此の三昧耶を名けて一切如來の金剛の誓誡となす。若し先づ念持せずんば、一切の眞言の法事を作すことを得ざるなり。文今所授の戒を佛性三昧耶戒と名く、一切衆生、本自等しく具して闕減あることなし。但だ加持に依て之れを獲得す、外より來るに非ず、故に先づ警覺して之れを發明せしめ、即ち三昧耶の義と相應す、是れ警覺の鈴の義なり。

香水を以て受者の頂に灑ぐとは。第四十七灑淨の眞言の[illegible]の句を釋して云く、第二の句の中は、最初の阿字門を以て眞言の體となす、所謂る種子の字なり。餘の諸字門は皆此の字を莊嚴せんが爲めの故なり。此の字門は即ち是れ菩提心の本原なるを以て、今造る所の大悲藏生曼荼羅王なり。乃ち先づ香水を用ゐ、灑淨するは皆な是の如くの心地を治し、諸の垢穢を離れしめんが爲めの故に。若し外境を論せば、亦た是

(一) 入佛三昧耶云云 佛の胎に託する義にて宿障を亡して三業を淸淨ならしむる意、眞言は阿三迷涅哩三迷三摩曳娑訶といふ。

れ所持の金剛の心地なり、是の故に餘字は、皆此の字門を成せんが爲めなり。また本性淨の句を釋して云く、第五の句義に、本性淨といふは、還た阿字淨菩提心門を轉釋す、及び香水の義なり。如來は等至法界の香を以て、大悲三昧の水と和合して、能く普く一切衆生の心地に灑ぎて其の垢穢を除く。何が故に是の如くなる、彼の本性淨に由るが故に、水の性本淨なるが故に、能く諸の垢穢を淨むるが如く、如來の香水、亦た是の如し、本淨に由るが故に。能く一切衆生の心を淨むるを以ての故に。

次に身口意を淨むとは、諸尊を禮せんが爲めに三業を淨むるなり。是れ所謂る勝義の澡浴なり、亦た實相の澡浴と名くるなり。軍荼利軌に云く、修瑜伽とは外淨を執すべからず、常に勝義の自性清淨の法水を以て、理の如く相應して清淨の密言三遍を誦せよ、淨三業眞言云云また(一)法華軌に云く、如し其れ時別に澡浴するに及ばずんば、即ち清淨の眞言を誦し、衣服を加持せよ、此れ即ち名けて勝義の澡浴となす、眞言加持三遍、或は七遍。

次に(二)聖衆を禮拜すとは。此は總じて兩部の諸尊を禮す、實には是れ己身本具の海會の諸尊なり。軍荼利軌に云く、又た(三)五輪を地に著けて禮を作すべし、復た想へ自身

(一) 法華軌　法華經觀智儀軌「成就妙法蓮華經瑜伽觀智儀軌」のこと、一卷二十六紙、不空譯。

(二) 聖衆　諸尊菩薩なり。

(三) 五輪　五體なり。

遍ねく一切の如來及び菩薩の足を禮すと。密言に曰く(一)普禮眞言云云此の密言の加持に由るが故に、能く瑜伽者をして座を起たずして、遍ねく十方に至り、眞實に一切(二)塵刹の海會の諸佛如來を敬禮せしむるなり。

次に金剛界諸尊を禮すとは。次に別して兩部の諸尊を禮す、此は初に金界なり。或る傳に先づ胎藏となす等とは、小野は初金後台の故に、先づ金界を禮するなり。今時の行用は兩部一夜に行ずるが故に、授戒は唯一時にして兩部同戒なり、故に今兩部の諸尊を禮し上るなり。曩謨(ナウマク)薩(サツ)婆(バ)怛(ダ)羅(ラ)駄(ダ)都等とは。先づ總じて海會の諸尊を禮す、曩謨は歸命なり、薩婆は曰羅駄都は金剛界なり、薩婆沒駄(サツバボダ)は一切諸佛なり、南は多の聲なり、次に五佛を禮す、知るべし。

次に胎藏を禮す等とは。先づ三種の三昧耶を誦す、知るべし。南無麼訶(マカ)等とは總じて胎藏の諸尊を禮す、麼訶佉魯(キヤロダ)拏は大悲なり、誐羅婆(キヤラバ)虞左(クシヤ)は胎藏なり、薩縛沒駄南は前の如く知るべし。次に(三)八葉九尊を禮す、知るべし。佛子至心に聽くべし等已下は正しく戒を授く。故に香爐を置て如意を取る、是れ說戒の作法なり。略して八門有りとは、此れは初めに標門なり、禪要には十一門あり、今略して八門を擧ぐるなり。第一歸命等

(一) 普禮眞言　前の事記にあり。

(二) 塵刹　無數の意なり。

(三) 八葉九尊　胎藏界曼荼羅の中、中に大日、八葉に四佛（寶幢・開敷華王・阿彌陀・天鼓雷音）四菩薩（普賢・文殊・觀音・彌勒）あるなり。

とは禪要に第一發心門といふ、兩文相會せば、謂く自ら心を發して三寶に歸命するなり。經第七には作禮方便といふ、今末の句に我今至心に禮すといふ、即ち是れなり、各〻一義に據て名を立つ、義相違せざるなり。歸命十方等とは、禪要の文に依て七言の偈とするなり、禪要には云く、十方一切諸佛と大菩薩と大菩提心とに歸命すと、即ち是れ三寶なり。歸命眞言等、今、經の第七の文を擧げて句義を出さば、

唵一南麽、薩婆怛他引蘖多二迦引耶嚩引乞灑合二多三播娜鑁反無范娜難迦嚩引四去三身義なり 歸命なり敬禮なり 一切如來なり 身語意なり 足なり 禮なり 我作なり 總じて云はゞ、一切如來を歸命し足を我れ禮を作すなり。今眞言は迦野引といふ、經には引の字なし、然るに句義集に云く、 は身なりと、是れ異本なるのみ。

第二運心供養とは、禪要には第二供養門といふ 次に教へて運心せしむべし、遍く十方の諸佛及び無邊世界の微塵刹海の恒沙の諸佛菩薩を想へ、自身一一佛前に於て頂禮讚歎して之を供養し上ると想へ 此の注文は即ち運心の相を明す、知るべし。今十方に於て等、又禪要に依て偈に結ぶなり。供養兩部界等已下は禪要に之れなし。今は灌頂の法門なるが故に、作者意を得て加ふる文なり。供養眞言に曰くとは、是れ大虛空藏の眞言なり。菩提心戒儀の運心供養に此の眞言を出す、彼に云く、普供養虛空藏眞言に曰く、

唵、誐誐曩引三婆嚩、嚩曰囉二合解。句義に云く、 虛空 生なり 金剛なり 種子喜なり

第三に懺悔とは、此の偈は第七卷の全文なり、禪要は文甚だ廣し、故に今は依らざるなり。出罪眞言は、經に云く出罪方便の眞言に曰く、

唵一薩婆播波、薩怖二合吒、二娜訶曩、伐折囉、二合也、薩嚩訶。句義に云く、 三身義 一切罪なり 梵燒なり 爲金剛なり 決定成就の義また大涅槃の義 總意に云く、一切罪業を金剛の智火となす、梵燒し摧破せられて、大涅槃を證得するなり、 字は謂く爲聲なり。

第四歸依等、また禪要に依て偈とするなり、眞言第七卷の經に云く、歸依方便の眞言に曰く、

唵一薩婆勃馱、菩提薩怛鑁二合設囉耨孥車弭三伐折囉二合達磨四頞唎二合五 前の如し 菩薩なり 歸依なり 我歸なり、上に合して我歸依といふ、謂く我今一切の佛菩薩に歸依するなり 一切法なり、上佛菩薩は佛僧の二法此は即ち法寶、上に合して總じて三寶に歸依するなり 種子

第五發菩提心、禪要に云く、第五發菩提心門、弟子某甲、始め今より乃至當に菩提道場に座し、誓願して無上の大菩提心を發す、衆生無邊誓願度、福智無邊誓願集、法門無邊誓願學、如來無邊誓願仕、無上佛道誓願成、

今發す所の心、復た當さに我●法の二相を遠離し、本覺眞如平等を顯明し、正智現前し善巧智を得、普賢の心を具足し圓滿し、唯願くは十方の一切諸佛諸大菩薩、我等を證知したまへ、至心に頂禮したてまつる。菩提心眞言。經第七に云く、發菩提心眞言に曰く、唵一菩提質多二母多播引二合娜、夜弭、三句義に云く、ぼだ(菩提此に覺といふなり)し心なり。ぼだ(發生)ぼだ(我なり、總じて云く、我今菩提心を發生するなり)

歸依より此に至る三種は、疏亦た此れに同じ、第五に云く、次に當に諸の弟子の爲めに隨順して說法し、其の心を開導し、彼を敎へて三自歸依し、先罪を懺悔せしむべし。既に懺悔已れば身心淸淨なること猶し明珠の如し、眞正の發心に堪能なり、是の故に次に菩提心を發せしむるなり、皆供養法中の所說の如し。

第六問遮難、禪要に云く、先づ問ふ(一)遮難若し七逆罪を犯すことある者には、師授戒を與ふべからず、敎へて懺悔せしむべし。復た七日二七日乃至七七日、復たは一年に至り、懇到に懺悔して好相を現ずべし、若し好相を見ずんば、戒を受くとも亦た戒を得ず。諸の佛子汝等生じてより已來、父を殺さゝるや、汝等母を殺さゝるや、佛身の血を出さゝるや、阿羅漢を殺さゝるや、和尙を殺さゝるや、阿闍梨を殺さゞるや、和

(一) 遮難の二字寫本之れ無し、恐くは脫あるか。

(一) 普賢觀經、觀普賢菩薩行法經、法華經の結經なり。(二) 摩醯首羅天宮、又は大自在天宮ともいふ、大日如來の所住處さいへり。

合僧を破せざるや。汝等若し如上の七逆罪を犯さば、應に須らく衆に對して發露懺悔すべし、覆藏することを得ず、必ず無間に墮し無量の苦を受けん。若し佛の敎に依て發露懺悔すれば、必ず重罪消滅することを得、淸淨の身を得、佛の智慧に入て速かに無上正等菩提を證せん、若し犯さゞる者は但だ自ら無しと答へよ。

第七請師とは、標門は禪要に依ると雖も、其文同じからず。奉請摩醯首羅等とは、禪要に云く、釋迦牟尼佛を請じ奉り、和上となす。云云 彼は(一)普賢觀經等に依て釋迦を和上となす。今は秘密の佛性三昧耶戒を明すが故に、改めて摩訶毘盧遮那といふ。(二)魔醯首羅天宮とは謂く報身の佛なり、疏に廣大金剛法界宮を釋して、此の宮は是れ古佛成菩提の處、所謂る魔醯首羅天宮といふ是れなり。奉請淸涼山中とは、禪要に淸涼山中と云はず、今、次の兜率天に對せんが爲めの故にいふなり。奉請兜率天等、禪要に此の文之れなし。普賢觀に云く、今釋迦牟尼佛を我が和尙となし、文殊師利を我が阿闍梨となす、當來の彌勒願くは我に法を授けたまへ、十方の諸佛願くは我を證知し、大德の諸菩薩願くは我が伴となりたまへ。文未だ審かならず、禪要は何が故に此の一法を闕くや。

第八羯磨、又た禪要に依れども悉く其の文を改む、今の文を三となす、初に正しく等とは、弟子をして諦聽せしむるなり、若し受けんと欲せば、の下は已受の顯戒を擧げ、(一)五篇●七聚は謂く具足戒なり、四重●十無盡は已に具足戒の中に在れば、是れ重戒の故に、重ね擧ぐるなり、猶ほ天龍八部等と言ふが如し。其の三聚とは謂く三聚淨戒なり、禪要には但三聚を擧げて諸戒を攝す、今は重重に之れを出すなり。登壇得戒の時とは、凡そ古昔は諸宗皆な東大寺の戒壇に於て受戒するが故に爾かいふなり。三に四重戒者の下は正しく今戒の羯磨を明すなり。此の四重●十無盡戒は正しく大師の秘密三昧耶戒儀に依るなり、(二)四重戒とは此れ大日經所說の根本の四重なり、亦た阿闍梨の戒と名く、第七夜入壇灌頂の時に於て、(三)傘蓋行道畢て次に此の戒を授くるなり。第八二十に云く、阿闍梨、次に當に傘を持し、用ひて其上に覆ひ、引て漫荼羅を旋遶せしむること三迊すべし。先づ第一院を遶れ。云云 既に周り已らば復た西門の二龍廂衛の處に至て、其をして慇懃に禮拜せしむ。其の傘は身に隨て上下して以て之れを蔭ふべし、即ち爲めに三昧耶の偈を說くべし。所謂る秘密藏中の四種の重禁なり、此れ等は皆な是れ(四)阿利沙偈なり、(五)下に當さに之れを釋すべし。また略出經第四二十に云く、次に

(一)五篇七聚 前に頭註せり。

(二)四重戒 前に頭註せり。

(三)傘蓋行道 事記に出づ。

(四)阿利沙偈 利沙を譯して聖主といふ、聖主の頌なり、即大日の讃頌なりといふ。

(五)下に 第九卷を指す。

引起して大壇の前に至り、爲めに三摩耶を說き、其をして堅固ならしむべし。告げて言く、善男子、汝應さに堅く正法を守り、設ひ逼迫惱害に遭ひ、乃至斷命するも捨離すべからず、修菩提心は、求法の人に於て慳悋すべからず。諸の衆生に於て少く不利益の事あるも亦た作すべからず。此は此れ寂上の句義、聖所行の處なり、我今具足して汝が爲めに說き竟る。汝當さに隨順して說の如く修行すべし、弟子自ら慶幸し合掌して頂受す文●問ふ。今何が故に戒壇に於て之を明すか。答ふ。今は兩部一夜の作法なるが故に、其の晝日に於て之れを授く、其の行儀、經軌と異なり、此は是れ相承の說なるのみ。

一には捨正法等とは、秘密三昧耶義に云く、必ず四波羅夷を專精にして誓て(一)缺犯なかるべし。所謂る(二)四波羅夷とは若し毀犯することあらば、由ほ頭を斷ち命根續かず、則ち一切の支分能く爲す所なく、久しからずして散壞するが如し、菩提心戒の四種の戒相も亦た是れ大乘正法の命根なり、若し破壞する者は由ほ死尸の如し、種種の功德を修すと雖も久しからずして敗するなり。第一に正法を捨し、邪行戒を起すべからず、戒は如來の一切の正敎となす、皆な修行し受持し讀誦すべし。由ほ大海の百川を呑納

(一)缺 一本に鈌に造る。

(二)四波羅夷 事記に頭註せり。

して猒足の心無きが如し。若し諸乘の了不了の義に於て、隨て一法に於て棄捨の心を生じ、及び邪行を起すを即ち名けて犯となす、第一の波羅夷を犯すを得ず、能く持つや否や答ふ能く持つ。

第二に菩提心を捨離すべからざる戒、此の菩提心は菩薩の萬行、猶ほ大將の幢旗の如し、即ち是れ三軍敗績して他勝處に墮す、是の故に菩提心を捨離すべからず、若し菩提心を離るゝ、是れを第二の波羅夷を犯すと名く、犯すことを得ず、能く持つや否や。

第三には一切の法に於て慳悋すべからざる戒、諸の勝法は皆な是れ如來勤苦修行して身命を損棄す、乃至其の僮僕床座と爲て、然して後に之れを得て、是れ一切衆生の父母の遺財なり、獨り一となすに非ず、若し慳悋して與へざれば、三寶物を盜するに同ずるが故に、犯すれば第三の波羅夷なり、犯するを得ず、能く持つや否や。

第四に一切衆生に於て不饒益の行を作すことを得ざるの戒、此は是れ四攝に相違する法なるが故に、菩薩は四攝を修行し、普ねく一切衆生を攝して入道の因緣となす、而るに今反て四攝の相違をなして衆生に障道の因緣を起し、饒益を捨つるが故に、犯すれば第四の波羅夷なり、犯することを得ず、能く持つや否や。

十無盡戒とは、若し經疏に依らば、三寶と菩提心とを四重戒となす、方便學處品に說く所、十善戒を以て十重となす、此の四重と十重とを總じて弟子の戒と名く、第六夜の白檀曼荼羅に於て之れを授く、而るに今出す所の十無盡戒、何んぞ彼れと異なるや、答ふ。此れ亦た秘密戒儀に依る、其の本は禪要に出でたり、即ち彼の全文なり、第十七の疏に亦た此の戒を出す、文少しく異りあり。今具さに之れを引けば、彼二十四に云く、前の三世無障碍戒の中の如し。先づ三寶を捨てざらしめ、また菩提の心を捨てざらしむ、此れ即ち菩薩の眞の四重禁なり。○聲聞經の、重を犯し已れば即ち沙門に非ず釋子に非ず衆數に入らざるが如し。今此の中、若し佛法僧と菩提心とを捨つれば、即ち衆數に入らず、彼の二乘の四重を毀るが如し。然れども行者自ら犯戒と知らば、更らに自ら其の心を洗浣して重ねて之れを受くれば、即ち還て戒を得す、二乘の戒の、石を拆り頭を斷じて再び得る義なきには同じからず。復た次に菩薩に自ら十重戒あり、前不殺等の如きは其の數に在らず、乃ち是れ偷蘭なり。云何んが十なるや、其の四は(一)前の所說の如し、更に六重あり併せて十となすなり。第五の重禁とは、謂く一切の三乘の經法を謗せず、若し謗すれば即ち是れ佛法僧を謗し大菩提心を謗す、故に犯重なり。秘

(一) 前の云云三寶菩提心四重を指す。

密藏の中に一切の方便は皆是れ佛の方便なるを以てなり、是の故に一一の法を毀らば即ち是れ一切の法を謗するなり。乃至世間の治生●產業●藝術等の事も正理に隨て是の佛の所說に相順する者は亦た謗することを得ず、何に況んや三乘の法をや。第六に一切の法に於て慳悋を生ずべからず、若し犯毀せば重禁なり。菩薩の一切の法を集むるは、本一切衆生のためなり、若し秘惜する所あらば、即ち菩提を捨つるを以ての故に重を犯すなり。第七に邪見を得ず、謂く(一)因果なし、佛なし、見道の人等無しと謗する、諸の邪見皆な是れなり。若し邪見を生ずれば自然に佛法僧及び菩提を捨す、故に重戒を犯す、而も聲聞は但し偸蘭を得るなり。當さに知るべし、方便具足せずして、但だ是れ一途に隨て說くなり。第八に大心を發す人に於て、前より其の心を勸發して退息せしめざるなり。若し其の懈退を見て勸發せず、或は其の心を沮止して若し無上菩提の道を離れしむるは、即ち是れ一切如來の所應作の事に違逆す、故に重を犯すなり。第九には小乘の人前に於て、彼の根を觀せずして而も爲めに大法を說き、或は大根の人の前に於て彼の根を觀せずして、小法の行を說かば重禁を犯す、此れ即ち是れ方便具せずして、如來の方便に違逆あるを以ての故に、機を差て法を說かば、人天の怨となる、故に重を

(一) 因果云云 法●佛●僧なしとの意。

犯すなり。第十には菩薩は常に施を行ずべし、然れども他人に害物の具を施與することを得ず、謂く酒を施し、毒藥刀杖の類、一切他を饒益せざるの具を施さば、即ち重を犯すなり。菩薩は常に利佗の行を行ず、今は則ち相背を以て重を犯すなり。當に知るべし、前の不殺等は是れ他人の意に將順し、又た初めて法に入るものゝ持する所の戒なり。今次に說く十事は、乃ち是れ一切菩薩の正行の戒なり、若し菩薩は正しく後の十戒に順ずるを以ての故に、假使ひ前の十事の中を行ずとも、犯とはなさゞるなり、

此の疏文禪要と相會す具さに彼の私記の如し

今佛性三昧耶戒等とすとは、此の中の意は、禪要に出す所の三種の眞言を佛性三昧耶戒と名け、四重十重をば佛性戒の前表とするなり。若し疏主に依らば、根本の四重を三昧耶と名け、四重十重を三世無障碍智戒と名く。今何故に唯だ眞言を三昧耶戒と名くるや。答ふ。此の眞言は正しく是れ三昧耶戒なり、今相傳の說に依らば、唯此の眞言を三昧耶戒と稱す。禪要には此眞言を無漏眞法戒と名くる義即ち同なり、此の三眞言は次の如く因●根●究竟の三句亦た即ち三種の淨戒なり。初めに眞言は是れ普賢三昧耶の眞言なり。

此の眞言を持するに由ての下は、眞言の功能を明す。

此れを以て始めとなす等とは、此の眞言は是れ菩提心を因となすの句なることを明す。夫れ普賢とは菩提心の體大日の圓因なり、正しく是れ因の句なり、故に勝因といふなり。禪要に云く、三藏久うして乃ち發言して曰く、前に菩薩の(一)淨戒を受くと雖も、今須らく重ねて諸佛の內證無漏淸淨の法戒を受くべし。云云 此の法は秘密にして輙く聞かしめず、若し聞かんと欲せん者は、先づ一の陀羅尼を受て曰く、唵三去昧耶薩怛鑁。此の陀羅尼三遍を誦せしむれば、戒及び餘の秘法を聞かしめ、亦た能く一切の菩薩の淸淨の律儀を具足す、諸の大功德具さに說くべからず。云云 句義に云く、ततो ततो 平等 本誓 入我我入なり、薩怛は衆生、金薩の因なり、鑁は佛大日の果なり、生佛因果入我我入なり、義譯して入我我入等といふ同一性の故なり。

次に本覺菩提心を發生す等とは、此れ即ち發菩提心の眞言なり。由持の下は、其の功能を明す。始め菩提心より等とは、十地の行を明す、即ち是れ大悲を根となすの義なり。大菩提心任持圓滿とは即ち方便の句なり、知るべし。然るに此の眞言の對譯、道教は勝覺に依り、勝覺は元杲に依る、元杲の出す所は其の本末だ檢得せず、即ち諸文と異なり。先づ句義を明さば、冒地唧多は 菩提心なり 鄔波地は 發生なり、疏に方便の句を釋する中に云く、鄔波娜は亦た發生起と名く

(一) 淨戒 十無盡戒たいふ。

野弭我今なり二合の註は、地野の下に在るは、恐くは是れ寫誤ならん。今諸文を擧げて之れを辨せば、教王に云く、唵引菩提質多二合怛波二合娜夜弭三 按ずるに 金智の譯の觀自在王の軌、及び不空の蓮心の軌等は、みな此れと同じく畝字あり此を正となす。ऽ は是れ第五の字の、上の多字に合して空點となり、ऽ字は下に合して ऽऽ は發生なり、故に略出經の對譯には質儋麟多波陀といふ、是は發菩提心の眞言なるが故に業聲を加ふ、故に知る畝字有るを正と爲すなり。然るに(一)明藏の禪要に、唵冒地唧多塢他波那二合野迷といふ。此の梵文は、對譯と違ふ、恐くは是れ後人の加ふる所ならん。故に六帖の重書の中に出す所の禪要に云く、質多母怛波那二合野弭。また心地秘決の對譯に云く、冒引地唧多母答播二合娜夜弭文 此れ等の文に依らば、明藏の禪要恐くは寫誤あらん、證とするに足らず。次に本覺種種智心を發す等とは、此れは是れ究竟の一切智智の果を發生するが故に、是れ究竟の句なり。此の眞言は是れ通達菩提心の眞言なり、句義に云く、ततो ततो 心なり ततो ततो 通達の義 觀察の義 ततो 我作なり ततो は作なり ततो は我なり 總じて我れ自心に通達すといふなり。今按ずるに ततो 字點は、ततो なり ततो は我なり 通達とは疏第十九八丁に云く、通達は是れ證果の義なり、所至の處に至るなり。此の通達は證といふべきなり。文 即ち是れ究竟の果なり、知るべ

(一) 明藏 支那大明時代に印刻せる一切藏經なり。

し。禪要に云く、唵唧多鉢囉二合底丁以反尾禮の切吠引曇去迦嚕轉舌迷。此の陀羅尼、復た三遍を誦すれば即ち一切甚深の戒藏を得、及び一切種智を具し、速に無上菩提を證す、一切の諸佛同聲に共に說く。

次に秘密曼荼羅に入る眞言等。禪要に云く、また菩薩の行位に入らんが爲めに、復た一の陀羅尼を受けて曰く、唵嚩曰羅二合滿吒上藍、鉢囉二合捨迷。此の陀羅尼若し三遍を誦すれば、即ち一切の灌頂曼荼羅の位を證して、禪門を受くるに堪へたり。已上は無漏眞法戒竟る

秘密宗には初地の位に入るを菩薩の行位に入るといふ、亦たは入秘密曼荼羅と名く。大日經に所謂る秘密曼荼位品に入る等即ち此の義なり。如上の三眞言は是れ無漏の眞法戒なり、此の戒を受くるに依るが故に秘密の灌頂に入ることを得、故に此の眞言を入秘密曼荼羅と名くるなり。句義に云く、唵嚩曰羅二合金剛なり曼拏上藍壇なり鉢羅二合吠捨入なり銘我なり總じて我金剛の壇に入るといふなり。今の眞言は心地秘決と同じ、此れを正となす。禪要の對譯及び梵文は、恐くは是れ正しからず。按ずるに金剛壇とは、謂く金剛不可壞の心地曼荼羅、正しく是れ初地已上の所入の處なり、是れを秘密曼荼羅と稱するなり。由持の下は眞言の功能を明す。三昧耶戒の作法に云く、此の眞言を誦するに由て、灌頂曼荼羅の位に入て、自在にして秘密の妙旨を受學するに堪ふることを得、既に菩薩の灌頂の位に入る、(一)已に無滿の眞法戒を授け竟んぬ、仁者敎の如く奉行せよ。文今の功能の文は恐くは文語倒す、作法を正となす。其の本は禪要に出でたり、具さには上に之れを引くが如し。

(一)已に　一本「已て」とよめり。

次に啓白の下は啓白を明すなり。根本大毘盧遮那とは總じて兩部の大日を指す、故に次に三部五部といふ。三部は謂く胎藏の曼荼、五部は即ち金界なり。已上は別して兩部曼荼の諸尊を指す。總じて十方等の下は總じて顯敎所說の一切の佛菩薩等を指す、故に十方三世等といふ。

次に大阿闍梨等。此は略出經に依る、經の第四十三紙歸發菩提心を明し畢て云く、是の如く敎へ已て、諸の弟子をして各〻尊卑に隨ひ、次に依て坐し、清淨恭敬不散亂の心を以て合掌して住せしめて、其の師或は密語を以て、其の線索を加持して左の臂に繫けしめ、或は塗香を以てし、或は心念を以てし、此の密語を以てして之れを護持せしむ、密語に曰く、唵摩訶跋折羅、迦上聲嚩遮日なり跋折哩、句嚧金剛作なり跋折囉、跋折囉、哈重聲引

經に依らば或は心念を以てし、此の密語を以て等といふ。故に是れ此の眞言を心念密

語と名くるには非ず。索は正しく護持の義を表す、種子[梵字]は即ち護の義なり、羊石會の護尊の眞言、[梵字]金剛護（秘經に云く甲字）また佛慈護の眞言もまた[梵字]を種となす、[梵字]は是れ甲の義、甲は即ち護の義なり。經に迦嚕遮（日なり）有人云く、日恐くは甲の寫誤ならん。今按ずるに義は爾るべしと雖も、甲に亦た日の義あり、無量壽の軌の被甲の文に云く、此の印を結び眞言を誦するに由て、慈心愍念力の故に、一切の天魔乃ち諸の障者、悉く行者威光赫奕たること猶し日輪の如くなるを見て、各〻慈心を起して障碍すること能はず。云云また（一）不空羂索經第二十（十紙）に云く、迦字門因業の性を離る、爲めに是の法敎の身、日初の色光一初に遍ねく、諸垢を害治して生死を超度す、日の義を具すといふことを見るべし。左の臂に懸るとは、先づ阿闍梨の自護を明すなり。疏の第五（三丁）に云く、阿闍梨先づ自ら縱（イトスヂ）を取り、三結して金剛結を作り用ひて左の臂に繫け、自身を護持せよ。次に一一諸弟子のために臂を繫く、是の如く弟子を攝受すれば、即ち漫荼羅に入て是れ諸の障難を離るゝなり。其の金剛結の法は縷〻說く可からず、當（まさ）に阿闍梨に從て之れを面受すべし。復た次に五色の縱とは即ち是れ如來の五智なり、亦た是れ信●進●念●定●慧の五法なり。此の五法を以て一切の敎門を貫攝す、是の故に名けて修（シュ）

（一）不空羂索經　具さには不空羂索神變眞言經といふ三十卷六百三十七紙、菩提流支譯。

多羅（タラ）と爲す。古譯には之れを縱經と謂ふなり。若し見諦の阿闍梨ならば、能く如來の五智を以て弟子の菩提心の中、五種の善根を加持し、萬行を貫攝して瑜伽の臂に繫持す、生死を經歷して常に失壞せざらしむ。若し能く是の如く弟子を攝取するを乃ち善く金剛結を作すと名くるなり。文疏釋の意は、如來の五智を以て弟子心中の信等の五根を護持して、終に失壞せざるを表すなり。然るに疏に先に齒木を與へ、次に金剛線を授く、其の次第今と異るなり。本圓記に云く、但し眞言對譯の字は、經と式と異なり、本書の傳法灌頂三摩耶戒の作法に依るか。文今檢するに式の對譯は、即ち三昧耶戒の作法と同じ。

次に加持●塗香等。自下は略出經に依る、是れ所謂る（一）片供の法なり。本圓記に云く、閼伽等の五供は、前後供之れを備ふと雖も、前供養許り之れを行ず、故に片供といふなり。文（今時の作法具さには（二）事記に之れを辨ずる如し）略出經の四に云く、次に此の密語を以て塗香を加へ已て、諸の弟子の掌中に塗せしむ。密語に曰く、唵跋折羅健提（オンバザラケンディ）塗香（ギャク）虐（上聲）魚伽の切なり塗香の時弟子に告げて言く、願くは汝等具さに一切如來、戒●定●慧●解脫●解脫知見の香を得ん。塗香は即ち五分法身を表す、故に禮懺に云く、五分法身金剛塗香等と。疏第九（三十）塗香

（一）片供　前に頭註せり。
（二）事記　前掲の事記なり。

の眞言を釋して云く、句の初、微字を體となす。嚩字は是れ金剛の義、離言說の義、三昧は是れ住の義なの故に聲を轉じて微となす。嚩字の上に於て伊字の畫を加ふ、是り。是の如く定慧均等なるは即ち是れ住無戲論執金剛三世無障碍智戒なり。是の如きの戒香は其の性本より寂、無去無來にして當に法界に遍滿す、故に淨塗香と名くるなり。一切衆生復た等しく共に之れありと雖も、然も未だ發心せざるを以ての故に、此の香未だ發せず、我已に此の戒香を用ふ、遍ねく法身に塗るが故に、能く淨香を以て普ねく一切に熏するなり。文應に知るべし、今初めに淨塗香を與ふるは、諸の弟子をして本具の佛性、三世無碍戒を發生せしめんが爲めなり。

次に加持華鬘。經に云く、次に密語を以て白華を加持し、持し以て授く、密語に曰く、唵跋折囉、補澀篭華なり唵。是の如く告げて曰く、願くは汝一切如來三十二大丈夫の相を得ん。次に香爐を持し、此の密語を以て之れに加へ、弟子の雙手に熏ず。密語に曰く、唵跋折囉杜鞞燒香なり婀。是の如く告げて言く、願くは汝一切如來の大悲滋潤の妙色を獲得せん。次に此の密語を以て燈を加へ已て弟子をして之れを視せしめよ。密語に曰く、唵、跋折羅、嚕伽光明なり你。是の如く告げて言く、願くは汝等一切如來の智慧の光明を獲

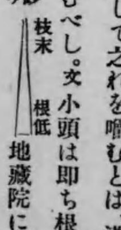
得せしめ。文已上の華鬘等の釋、具さには疏第九卷の如し、往いて披け。問ふ。此の片供の法は是れ何んとするか。答ふ。諸尊を供養するなり。第五丁に云く、次に當さに塗香華等を授與し、敎へて運心して諸尊を供養せしめ、然して後に三世無障礙智戒を受くべし、此の菩薩戒を受くる法は別に行儀あるなり。

次に阿闍梨自ら戒體箱等。(一)齒木の法を明すなり、此は諸の煩惱を嚙み盡して、三世無障礙智をして發生せしむるの標記なり。第五丁に云く、次に齒木を授與すべし、諸の弟子をして之れを嚙ましめ、因て即ち彼の人の成器及び非器の相を觀せよ、此の法を爲す所以は、亦た是れ彼の俗諦に順ず、因て秘密の方便を用ひて、而も加持を作すなり。印土國の人凡て僧を請して食せしむる、乃至世人の相命するにまれ、皆まづ其の齒木を遣て、種種の香華を以て嚴飾して之れを授與す、當さに知るべし明日彼れを請して飯食せしむることを。是の如くなる所以は受敬の心を明さんが爲めなり、恐くは彼れ先づ痰癊宿食の因緣あり、若し我が供を受けて或は不安を發動せしめん。故に先づ善意を以て將護して之を警發し、彼をして先づ身器を淨め、或は呵梨勒を服せしむるときは、則ち明日意に隨て飲噉して犯觸する所なし、身心安樂なり。今阿闍梨亦た

(一)齒木　前に註せり。

爾り、弟子に楊枝を授くる時は、即ち此の方便に寄せて、爲めに深法を說くべし。我方に汝に佛性醍醐の極無過味を授くべし、已に汝を敎へ菩提心を發し、三業の宿障を淨除し、三世無碍智の調伏の牙を以て諸の煩惱を嚙み竟る。復た此の秘密の加持を以て、身心の過患を滌除せんと欲す。汝また其の口過を淨め、所遊の方に在て妄りに宣傳せしむること勿るべし、(一)明日當さに汝に(二)不死の甘露を貽て皆充足せしむべし。無動呪を以て加持す等。第五に云く、當に手を以て案じて、則ち不動の眞言を以て之れに加すべし、或は百遍或は千遍、素く嚴備せしむるなり。

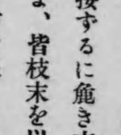
先づ傍一枝を取り等。第五に云く、既に受戒已て、師當に一の齒木を取て諸尊に奉獻し、餘をば弟子に分授し、壇外に出で、東に向へ或は北に向へ、法の如く蹲踞して之れを嚙ましむ、嚙み已れば所面の方に向はしめて正しく之れを擲げよ。文解して云く、東に向ふは初發菩提心の義を表す、北を勝方といふ、即ち上成就なり。蹲踞して之れを嚙むとは、灌頂の軌に云く、次に齒木を授く、却て授戒の處に至て小頭を嚙むべし。文小頭は即ち根底なり、此に異說あり、報恩院には其の麁き方を嚙ましむ、(三)に見ゆ



地藏院には其の細き方を

(一) 明日　第七日目なり。
(二) 不死の甘露　灌頂をいふ。
(三) 心鈔

嚙ましむ



敎授の記に枝木の細き方を右の牙を以て、之れを嚙ましめよといふ。今按ずるに麁き方を末となし細き方を根となす。故に第五に云く、木の上下の別を記せよ、皆枝末を以て上となし、根低を下と爲す、枝末を上となすは謂く麁き方なり、細き方を根となす、之れを投ぐる時は細き方地に入て立つ、故に根低を下と爲すといふ、其の細き方を嚙むは、即ち煩惱の根を嚙むことを表す、世間の齒木亦た爾り、皆な細き方を嚙む、故に知んぬ(一)地藏院の說を正と爲す。其の作法具さに敎授作法に載すとば、敎授記に云く、私に云く、指し樣は枝木のフトキ方を、受者の身に向けて薦の上に之れを指す只だ一度なり。文此の說は大日の疏及び本式の文に違す、具さに敎授記に之れを辨ずるが如し、今疏を引て之れを明す。第五に云く、而も其の相を檢むるに、若し嚙む處外に向ふ者は是の人は悉地成せず、身に向ふ者は悉地成就す、若し遠く擲げ却り來て身に近けば、是れ久しからずして成就するの相なり。若し首ら直に竪て上に向へば成就更に速なり、首ら下に向ふ者は是の人修羅●龍宮に入るべし。若し擲つに空中に在らば、當に知るべし此の人は先に已に成就すとなり。また北方東方に向ふを上成就となし、西方を中成就となし、南方を下成就となす。是の如しと雖も、若し人先き

(一) 地藏院　三十六流の一、三寶院の支流、土巨流と略稱す。

に東に向て擲つに、嚼む處東に向へば即ち是れに身背けば亦た成就することを得ず、餘は此の方に准じ、類して知るべし、餘は瞿薩經の中に說くが如し。文 解して云く、其の相を驗せば、凡そ西天の法は、楊枝を以て一篋を作すことあり。今楊枝を投げて成不成を檢する者は、恐くは西天の事法を用ふるのみ。梵網の虛作無義戒の中に云く、芝草●楊枝●鉢盂●髑髏を以て一篋を作すことを得ざれと。文 嚼む處外に向ふとは、齒木の小頭、弟子の身に背いて外に向ふなり。受者は西に在て小頭は東に向ふ是れなり。身に向ふとは之れに反して知るべし。故に知んぬ、敎授記に云く、龕方身に向て之れを指すとは此の疏釋に違す、偶〻誤るのみ。

若し首ら直く竪つとは、龕方を首となし小頭を下となす、首 此の如く立つるなり、首ら下に向ふ者は之れに反す。また北方東方に向ふとは、是は方に就て上中下を辨ずるなり。其の身に背かずして東に向ひ北に向ふも成就とするなり。謂く身は西方に在て小頭は北に向ひ、身は南方に在て小頭は東に向ふなり。若し身は西に在て小頭東に向ふは、是れ身に背くが故に不成就となす、前の疏釋の如し。東は是れ初方、北は勝方なるが故に上成就となす、次の如く(一)息●增の二法なり。西方を中となすとは、身は北に向ひ或は東に向て小頭西に向ふは俱に身に背かざるが故に成就となす。西を中と爲すとは、南下北下の中に在ればなり、其の法は攝召なり、故に中成就といふなり。南方を下とすとは、南主は死法門なるが故に稱して下方となす、是れ降伏の三昧なるが故に下成就とするなり。是の如しと雖も等とは、今且く方に就て上中下を定む、然れども若し身に背けば、是れ上方と雖も不成就となす。身東に向ひ嚼む處東に向ふが如し、東は是れ上成就なれども、身に背くが故に不成就とするなり。

如來微笑の密語を唱ふべし等とは、此は略出經には晨朝に面を洗ふ時に楊枝を嚼む作法なり。經第一四丁に云く、若し楊枝を嚼まんと欲する時、先づ一切如來の金剛微笑の密語七遍を誦し已て之れを嚼むべし。此れ能く一切の煩惱及び隨煩惱を破す、密語に曰く、唵跋折羅(ヲンバザラ)、賀娑訶(カソワカ)上聲 また經第四十一次に如上の笑儀式の密語を以て、烏曇阿說他等の樹枝を加し、以て齒木となす。復た一切衆生の煩惱●隨煩惱を摧破し、諸佛甚深の智慧金剛劒の密語を以て其の齒木を加す。云云 如上の笑儀式の密語とは、即ち第一卷の文を指すなり。此の眞言は羯磨會の笑尊の密語なり。句義に云く、ばらかさ(バラカサ)金剛(カク)秘經に笑喜の字 汝無等の利を獲等、灌頂の軌に、齒木に次いで此の偈を出す、今彼れに依るなり。此は

(一)息●增の二法なり。息災增

大日經の具緣品に說く所の敎誡の偈の文なり、具さに第五卷の釋の如し。然るに本式には之れを出さず、今何んぞ之れを出すや。答ふ。經には齒木結線の法を明し畢て、次に此の偈を說いて正しく三昧耶戒の功德を歎ず、故に明日に於て大乘生を得といふ。謂く第六夜の受戒の時より第七夜の灌頂を指して明日といふなり。大乘生とは謂く菩提心生ずるなり、具に第五の釋の如し。應に知るべし此の偈は總じて三昧耶戒の功德を明す、必ずしも齒木の義を明すには非ず、故に總じて受戒の功德を指して無等の利を獲る等といふなり。故に本式には之れを出さず。今之れを擧ぐる意は、大乘生とは所謂る曼荼羅醍醐味なり、明日醍味を授與せんが爲めに、先づ齒木を與へて宿障を除く、其の義相違せざるなり。

次に阿闍梨の臂金剛線等。此は線を弟子に與ふる法を明す、具さには前に第五卷を引くが如し。ぱんうんたらくきりくあく**ぱんうんたらくきりくあく**を以て等とは、經疏には此の加持の法なし、但だ是れ師傳の說なり。

次に金剛水を授與す等。略出四十一齒木の成不成の相を明し畢て云く、師(一)既に觀じ已れば諸の弟子をして各〻安する所に隨て之に告げて言ふべし、汝各〻端心にして而も諸佛を念禮し已んぬ、心に繫けて睡眠し境界の相を求めよ、汝見る所の者を晨朝に來て具さに說き、是の敎を作し已て意に隨て去らしめ、彼の見る所の夢、晨に師の所に於て實の如くに之れを說け、若し境界顚倒して妄想多き者は、是れ不淸淨と相應し、牛の五種味、所謂る乳酪酥糞尿等を取て相ひ和し、淨く濾漉し已て金剛の密語二十一遍を加へ、之を與へて服せしめよ、若し身心淨き者、白檀水を取り、同じく金剛の密語を用ひて二十一遍して服せしめよ。密語に曰く、唵跋折囉鄔陀迦陀文(ばざらうだかた)此の文二あり、若し身心淨き者の下は、但だ白檀水を用ふることを明す、今時の行用は皆此の義を用ふ、疏の義亦た爾り。第五十三に云く、また別器に於て香水を調和し、欝金●龍腦●旃檀等の種種の妙香を以て亦た眞言を以て加持し、授與して少し許りを飲ましむ、此を金剛水と名く。秘密の加持を以て故に、乃至地獄の重障をも悉く除滅して內外俱に淨にして法器とするに堪へたり。阿闍梨の言く、此を即ち誓水と名け亦た世諦に順ず、猶し盟誓の法のごとし、一切の衆聖の前に於て、此の香水をのみ自ら其の心を誓て、要らず大菩提心の願を退せざらしむるなり。復た次ぎに無礙の戒香を以て囉字淸白の心水に和合して、諸の之れを飮觸するある者は、皆必定して無上菩提を成ず、此の如く其の心を淸淨なるときは、則ち秘密曼荼羅に入るに堪へたるなり。朱書に云く、一度

(一) 既に云云　齒木の相を觀じ已るなり。

飲むなり、教授記此れに同じ。瑠璃經上十に云く、前に辨ずる所の水を持誦して、各〻三掬を取て與へて之れに飲ましむるなり。云云(一)陀羅尼集十三に云く、香水を掌に灌ぎ及與び之れを飲ましむ。云云水に誓盟の義あり、故に亦た名けて誓水とするなり。

因みに辨ず、本圓に云く、三摩耶戒の道場、何が故に滿字の火舍を置くや。答ふ。本說未だ勘へず、私に案じて云く、遍知印の三角形は滿字の形あり。乃至凡そ燒香は精進の義を表するが故に、大勇三角、滿字の火舍尤も相應の義か。云云今云く、三角印は轉字輪品には種子𑖭字、藏品には種子𑖮字、未だ𑖭字を種子となす者を見ず、豈に是れ三角印の義ならんや。今按ずるに華嚴大疏二十七三十十向品の願一切衆生、得卍字莊嚴、金剛界心の文を釋して云く、外卍相を標するに萬德吉祥を表す、內智如に契ふ、金剛界と名く、界とは性なり、性に契ふに由るが故に、金剛の損壞すべからざるが如しと。云云 羯磨會の因尊の種子𑖭字、是れ菩提心爲因の義なり、即ち是れ金剛界の心なり、燒香の精進の德に由るが故に、此の心顯現す。所謂る𑖭字の香爐とは此の義を表するか、また禮懺に云く、眞如熏焚香等といふ、併せ思ふべし。

國譯傳法灌頂理記上 終

本記は初夜の灌頂即ち金界灌頂につき、式文の上の道理を記述せるものなり。故に前に掲載せる事記と對讀するを要す。

(一)初夜作法 夕刻より行ふ作法の義なり。

(二)初金後胎 事記の其項に註せり

(三)正覺壇 小壇即ち受者に灌頂する壇をいふ。

(四)寶瓶 此の事前に註し置けり。

(五)蓮華臺 受者の著座する處、前に註せり。

國譯傳法灌頂初夜作法理記下

道教の授式に就て之を記す

沙門曇寂

(一)初夜作法とは。　謂く(二)初金後胎の次第なり、式の房玄の付紙に云く、或る傳に胎藏を先となし金剛界を後となす、今金界を先とする其の意あり、口傳を聞くべし。

次に教授五瓶行道等。　略出經第四、(三)正覺壇を明し畢て云く、大壇の中の寶瓶を移して、本方の角に隨て之れを置く。又壇の周圍の界外に於て四の月輪を想ひ、四の淨人をして上の(四)寶瓶を持せしめ、月輪の中に住せしむ。帝釋の方の人は普賢の如しと想ひ、琰羅の方の人は彌勒の如しと想ひ、龍方の人は滅諸障礙の如しと想ひ、夜叉の方の人は離諸惡趣の如しと想へ、即ち灌頂せらるゝ者を引く、帝釋の方の門に入て(五)蓮花臺上に坐せしめ、種種の雜花●塗香●油燈●旛●蓋●清妙の音樂を以て以て供養せよ、如し辨せざる者は、力に隨て之れを作せ。爾る所以は是の人は佛位の處に坐するが故に、復た種種の歌詠讃歎を以て、其をして慇重に歡喜の心を生せしむるなり。云云

(一)四寶　金、銀、瑠璃、頗梨の四種寶物なり。
(二)加持　不動明王の眞言及印を以て加持するなり。
(三)四瓶　大壇の四隅に四瓶を置く。(四)中瓶　大壇の中央に置く、之れ大日如來を標す。

疏第八二十に云く、復た次に(一)四寶所成瓶とは、即ち是れ毗盧遮那の四德の寶なり、中胎の四角に置在すること上の所說の如し、不動明王を以て(二)加持をなし已れ。復た次に四菩薩の眞言を以て各〻一瓶を持す、普賢は是れ無盡願行の寶なり、慈氏は是れ無盡饒益衆生の寶なり、除蓋障は是れ無盡淨知見寶なり、除諸惡趣は是れ無盡大悲方便寶なり。復た次に普賢は是れ逼法界の淨菩提心なり、慈氏は是れ此の淨心、胎藏の中に於て根牙莖葉を發生するなり、除蓋障は是は此れ淨覺樹王の妙嚴花果顯現し開敷するなり、除一切惡趣は是れ此の果の寶を收めて後に一切衆生の田中に種うるなり、是の如く旋轉相生して窮盡あることなし。是の故に此の四寶の瓶を以て種種の寶藥諸穀を盛滿す、漬す所の性淨の香水を用ゐて、蓮華臺の中の不思議法界心に灌ぐ、是の故に法王の子と名くることを得。當さに知るべし一種の寶瓶は還て一菩薩、一金剛、一使者と機感相應し、方位の法門を以て之に對すれば、則ち之れを知るべきなり。文　金胎の兩經に但に行道の作法なし、今五瓶行道といふは是れ師傳なり。問ふ。兩部に皆(三)四瓶と云ふ、今何ぞ、五瓶を用ふるや。答ふ。(四)中瓶を用ふる是れ亦た師承なり、故に稱して五智の瓶水といふなり。入曼荼羅抄第七に云く、問ふ。傳法灌頂に五瓶を

(一)不に造る。一本不疑
(二)法經　諸經に造る。一本に

用ふること相傳(一)不と雖も、今(二)法經等の文を勘ふるに皆四瓶と說く、水器とするが故なり。大日經第二に云く、四寶所成の瓶に衆の寶藥を盛滿す。云云　同經第三に云く、四大菩薩の所加持の寶瓶を以て。云云　瞿醯經下に云く、又た四瓶を執り傍邊に住せしむ。云云　略出經第四に云く、四淨人をして上の寶瓶を持せしめ。云云　疏第八に云く、四寶所成就とは、是は毗盧遮那の四德の四寶なり。云云　疏十三に云く、四寶を以て大菩薩加持の大瓶を作り。云云　疏十五に云く、譬へば世間の刹利の種の、其の嫡子のために灌頂を作すが如し、四大海の水を取て、四寶の瓶を以て之れを盛る等。云云　世間の灌頂に四海の水及び四大河の水を盛るが故に四寶の瓶を用ふるなり。出世の灌頂、彼れを以て軌則となす、所以に諸敎の中に皆な四瓶を說て中瓶を言はず。略出經に灌水の眞言を說いて唯だ四佛を出す、疏の中に釋迦瓶を持するの眞言も亦た四菩薩の明に局る、然るに何ぞ今五瓶を用ふるや。略出經第四に云く、如來部の中瓶は若し是れ畫像壇は即ち空ある處に隨て之れを置く。云云　是の如く言ひ了りて即ち瓶水頂上に灌ぐことを說く、此の經に如來部の瓶とは唯だ是の中瓶なり、既に灌頂の作法の時、其の中瓶を出す、故に知んぬ理實には五瓶を用ふるなり、但だ諸敎に皆な四瓶と說くことは、世間の灌頂に准

じて此の言を作す、中央の一瓶に於ては之を示さず。秘密宗の稱、意此に在る者か。文今按ずるに略出經に瓶を移す時は、普賢等の四菩薩の瓶を明すこと其の文明著なり。然も水を灌ぐ時には云く、また想へ弟子の心中に月輪の相あり、內に八葉の蓮花あり、臺上に亦た㘑字あり。若し金剛部を得ば、㘑字の內に於て(一)跋折囉有りと想へ。若し寶部を得ば(二)寶珠ありと思へ。若し蓮花部を得ば蓮花ありと想へ。若し羯磨部を得ば(三)羯磨跋折囉ありと想へ。若し毗盧遮那部を得ば(四)窣堵波を想へ。師と己身と毗盧遮那の像の如く、弟子の所得の部の瓶を執ると想ふべし、加來部の瓶なり若し是れ畫像の壇ならば、空處あるに隨て之れを置く、若し手印の壇は即ち壇上に於て之を置け各〻其の部の物體、瓶水の內に有りと想へ、跋折羅・寶珠等の如く各〻其の所得の部の契を結ばしめて、其の頂上に置き、其の部の密語七遍を誦して用ゐて之を灌ぐ。文此の文明けし是れ五瓶を用ふるの誠證なり。而るに今時五瓶を用ふるは、但だ是れ師傳のみ。問ふ。金界の四菩薩の瓶に、何んぞ胎藏の四菩薩の眞言を用ふるや。答ふ。略出經に其の眞言を說かざる故に通じて之れを用ふるならん。問ふ。初夜の中瓶に何んぞ覆面を用ふるや。

(五)覆面等の事常の如しとは。　略出經四十二赤色の衣を取て彼に與へて被ること、袈裟を着る法の如し。若し出家の人ならば乾陀色を着せしめ、赤色の帛を以て其の眼を掩抹し、教へて與へて金剛薩埵の契を結ばしめ、口、此の心密語を授くること三遍。密語に曰く、三摩耶薩怛鑁文灌頂儀軌に云く、衣を以て其の首を覆ひ、一切諸の惡趣の門を掩閉して、能く淸淨の(一)五眼を開くこと成就す、三昧耶契を結び口、此の密言を受く、三昧耶薩怛鑁三合今の時行用正しく此の軌に依る、其さには教授の記の如し。

疏第八紙に云く、次に新淨の自疊或は餘の繒帛を取て、先づ不動の眞言を以て如法に淨をなして、復た本部眞言王を用ひて、三轉之を加(二)持せよ、如し大日の曼荼羅を作らば、即ち毘盧遮那の眞言を用ゐよ。蓮華手、金剛手亦た准じて說くべし。此の綵淨の帛を用ひて、弟子の面門を周覆して、當に深く慈悲護念の心を起し、耳語して彼の三昧耶戒を告ぐべし。諸餘の未入壇の者に聲を聞かしむること勿れ。此の一偈は當さに(三)轉字輪漫荼羅行品中に於て之れを說くべし。文經の第三轉字輪品に云く、繒帛面門を覆ひ、悲愍の心を起し、不空の手を作らしめ、菩提を圓滿するが故に、耳語して彼に無上正等戒を告ぐ。第十三八丁に釋して云く、次に當に衣帛を以て其の面を覆ひ、師當さに大悲心を發して之れを愍念して、彼をして永く生死を度し佛知見を開かしめ

(一)跋折羅　金剛杵なり。
(二)寶珠　如意寶珠なり。
(三)羯磨　羯磨云云羯磨金剛といふ、三股の交叉したる形の法具なり。
(四)窣堵波　五輪塔形なり。
(五)覆面　此の事前に註せり。

(一)五眼　佛眼、法眼、慧眼、天眼、肉眼の五をいふ。
(二)持　疏になし
(三)轉字輪曼荼羅行品　大日經に在り。

んが爲めの故に、其の弟子は、爾の時亦た自ら殊勝の無上の願を發すべきなり。不空の手を作して、菩提を圓滿せしむるが故にといふは、謂く、彼れ弟子に無上の菩提を速かに圓滿せしめんと欲するが故に、(一)上中下の力分に隨ひ、其の所有に隨て諸佛本尊等を供養し、或は寶花等を持して之れを獻ずるなり。時に師、弟子を(二)結護せしめんと欲するが故に、耳語して之れを敎ふ。所謂る菩提の心に住せしむること別に說處あり。文 解して云く、覆面の作法は略出經及び大日經の疏に依て、阿闍梨自ら之れを作す、而るに今時は皆敎授の所作なり。此は正しく三昧耶戒を受得するが故に、理は當に阿闍梨自ら授くべし、今時の行用と同じからざるなり。略出經に金剛薩埵の(三)契とは、謂く(四)內縛なり。次に投花の印を明して云く、卽ち敎へて(五)忍願二度を針となす是れ卽ち普賢三昧耶の印なり 攝眞實經の文分明なり、今之れを引いて明さん。經の下十七に云く、赤色を着せしめ、緋帛眼を覆ひ前後に繫けしめ、時に彼弟子、金剛手の印を結んで、十指の頭を以て更互ひに相叉へ、皆掌中に內て右を以て左を押す。此の印を結び已て金剛の阿闍梨、當に弟子を敎へて此の心中心の眞言を習はしむべし。曰く、

薩摩耶薩埵觀婆你四合。文 然るに今時の行用は、覆面の時卽ち普賢三昧印を結ばしめて、投

(一) 上中下云云 資力の多少をいふ
(二) 結護 前に頭註せり。
(三) 契 印契なり
(四) 內縛 兩手を相叉へて十指を掌內にあらしむ。
(五) 忍願二度 兩手の中指なり、此の時他の八指は外縛さするなり。

花の印と異なることなし、是れ相傳說にして卽ち(一)五密の軌等と同じ。五密の軌に云く、次に三昧耶の印を結び、二手金剛縛して忍願を竪て合せ、當の心に安せよ、眞言を誦して曰く、

三摩耶薩埵三合。文

此の印眞言は卽ち是れ佛性無漏三昧耶戒なり。此の處に於て之れを授けば是れ受得なり。故に疏に云く、耳語して彼の三昧耶戒を告ぐと、是れ正しく受得なり。また略出第四に、正覺壇に於て道具を授け畢りて、次に根本の四重を授くるは、卽ち疏第八の傘蓋行道畢りて次に四重を授くると同じ、此は其の戒相を示すなり。故に第九に三昧耶偈を釋して云く、今此の四戒は受け具し竟已りて略して戒相を示すが如し。文 應さに知るべし覆面の時は正しく是れ受得なり。問ふ。何が故に未入壇の前に於て此の戒を授くるや。答ふ。是れ灌頂壇に引入して秘法を聽聞せしめんが爲めなり。禪要に云く、此の法秘密にして輒く聞かしめず、若し聞かんと欲せば、先づ一の陀羅尼を受け て曰く、

唵三昧耶薩埵

唵三昧耶薩埵

(一) 五密 五秘密軌なり、此の事前に註せり。

此の陀羅尼三遍を誦せしめよ、即ち戒及び餘の祕法を聞かしめ、亦た能く一切菩薩の淸淨の律儀を具足す、諸の大功德具さに說く可からず。文 此れ等の義は即ち胎藏の入佛三昧耶と相ひ同じ。疏第九十九に云く、此の三昧耶を名けて一切如來の金剛誓誡となす、若し念持せざる者は一切眞言の法事を作すことを得ざるなり。第十三十一に云く、此の三昧耶に由て、諸の學者聽聞することを得、正法に入ることを得、若し作さずんば即ち入壇すべからず、亦た祕敎を聽くべからず。又云く、此の三昧耶は即ち是れ誓願なり、猶し勅の如し、是れ三世の佛の本要誓する所なり、此の法門難信難入なり、聽聞することを得難し、法に遇ふ可からざるに由ての故なり。是れを以ての故に、三世の佛同じく此の眞言を說き、此の三昧耶の眞言加被を以て、入り聽聞し此の法を修行することを得、尊の敎の如く違越す可らず、若し聞かざる者は即ち入るを得ず、亦た聽聞することを得ざるなり。文

然るに今時の行儀は、初後夜の法、同じく普賢三昧耶の印言を授く、其の義云何。此れは是れ相傳の說にして經疏と同じからず、若し大日經の疏に依らば、覆面の時は當さに入佛三昧耶の印言を授くべし、此の義は具さに疏の第八及び第十三私記に之れを辨ずるが如し。問ふ。普賢三昧耶の明、何が故に(一)ゟ字を加へざるや。本圓記に云く、晝の作法は大阿闍梨、三昧耶戒を授くる時はゟ字を加ふ。然るに受者既に三昧耶戒を受持して、金剛薩埵の身と成るが故に歸命の句を略す、已體薩埵なるが故に別に歸する所なし。文 今云く、此の義依り難し、五祕密の軌等も亦たゟ字を加へず、彼は灌頂を明すに非ず、云何んぞ之れを會せんや。按ずるに此の印言は是れ普賢本有の三昧なり。夫れ普賢とは如來藏性自性淸淨心なり、一切衆生等しく此の心を具す。故に(二)菩提心論に云く、一切衆生は本有の薩埵なりと。若し是れ一切衆生本有薩埵ならば亦何んぞ歸命することを之れ爲ん、故に之れを除くなり。問ふ。此の印言爲た何の義ぞや。答ふ。本圓に云く、師口云く、今此の普賢三昧耶の印は二手縛して二中指を竪て合す。謂く八指の外縛は(三)八分の肉團、衆生本有の菩提心を表するなり、中指を建つるは建立の義なり、普賢菩薩を建立如來と號するが故なり。云云 私に云く、八分の肉團は本有の菩提心、二中指を竪つるは修生の菩提心を發さしむる義なり、仍て二中指を建つるは菩提心の幢旗を表すなり。東方は發菩提心の方、即ち普賢菩薩は東方の薩埵なり。謂く此の薩埵の加持に依て、一切衆生菩提心を發すが故に、普賢菩薩を建立如來と號す。

(一) ゟ 三昧耶薩怛縛と誦して唵字を加へざるなり。

(二) 菩提心論 前卷に掲載せり。

(三) 八分の肉團 心臟は八葉の肉團にして八葉蓮花を表す。

圓覺經に普賢心建立者といふは此等の義なり。また灌頂軌に云く、惡趣門を閉づ等とは、其の面門を覆へば惡趣の門を閉づることを表し、後に覆面を却くるは即ち五眼を開くことを表す。疏に云く、永く生死を度り佛知見を開く、義即ち同なり。

次に壇前に引入し、(一)香象を超過す等。　入曼荼羅抄に云く、問ふ。門前に香象を立て、受者を超過せしむるの意如何ん、請ふ本説ありや。答ふ。門前の香象は文證を闕くと雖も、嫡嫡相承して久しく其の事を傳ふ、末代の行儀依らずんばある可からず。夫れ秘密の瑜伽は聖心量り難く、入壇の支分は仰いで信を取るべし。但し今私に勘ふるに、華嚴經第二十九に云く、轉輪聖王の太子、王の相を成就す。轉輪聖王、子をして白象寶閣浮檀金の座に在らしめ、四大海の水を取り、子の頂上に灌ぐ、即ち名けて灌頂と爲す。疏第八に云く、西方の世人の灌頂の法を受くる時の如し、童子をして師子の座に踞せしめ、韋陀梵志の師、象寶に坐し、以て其の後に臨んで此の寶水を持す。以て象の牙より注いで其の頂上に墮せしめ、今此の法王子の灌頂は則ち是の如くならず、密嚴佛土の法界の大圖を陳列し、妙法蓮花、自在神通、師子の座に坐す等。云云今象寶を越えて蓮臺に昇るは、世間の灌頂に超勝することを表するか。

(一)香象　前に註し置けり。

(一)鈎召印　前に頭註せり。
(二)青龍軌　青龍寺法全集にして廣大儀軌といふ、具には大毘盧遮那成佛神變加持經蓮華胎藏菩提憧標幟普通眞言藏廣大成就瑜伽といふ。
(三)定・慧　定は左の手、慧は右の手なり。
(四)風　頭指なり

明に曰く、(一)鈎召印之を用ふ即ち大鈎召の印明を結誦す。阿闍梨此の印を結誦し、受者を鈎召して壇中に入るなり。略出經・大日經・及び灌頂軌等は此の説なし、是れ相傳の説なり。(一)青龍軌に云く、(二)定・惠・内に拳に成し、惠の(四)風を屈して鈎の如くす、召に隨て起集す灌頂の時此の鈎印を以て受者を引いて門に入る

次に受者壇前に立つ等。　此は投花の印を明すなり、略出經第四覆面の次に云く、即ち教へて忍・願二度を竪て針となし、諸の白華鬘或は種種の香の花鬘を以て其の針の上に掛け、次に壇場の門中に引入して、三遍此の密語を授くべし、三摩耶吽。文此の印は前の金剛薩埵の内縛の印を改め二中を立て合す、即ち普賢三昧耶印なり。攝眞實經に云く、復た次に阿闍梨、弟子に教へて手印を結ばしめ、前の金剛手の印を改めて、左右の中指を竪て花鬘に繫け、弟子を引導して道場の門に到り、入道場眞言を習はし教めよ、曰く娑摩野吽長引。

佛子今已に等。　略出經第四に云く、應さに之れに告げて言ふべし、汝今已に一切如來の眷屬部の中に入れり、我今汝金剛の智を生せしめん。汝等應さに知るべし、此の智に由るが故に、當に一切如來の悉地の事業を得べし。然るに汝亦た未だ此等の

壇場に入らざる人の爲めに此の法事等を說く應からず、汝儻し說かば但だ汝が三昧耶に違害するのみにあらず、自ら殃咎を招かんのみ。師堅く薩埵金剛の契を結んで、弟子の頂上に置いて告げて言ふべし、此は是れ三昧耶金剛の契なり、汝若し輒く未入壇の人に向つて說かば、汝をして頭を破裂せしめん。云云

次に即ち三たび此の密語を授く等。　此は正しく投花の眞言なり。略出經には此の前に於て召罪●摧罪●眞實伽陀●金剛入等の印言あり、今は之れを略するなり。經に云く、次に當さに此の密語三遍を授くべし、唵鉢羅底車授ナ跋折囉、護引此れを誦して掛くる所の鬘を壇中に擲げ敎む、彼の(二)自業に隨て鬘の所着の處に、即ち其の部の密語を念誦せしむ。當さに知るべし速に成就を得。文　問ふ。經は三昧耶薩怛鑁の句なし（按するに敎王經及び攝眞實經に亦此の句なし）今何んぞ之れを加ふるや。答ふ。未だ審かならず、然るに灌頂の軌に云く、次に(三)與當さに此の密語を受くべし、三遍、제제리の明に제제를加ふることなく、便ち리제제를誦し入佛三昧の明を加ふべし、唵引鉢囉二合底引車、韈曰羅二合穀文入佛三昧耶の明とは제제리청の句を指すか。本聞に云く、大日經の疏は三昧耶の印を結作し、三遍彼の眞言を誦す。云云　仍て三摩耶薩怛鑁の明を誦すべし、然るに略出經に

(二) 自業　一本に因業に作る。

(三) 與　恐くは衍字。

鉢囉底車の言を出すが故に、式には兩呪を合して同じく之れを授くるか。廣澤傳法灌頂作法亦此の如し云云　誦し了りて白花を以て等とは、正しく投花を明す。略出の上の文に云く、忍●願●二度を竪てゝ針となし、諸の白花の鬘を以て。云云　白花は即ち息災の義を表す、灌頂は是れ息災の法なるが故に。然るに今時は師傳に依て五葉の檪を用ふるなり。本聞に云く、問ふ。當時の行用は五葉の檪を以て投花となす、本說に違ふか、將た五葉の表示は云何ん。答ふ。上に出す所の略出經に白花鬘●香花鬘と。云云　今檪を用ふるは香花鬘の義なり。凡そ灌頂は息災相應の行事なるが故に白花といふか。次に投華の表示は、投花得佛の故に覺花の義なり、故に五葉は即ち五智を表す、覺智の義相ひ涉るが故なり。

花落つる處に隨て其の尊を知るとは。　阿闍梨其の得佛の相を知ることを明すなり。疏第八丁に云く、次に引いて第一重の門の遜那●優波遜那の二龍王の守術の處に至て、正しく門廂に當て前却を得ざらしむ、師當さに彼が爲めに三昧耶の印を結作し、三遍彼の眞言を誦し、花印の上に置いて弟子をして至誠心を以て道場に向て之れを散し、花の至る所の處に隨て、當さに即ち是の行人、往昔の因緣と、法門の善知識とを知

るべし、即ち此の方便門に依て進趣し修行するなり。又云く、凡そ阿闍梨、花の所至の處を觀じて其の性類を辨ずべし。若し佛の首上に墮せば、(一)佛頂及び豪相等を成就す、面上に墮せば(二)佛眼を成就すべし、身の中分に在らば、當さに知るべし諸心成就すと。若し下分に墮せば諸の使者等を成就すと。また佛身の上中下分に墮せば上中下の成就を知る、蓮花金剛も亦た然り、自餘の諸尊、但だ上中下の相を知れ。若し花墮て彼の尊を去ること遠き者は、久遠にして方に乃ち成就す。若し供養院に墮せば、所屬の尊に隨て彼の眞言を授けよ。若し兩尊の間に墮せば其の遠近を觀るべし。若し先に內院に墮ちて即ち移て外院に出づる者は、彼の人は信心具せず。若し强いて持誦せば下の成就を得。諸の界道及び行道院に墮つる者は、彼の人は決定の心無くんば成就を獲ず。若し彼れ更に擲んと欲せば、爲めに護摩を作し、然る後に之を擲つべし、餘は彼に說くが如し。

(一) 佛頂　佛の頂上を佛となしたるもの、胎藏界曼荼羅釋迦院に五佛頂あり。
(二) 佛眼　前に註せり。

次に(三)覆面を脫せしめ了て。

略出經に云く、次に此の密語を誦し、眼を掩ふ所の物を解く、密語に曰く、唵跋折囉薩埵、薩嚩無可の切日餘の切、汝が爲めに親り目を開く斫具數平眼なり伽焰帝提(エンティダイ)吒那開なり怛鉢囉專なり嗢伽吒野提開かしむるなり薩婆婀具餘一切眼即ち五眼なり跋折囉斫具餘金剛眼なり阿縛怛囉

(三) 覆面　事記に出づ。

無上なり係跋折囉跛捨彼を呼んで壇場を觀ぜしむるなり論に曰く、金剛薩埵、親り自ら專ら汝が爲めに(一)五眼及び無上金剛眼を開き、次に弟子を呼んで遍く壇中の諸部の事相を示す。此の法に由るが故に、一切如來の護念する所となり、金剛薩埵常に其の心に住す。彼が所求に隨ふ、乃至執金剛の身、獲得せざるなし、漸く當に一切如來體性法の中に入るを得べし。文今時の行用は但だ漢文を擧げて梵文を略す、知るべし。問ふ。無上金剛眼とは爲れ何の眼ぞや。答ふ。五眼は諸敎に通說す、無上金剛眼は所謂る(二)ॐの惠眼、是れ祕密不共の眼なり、故に別に之れを擧ぐ。義決に云く、また眼に麽吒の字を置くを以て智惠明發せしむ乃至祕密義とは所謂る佛德金剛三昧の智慧眼なり、此の三昧を以て智惠門に通じ、能く智惠內外和合せしむ、誰か降伏せざらん。云云此の眼は降伏を用とするなり。

又按ずるに、此の眞言の末の句に、係跋折囉跛捨、敎王經には別の眞言と爲すなり。經の下丁五に云く、則ち見の眞言を誦す、係囉曰囉二合波捨一句、則ち弟子をして次第に大曼荼羅を視せしむ、纔に見已りて一切如來加持護念し、則ち金剛薩埵彼の弟子の心に住して、則ち種種の光明の相、遊戲神通を見、曼荼羅を見るに由て、如來の加持に由るが

(一) 五眼　前にあり。
(二) ॐ　兩眼に麽吒の字を安して眼を淨むるなり。

故に。或は婆伽梵、大持金剛、本形を示現したまふを見、或は如來を見、此れより已後、一切の義利、一切の意所樂の事、一切の悉地乃至持金剛及び如來を獲得す。文眞言句義 𑖩𑖾𑖨𑖿𑖮 は呼召なり、𑖮𑖿𑖭𑖿𑖭 は金剛なり、𑖩𑖾𑖨𑖿𑖮𑖿𑖭𑖿𑖭 は見なり。攝眞實經には波寫に作る。文疏第八に云く、既に花を散じ已んなば、次に面を開いて道場を瞻觀せしむべし、歡喜心を以て之れに告げて曰く、汝今此の妙漫荼羅を觀て深く敬信を生ず、汝已に諸佛の家に生る、諸の明尊等同じく共に加護す。一切の吉祥及與び悉地、皆悉く現前す。是の故に堅く三昧耶戒を持し、眞言法敎に於て勤めて修習すべし。文五祕密軌に云く、總かに曼荼羅を見れば能く須臾の頃に淨信す、歡喜心を以て瞻觀するが故に、則ち(一)阿賴耶識の中に於て金剛界の種子を種う。文即身義に此の文を引いて註して云く、此の文は初に曼荼羅海會の諸尊を見、得る所の益を明す。所得の益とは深釋すれば即ち(二)初地を得るが故に、歡喜心を以て等といふ。歡喜心とは所謂る歡喜地なり。金剛の種子を種うるは、所謂る菩提心を因とするの義なり。疏に、生じて佛家にありといふは即ち此の義なり。

次に投ずる所の花を取るの眞言等。　略出經は此の眞言は、掩眼の物を解く眞言の前に在り、經と相ひ前却す、未だ何なる所以なるかを審かにせず。經第四に云く、即ち彼の擲ぐる所の華鬘を取り此の密語を加ふ。

(一)阿賴耶識第八識にして根本心なり。

(二)初地菩薩階段の第一歩、之を歡喜地といふ。

(一)大力の菩薩金剛薩埵。

(二)敎王 敎王經といふ。

唵鉢囉底、紇哩恨拏攝受怛嚩の切縊摩合二合薩埵、摩訶婆囉。論に曰く、願くは(一)大力の菩薩、汝を攝受したまへ。此の密語を誦するの時、即ち其の鬘を以て彼の頭上に繫く、鬘を繫くるに由るが故に、摩訶薩埵の攝受を得、速疾に諸の勝悉地を成就す。文按ずるに式及び今の所出の眞言は經と異りあり、未だ何に緣て之を出すやを審かにせず。灌頂の軌は略出に依ると雖も亦此の眞言を出さゝるなり。また按ずるに、敎王經等の眞言亦た異りあり、今具さに之れを擧ぐ。(二)敎王の下四紙に云く、華の落つる處に隨て則ち彼の尊成就す、則ち彼の華鬘を取て彼の弟子の頭上に繫け、此の眞言を以てす。唵引一鉢羅二合底、乞哩二合紇拏二合怛嚩二合。弭鎋、薩怛嚩、摩訶麼攞。文此れに由て則ち大薩埵の攝受速かに成就することを得。文攝眞實經に云く、唵鉢羅二合底、疑嚧 翳穩那上二合、舌に反して呼ぶ怛嚩去二合弭摩舛二、摩訶嚩平囉。此等の相違今審かにすること能はず。本圓の記に略出經を引き畢て云く、今の作法は此等の本據に依るなり。但し本式は本書の灌頂の式に同じ、經と聊か異りあり。

次に受者をして護身せしめ次に四禮。　略出經等には此等の作法なし。

次に大阿闍梨受者を引いて等とは。　受者を引いて正覺壇に入り灌頂を爲すことを明す、其の灌頂壇の方位は、金●胎異りあり、具さには略出經第四十六疏第八廿紙に之を明すが如し。私記の第四十一卷、圖を擧げて之れを辨ず。今は繁を恐れて出さず。今時の行用は一夜の作法なるが故に、經疏と同じからず。本圓記に云く。問ふ。金界の小壇は西北の角、胎藏の小壇は東南の角、本據如何。答ふ。本說の如くんば兩部の大壇の前に各〻小壇を建立す、謂く金界は西曼荼羅の故に。略出經に其の灌頂壇は大壇の帝釋天の方に在るべしと。云云天の方は東方なり、胎藏は東曼荼羅の故に西に向ふべしと。故に義釋に西面に於て(一)四肘の外に灌頂曼荼を作れ。文然りと雖も當時の作法は、一夜に於て兩部の傳法を行ずるが故に、兩界の大壇の前に各〻小壇を立つるは、狹き所に依りては更に行せらる可からざるが故に、胎藏の小壇をば東南の角に立て、金界の小壇を西北の角に安ずるなり。云云　此れ亦た兩壇に就いて之れを辨ず。若し但だ一壇の時は東南西北を論せず、其の便宜の所に於て小壇を置くなり。受者東座に着くとは此は金界の壇に約す。略出に云く、其の灌頂壇は大壇の帝釋天の方の門外に在るべし。文帝釋の方とは謂く東方なり、東門より入るが故に、東方の座に坐し、面西方に向ふなり。何となれ

(一) 四肘　人の肘量をいふ、大凡は古來二尺、一尺八寸、一尺五寸、又は十六指量等の異說あるも、一尺五寸を常說となす。

ば金界の諸尊は皆西より東に向ふが故に。受者東座に着く時は則ち諸尊に對するなり。(一)演奥二十八に云く、應に知るべし小壇の門、東に向て開く故に、東門に入て直ちに西に向て坐すなり。文左足花門を踏む等とは。演奥に云く、(二)嘉會壇第五に云く、瞿醯に云く、其の阿闍梨は其の弟子と與に如法に護身して其の中央に坐せしむ。師云く、當に弟子を引いて華臺の上に坐し、所得の部の印を結ぶべし。左の脚を以て蓮花の門を踏み、右の脚、華臺を踏んで之れに坐す　嘉會壇の注に、師說に左の脚を以て(三)蓮花門を踏み、右の脚、華臺を踏んで坐すとは、阿闍梨灌頂の儀軌に依らば、云く次に當に灌頂せらるゝ者を引ひて、左の足、華門を踏み、右の足華心を踏むべし。蓮臺灌頂別傳儀軌鈔龍洞沙門釋神彩述すに云く、先づ左の足を上げて華臺の緣を踏んで、(四)十住●十行●十廻向の位を超て、初歡喜地に登ることを得と觀ずべし。□、右の足を上げて蓮臺中を踏んで、第十法雲地、授職灌頂の位に登ると觀ずべし。□次に右の足を以て青蓮花の上を踏んで、結跏趺坐して是れ妙覺究竟の授職灌頂の位なり文智證の胎藏瑜伽記の註に云く、青龍入壇の作法に云く、左の脚に壇の緣の蓮花門を踏み、右の脚蓮臺を踏んで便ち其の上に坐す。已上登壇の作法は古今の行儀、少くも相違なし、貴むべし、貴むべし文　臺上に坐せしむとは、第八に云く、壇中に八葉大蓮花

(一) 演奥　大日經疏演奥鈔にして、五十八卷あり、東寺杲寶の著述。
(二) 嘉會壇　諸尊集會の曼荼羅を嘉會壇といふ、大日經具緣品所說の曼荼羅は嘉會壇なり演奥鈔第五は具緣段品なり。
(三) 蓮花門　前に註す。
(四) 十住云云　住と廻向と行と地とは菩薩の階段なり

王を作り鬚髮具足す。云云第十三丁に云く、弟子を引いて將に大華王漫荼羅に向はんとす、謂く、壇外に先づ灌頂壇の處を作るなり云云大華王曼荼とは、即ち灌頂の所なり。座上に十二尊を安じて圍繞す、具さには第八卷の釋の如し。此の蓮花座は行者の𑖨𑖿𑖨𑖿心蓮花藏を表す。即ち是れ所謂る金剛座なり。一切の諸佛は此の座に安住して心自ら心を證し、心蓮開敷して正覺を成ず、故に金剛座といふ、稱して正覺壇といふ者は意此に在り。問ふ。何が故に蓮花を金剛座といふや。第十三に蓮花座の印を釋して云く、此は是れ華の座なり亦た金剛座と名く、此の座に坐するに猶るが故に能く諸佛を生ず、諸佛は皆此の坐に由れば即ち吉祥の座と名くるなり、故に金剛不壞の座と名くるなり。文應に知るべし蓮花は即ち是れ金剛座なり。また智度三十四十紙金剛座を釋する中に云く、有人の言く、土は金剛輪の上に在り、金輪は金剛の上にあり、金剛際より出でゝ蓮花臺の如く、直ちに上げて菩薩の坐所を持し陷沒せざらしむ、是を以ての故に、此の道場の坐所を金剛と名くるなり。文 真の實は不生不滅の心體、所謂る𑖨𑖿𑖨𑖿なり、𑖨𑖿𑖨𑖿は𑖨字を其の種子となす、故に𑖨字を亦た金剛座と名くるなり。第十七に云く、瑜伽座に住すとは謂く大因陀羅座なり、謂く四方の金剛輪座なり、阿字の上に住す、此れを以て座となす、此の眞理と相應する座を瑜伽座と名く、此の瑜伽金剛座に坐する者は即ち是れ如來なり。文半跏座とは謂く吉祥座なり、吉祥の稱は蓮花と相應するなり。第八廿二に云く、凡そ灌頂せんと欲する時は辨事の眞言を用ゐ、座物を加持し蓮花臺の上に安置す、阿闍梨、弟子のために如法に護身し、先づ不動明王を以て用ゐて諸障を除き、次に三種の三昧耶を用ゐて三所を加持す、金剛薩埵を以て支分を加持し已りて、吉祥の坐法に依て其の中に坐せしむ。文 慧琳の音義に云く、結跏趺坐とは、加の字は只單に加に作る、盤結更互に左右の足趺を以て二𢧐の上に加ふるを結跏趺坐と名く、其の坐法の差別名目頗る多く、繁説すべからず。今且らく二種の坐儀を擧げば、先づ右の足扶を以て左の𢧐上に加へ、また左の足扶を以て、右の胜上に加へ、二足の掌を二𢧐の上に仰げしむ、此を降魔坐と名く。二手亦た掌を仰げて五指を展し、左を以て右を押し懷中に安在す、諸の禪師は多く此の坐を傳ふ、是れ其の次なり。若し持明藏教の灌頂阿闍梨の傳授する所に依らば、即ち吉祥坐を以て上となし降魔を次となす。其の吉祥座とは、先づ左の足扶を以て右の𢧐の上に加へ、又右の足扶を以て左の𢧐上に加へ亦た二足の掌をして二𢧐の上に仰げしめ、二手前に准じて指を展べ掌を仰げ、右を以て左を押すを吉祥坐と

(二)𢧐 ゼ、なり

名く、一切の坐法の中に於て此を最も上となす。如來成正覺の時、身を吉祥の座に安きたまひ、左手は地を指し降魔の印を作れ。若し修行の人能く常に此の坐を習はゞ、百福莊嚴の相を具足し、能く一切の三昧と相應して最勝とするなり。文大阿闍梨西座に着くとは、經疏の中に阿闍梨の座所なし、今時の行用は兩座を設くる故に、初夜は西座に着く、必ず所表あるに非るなり。

次に讃等。　略出に云く、即ち所灌頂者を引ひて帝釋の方の門より入り、蓮華臺上に坐す、種種の雜花●塗香●燒香●油燈●蓋●清妙の音樂を以て、以て供養す、如し辨せざる者は力に隨て之れを作せ。爾る所以は是の人、佛位處に坐するが故に、復た種種の歌詠讃歎を以て其をして慇重に歡喜の心を生せしむるなり。云云　疏第八に云く、經に云く、吉祥伽陀等、廣多美妙音とは、此の頌に凡べて三種あり。一は名けて吉慶といふ。二は吉祥と名く。三は極吉祥と名く。皆是れ(一)阿利沙伽陀なり、此を用ひて其の心を慶慰すれば、仍ち加持の用あり、阿闍梨當さに自ら之れを說くべし。次ぎ下の文に於て且く(二)吉慶の一種を出す。此の方の所用に於て已に粗〻周備するのみ。此の偈を說くの時、自ら(三)白拂を持して其の身を拂ふべし。

(一) 阿利沙伽陀　阿利沙は前に註す　伽陀は梵語、讃頌と譯す。
(二) 吉慶　前に註す。
(三) 白拂　前に註す。

吉慶漢語五段とは。　略出經に四を出す、諸佛觀史云云迦毗羅衛云云金剛座上云云波羅奈苑云云灌頂の軌には初めに此の四を擧げ、第五に諸佛大悲方便力云云是を五段といふなり。中に於て初めの四讃は次の如く降天●誕生●降魔●轉法輪なり。疏の十一讃の中に於て、第四と五と九と十との讃に當るなり。(一)梵語三段とは此は慈覺の傳ふる所の、九頭龍の梵讃の中の初めの三なり。第一は降天、第二は誕生、第三の讃は略出及び疏の中、更に所當なし。

次に五股を取り首を加持すとは、略出經及び疏の中此の事なきなり、𑖩を以て加持すとは、𑖩字は即ち五股金剛の種子なり。第十三に、內五股の印を釋して云く、此の金剛印に由て能く無智の城を壞し、一切壞すること能はざるなり。其の眞言は、歸命は前の如し、呪の體は但だ𑖩引字あり。云云今首を加持するは、灌頂せんが爲めなり。

次に五瓶水を以て等。　此は正しく灌頂を明すなり。略出に云く、次に應に其の灌頂を與ふべし。先づ弟子の頂に𑖩字あり、上に圓點ありと想へ。義は前の釋に同じ、字光焰を放ち熾然赫奕たり。また弟子の心中に月輪の相あり、內に八葉の蓮華臺あり。上に亦た𑖩字ありと想へ、若し金剛部を得れば、𑖩字の內に於て跋折羅ありと想へ、若

(一) 梵語云云吉慶讃は梵文は三頌なれども、略出經は四句一偈として四頌あり、現今の頌は四句五頌あり今之に掲ぐるごとし。

(一)羯磨跋折羅前に註せり。

(二)五方五佛東四南北中の五方、阿寶生、彌陀、釋迦大日の五佛なり

し寶部を得ば寶珠ありと想へ、若し蓮花部を得ば蓮花ありと想へ、若し羯磨部を得ば(一)羯磨跋折羅有りと想へ、若し毗盧遮那部を得ば窣都波を想へ、師、己身と毘盧遮那の像の如しと想ふべし。弟子が所得の部の瓶を執り、如來部の瓶、是れ畫像壇、空處あるに隨て之れを置け、若し手印壇ならば即ち壇上に於て之れを置け各〻其の部の物の體、瓶水の内に在りと想へ、跋折羅寶珠等の如し。各〻其の所得の部の契を結ばしめて其の頂上に置いて、其の部の密語七遍を誦し、而も用ゐて之れに灌げ。文若し此の文に依らば、弟子の所得の部に隨て各〻の灌頂をなせ、謂く若し金部を得る者は、但だ金部の瓶水を灌いで餘は之れに灌がず、今は爾らず、總じて五部の灌頂をなし、經說と同じからざるのみ。また略出に、上には五部の瓶を明し、其の眞言を出す中には、但だ四部の眞言を出して中央の佛部の眞言を出さず、古德之れを秘して明さゝるなり、今は師承に依て五部の眞言を出す、總じて(二)五方五佛の灌頂を明す、即ち是れ蓮花部心軌に出す所の五佛灌頂の眞言なり。軌に云く、既已に身を加持し、次に灌頂を授くべし、五如來の印契、各〻三昧耶の如し、遍照は頂に灌ぎ、不動佛は額に於て、寶生尊は頂の右、無量壽は頂後、不空成就佛は頂の左にあるべし。眞言に曰く、即ち今出す所の眞言なり、往て披けまた疏第八に灌頂の深義を明して云く、即ち寶瓶を持し、徐く漫茶羅を遶ること三匝し已て、復た更に法の如く加持し、弟子の所に至て先づ、囉字を用ゐて火となし、其の身を焚燒す。悉く灰となり已て方さに四瓶を用ゐ、次第に之れを灌ぐ。灌ぎ已れば此の灰中を觀じて囉字門と作し、其の色純白なり。此れより五字を出生す、所謂る阿●鑁●嚂●吽●欠●なり。其の五字輪を持し、次に暗字を說いて其の頂上に在き、轉じて中胎藏となす。また此の字より三重の光焰を生じ、一重は遍く咽の上を遶る、隨て照し及ぶ所の處に諸尊隨現して、即ち第一院の漫茶羅となる、次の一重の光は遍く心上を遶る、諸尊隨現して第二重の漫茶羅となる、次の一重の光遍く臍上を遶る、諸尊隨現して、第三重の漫茶羅となる。爾の時に弟子都て漫茶羅身と成る。若し更に深釋せば即ち是れ普門法界の身なり。また第十六廣く明せり、往て披け。

次に受者をして寶冠を被らしむ等。　略出四十九に云く、次に如上の所說を以て(一)頭上に五處に置く契法を作し已て、復た毘盧遮那の契を結んで本密語を誦し、彼の心上に置き(二)次に喉、次に頂上にし已て、即ち諦かに一切如來の秘密勝上の頭冠を想ふべし、彼の頭上に加へ、即ち上の所說の如く四種の鬘を結び、各〻其の部の法に隨て以て其の額に繫けよ。文疏第八廿三灌頂を明し畢て云く、次に當さに引いて一處に至り、阿

(一)頭上　前の五佛灌頂の印なり。

(二)次に喉の上「次に額」の句脫せるか。

闍梨親ら爲めに衣と首冠と白繒とを着せしめ、香を以て身に塗り、飾るに花鬘を以てし、焚香●燈明、法の如く供養し并びに縛を絡ひ金剛線及び臂釧指環を繫けしむ、其の制作の法は悉地供養の中に說くが如し。文 理趣分疏に云く、世太子の既に灌頂し已て將に王位を受けんとするに、王の冠を戴き王の服を着け王の殿に處るが如し。佛法の太子も亦た復た是の如し。法王法主の位を受けんとするに佛の冠を戴く、謂く一切智と一切種智となり、是れ佛の心首に戴持したまふ所なるが故に、即ち是れ觀照波羅蜜多なり。此の功德眞實の珍寶、七聖財の中には名けて慧財となす、故に此の冠冕を名けて寶冠となす。文 灌頂に次いで寶冠を明す、此の釋分明なり 今五佛の寶冠とは、即ち是れ一智と一切種智と佛の心首に戴く所なり。

次に四佛加持等。略出及び灌頂の軌此等の作法なし。

次に大阿闍梨等。此は已に灌頂を得るが故に正覺を成ずることを明すなり。本圓記に云く、次に受者に(一)四佛加持、(二)五佛灌頂、四佛(三)繫鬘の印明を結誦せしむ。此の時に大阿闍梨、受者大日尊となると觀念す、謂く阿闍梨の加持方便に依て悉地を成ずるなり。

次に成身會を行ずべし等。此は心數の諸尊を成ずることを明すなり。大日疏に云く、

(一) 四佛加持　阿閦、寶生、彌陀、釋迦の四佛に加持せらるゝなり。阿閦は心、寶生は額、彌陀は喉、不空は頂を印するなり。

(二) 五佛灌頂　五佛、行者に灌頂を授くるなり、大日は頂、阿閦は額、寶生は右頂、彌陀は項後、不空は右項に配し行者に五智の寶冠を戴かしめて其身を莊嚴す。

(三) 繫鬘　阿閦等の四佛、行者の五智の寶冠の上に鬘を繫けて行者を莊嚴するの印言なり

心王所住の處必ず塵沙の心數ありて、以て眷屬となす。今は心王の毘盧遮那、自然覺を成す。爾の時に一切の心數、即ち金剛界の中に入て如來內證の功德、差別智印を成せざること無しとは即ち此の謂ひなり。然るに略出等の中には此等の義なし、此れみな師傳に依て之を明すなり。

次に大阿闍梨(一)白拂を以て等。　第八廿二に云く、また新淨の白傘を備ふ、上に花鬘と及與び白繒とを懸く、亦た先に(二)不動を用ゐて去垢除障し、大日如來の眞言を以て之れを持す、阿闍梨自ら執て其の上に覆ふ、復た餘人をして淨氈牛の拂と(三)前と香爐とを執らしめて皆(四)辨事の眞言を以て加持す。また箱の中に於て衣と並びに諸の吉祥の物とを置く、即ち是れ金篦と明鏡と輪寶と商佉との類、并に四寶の瓶を持て以て供養す。文 演奧に云く、瞿醯下品に云く、復た餘人をして淨き氈牛の拂と及び扇と香爐とを執る。文 牛の拂と并びに扇とを持せしむる所以は、此は受者供養する讃の時に、即ち扇にて受者の身を拂はんが爲めなり。而るに今此に於て此の事を作すには非ず、只だ之を執持して隨從せしめ、後に至て此の事を作すなり。云云 疏には讃を誦する時に拂を用ふ。故に第八に云く、此の偈を說く時、自ら白拂を拂ふて其の身を拂ふべし。文 而

(一) 白拂　前に頭註せり。

(二) 不動　不動明王の眞言なり。

(三) 前　異本に扇の字に造る。

(四) 辨事　辨事明王なり、佛・蓮・金の三部に由りて辨事明王を異にすれども、不動明王は各部に通用す。

るに今道具箱の中に置て此の處に於いて之を用ひば、即ち受者を供養することを明す、是れ皆な相承の說なり、次の扇も義准じて知るべし。本圓の云く、扇は當時の行用は、檜扇を以て之を扇ぐ、天竺の道具の扇は爾らざるか、疊み扇は日本國に始めて之れを作る故なり。或る日記に云く、天智天皇の御宇に、夜分に蝙蝠室內に入て羽を以て燈燭を扇ぎ消し畢て、之れを見て蝙蝠の羽に擬して疊扇を作り始むと。云云 問ふ。天竺の扇如何。答ふ。摩利支天の三摩耶形の扇は、維摩詰の天女の把る天扇の如し。云云陀羅尼集經に云く、扇の當中に於て西國の萬字を作る（字は佛胸の萬字の如し）字の四曲の內に各〻四箇の日の形を作る、一一に之れを着く。云云天竺の扇は之に准じて知るべし文曾て聞く報恩院も亦た疊扇を用ふと。當流の團扇は爾らず、此の法に入る者は自ら知らん、今は之れを明さゝるなり。

次に塗香を以て等。　此は受者を供養するの隨一なり。略出四十七に云く、灌頂する所の者を引いて、帝釋の方の門より入て蓮花臺上に坐せしめ、種種の雜香、塗香、燒香、油燈、旛蓋、清妙の音樂を以て而して以て供養す。云云 本圓に云く、次に塗香を以て受者の胸に塗るとは、戒香を表すなり。略出經に金剛薩埵の密語を誦し、右の手を

以て香を取て受者の兩手に與へよ。云云金剛薩埵を以て三摩耶形體となすが故に、受者に塗香を與ふるの時、薩埵の心密語を誦するなり。文今按ずるに、經第四十九に云く、次に薩埵金剛の心密語を誦し、塗香を加持し已て彼の胸の前に塗る。作法加持する所以は、弟子をして速かに金剛薩埵と成らしめんが爲めの故に。文

次に五鈷を以て偈を誦す等。略出第四二十紙師、(一)觀の羽を以て五股拔折羅を執り、其の雙手に授けて種種の方便の言詞を以て開誘し安慰すべし、爲めに頌を說いて曰く、

諸佛金剛灌頂の儀　汝已に法の如くに灌頂し竟れり
如來の體性を成せんが爲めの故に　汝應さに此の金剛杵を受くべし

此の偈を說き已て密語を誦して曰く、

唵跋折羅、薩埵尊主無桂の切微體性なり鑁汝三摩耶論となる に曰く、汝已に灌頂して金剛の尊主を獲得し竟んぬ、此の跋折羅は常に汝が所爲の三昧耶に住す、復た金剛杵を收取するなり。若し是れ寶部ならば、また跋折羅の上に於て寶珠ありと想へ、餘部も此れに倣ふ。前の偈を誦する時、初の句の金剛の字を改め寶珠の字となすべし、諸部此れに准じて之れを改む。文

(一)觀　右の手羽は手なり。

按ずるに、六卷の經には毘哆蘇に作り、今の式に怛怛縛といふ。初の怛の字は經の徹の字に當る、兩文の異未だ審かならず。敎王經の下五地波底怛嚩に作て初の怛字なし、此等の異文未だ審かならず、更に撿せよ。

次に金剛杵を取り弟子の本名の上に於て等。略出經に云く、次に弟子の本名の上に於て金剛の字を加へ、名を作り之れを呼んで此の密語を誦すべし。

唵跋折羅、薩怛鑁麼舍二合。汝なり阿毗詵者冥我灌頂なり跋折羅娜莽入名號なり毘賀迦多灌頂係聲呼跋折囉那莽某甲論に曰く、我汝に灌頂を與へ訖る、金剛名號を以て汝に與へて字と作て、金剛某甲と名く。若し是れ餘部ならば或は寶珠●蓮花等を加へ、字と作て之れを呼べ。其の人若し阿闍梨の法を受くる者は、但だ本の所得の部を以て名となし、若し舊名を改むべき者は、意の所樂に隨て諸波羅蜜の勝名を任擇して之れを作せ。

式に出す所の眞言、經に對して麼●舍の二字なし。敎王經に云く、唵引二嚩曰羅二合薩怛嚩二合左麼毘詵遮弭二嚩曰囉二合曩摩、毘篩羯多二合三係嚩曰羅二合麼麼四此の眞言の句亦た略出と同じからず、此等の相違未だ審かならず更に撿せよ。已上の二眞言は即ち是れ一具の法門なり。五股杵を授くるが故に、金剛の名號を加へて之を呼ぶ。故に釋

經に云く、金剛手菩薩摩訶薩とは、此の菩薩は本是れ普賢なり、毘盧遮那佛より二手の掌に、親り五智の金剛杵を受けて灌頂を與ふる、之を分けて即ち金剛手となす。文即ち是れ二眞言の意なり。

次に(一)篦を以て、兩眼を拂ひ等。　第八に云く、また阿闍梨先づ囉字を用ひて金篦を加持す。また云く、復た弟子の前に當て金篦を以て、其の目を瑩拭し、而も爲めに偈を說く、當に囉字門を觀じて其の目の中の垢障を淨むべし。(二)偈に曰く等。問ふ。大日經には但だ初の四句ありて後の二句なし、今何に緣るや。答ふ。略出經に依て六句の偈と作るなり。經に云く、師、應に小金剛杵子を執て眼を治する法の如くすべし。其の兩目を拭ふて之に告げて言く、善男子、世間の醫王は能く眼翳を治する法の如くすべし。其日汝が爲めに無明の翳を開くこと亦た復た是の如し、汝等をして智慧の眼を生じて諸法の實相を見せしめん爲めの故なり。文解して云く、小金剛杵とは即ち金篦なり。第九に云く、西方に眼を治する法は、金を以て箸と爲し、兩頭は圓滑に、中は細く、猶ほ杵の形の如し、長さ四五寸許りなるべし、用ふる時は兩頭を以て藥を塗り、各〻一頭を用ゐて一の眼中に內れて之を塗る、涅槃の金篦も亦た此の類なり。金剛眼とは經

(一)篦　事記に頭註せり。

(二)偈に曰く　大日經には、佛子佛爲汝、決除無智翳、如猶世醫王、善用於金篦の四句なり

には智慧眼といふ、金剛は實相の智を表するが故に、今金剛眼といふ、義異ならざるなり。大日經に云く、佛子、佛汝が爲めに無智の膜を決除したまふこと、猶し世の醫王の、善く金篦を用ふるが如し。第九に梵本を擧げて具さに釋す、往て閱よ。

次に輪を以て受者の跏上に置き等。　此の四物を授くる次第は、諸文同じからず。大日經に依らば金篦●明鏡●法輪●法螺の次第なり。略出經には灌頂の次に法輪を授け、次に寶冠、次に五股等、次に金篦●明鏡、次に商佉を授く、而るに今の式の次第は何に緣るや、未だ審かならず。大日經の次第取も其の理あり。第八二十三釋して云く、また阿闍梨先づ囉字を用ゐて金篦を加持し、瞞字を以て明鏡を加持し、法輪●法螺の眞言を以て輪及び商佉を加持し、復た弟子の前に當て金篦を以て其の目を瑩拭し、而も爲めに偈を說き、囉字門を觀じて其の目中の垢障を淨むべし。次にまた現前に彼の明鏡を示し、而も爲めに偈を說いて、當に瞞字門を觀じて其の心中の垢障を淨むべし。次に法輪を持して彼の二足の間に置き、商佉を其の右の手の中に授けて而も爲めに偈を說き、各〻彼の眞言を用ゐて之を持す、然る所以は若し行人能く淨眼を以て現前に自ら心鏡を觀ずれば、即ち是に大菩提を成ず、菩提を成じ已ては法輪を轉ずること

は、爲し若干の數量の衆生に限劑を作すには非ず、乃ち當さに一切衆生を覺悟せんがために、是の故に大法螺を吹くなり。凡て秘密宗の中は皆な因緣の事相に託して、以て深旨に喩ふるが故に、此の如きの傳授を作すなり。文また法輪●法螺は一具の法門なり、輪は是れ法體、螺は即ち其の聲なり。故に大日經に云く、次に法輪を授けて二足の間に置きて、慧の手に法螺を傳へて復た是の如きの偈を說くべし、汝今日より救世の輪を轉じて、其の聲普ねく周遍して無上の法螺を吹くべし。文第九の釋に云く、此の法輪を轉ずる時は、一音聲を以て普ねく十方世界に遍し衆生を警悟す、故に大法螺を吹くにいふ。云云

歸命ㄨㄣを以て等。　ㄨ字は是れ說法の音なるが故に、法輪の種子とするか。維摩第一に云く、法を演ぶること畏れなし、猶し獅子吼のごとし、其の講說する所乃ち雷震の如し。文 皆是れㄨ字の義なり。今具さに證を擧ぐれば、無畏とは第九二十に云く、吽字は即ち是れ無所畏の聲なり。義釋第七六二に云く、吽字は是れ釋迦如來の奮怒師子吼なりと。安怛陀那一字頂輪王軌十六に云く、我が讃は雷聲の如し、分明に吽字を稱へよ、文應さに知るべしㄨ字に此等の義を具す、即ち是れ轉法輪の義なり。また金剛

(一)淨三業事記に頭註せり。

薩埵轉法輪の眞言は種子〔梵字〕(カン)字、〔梵字〕(カン)と〔梵字〕(ウン)と通用す、義即ち同なり。亦た其の證を擧ぐれば、(一)淨三業の眞言は種子〔梵字〕なり、然るに攝眞實經一十一紙淨三業の眞言は種子〔梵字〕故に知んぬ〔梵字〕字は是れ轉法輪の體なり。歸命〔梵字〕(アン)を以て等とは、〔梵字〕字は卽ち法螺の種子なり、第十三、吉祥商佉の印を釋して云く、薩嚩哆(サラバタ)遍一切なり暗(アン)は、此は是れ眞言の心、一切の法本來不生なり。上にまた點あらば即ち是れ大空遍一切處なり、此の大寂涅槃の體性萬法寂然として一切處に遍するなり。

法螺の偈とは、此は大日の偈を略攝して以て二偈となす、是れ輪と螺と合する偈なり、故に第九卷に梵本の題を擧げて云く、法輪法螺の偈。梵本大日經に云く、汝今日より救世の輪を轉じて、其の聲普ねく周遍して、無上の法螺を吹く、異慧を生ずること勿れ、疑悔の心を離れて、世間勝行の眞言の道を開示すべし、常に是の如きの願を作し、佛の恩德を宜唱せよ、一切の持金剛皆當に汝を護念すべし、具さに第九卷の釋の如し。

次に鏡を授け〔梵字〕の加持とは。梵偈に初の句に鉢羅(ハラ)底嚩(チバン)微慌の反像なり翻じて無形像といふ、千文は鉢羅底摩(ハラチマア)引に作る。疏の對譯は嚩字なり、次の句の初に〔梵字〕(マ)字あり、聲を轉じて〔梵字〕(バン)となす、〔梵字〕〔梵字〕(マバ)通同の故に〔梵字〕を種子となすか。また〔梵字〕は大空の義、即ち是れ諸法影像の如きの義なり。また大日經に云く、復た明鏡を執るべし、無相の法を顯さんが爲めなり。文 無相の法とは所謂る〔梵字〕字、心王の金剛界なり、故に心上といふ、即ち無相の菩提心を開見することを表すなり。第九二十四に云く、莾(マ)は是れ心の義、我の義なり、亦た大空に名く。華嚴第二十七十向品に云く、願くば一切衆生卍相莊嚴の金剛界の心を得しめん。大疏の釋に云く、外(そと)卍相を標するは萬德吉祥を表す、內智、如に契ふ、金剛界と名く。界とは性なり、性に契ふに由るが故に堅きこと金剛の損壞す可からざるが如し。智を成ずるに由るが故に、利きこと金剛の壞し難き惑を壞するが如き故に。云云 佛の心上に於て卍字を安ずるは即ち是れ心の明鏡、之を名けて金剛界心といふなり。妄執の垢を除くとは、〔梵字〕字の功德を明すなり。文殊亦た〔梵字〕字を種となす、文殊を無戲論(ブケロン)如來と名く、妄執を除くは即ち無戲論の義なり。第五に譬喩偈の〔梵字〕(マアラ)〔梵字〕(エン)無含藏の句を釋して云く、無含藏とは、云ふ所了知すべきこと難きとは、正しく是の如く無含藏の處にあり、如實に蘊の阿賴耶の本不生を知るを以ての故に、執受する所なし亦た含藏なし、爾の時に一切の心意識の妄想戲論、皆悉く清淨にして法界圓照なること、秋月の空にあるが如し。故に次の句に一切妄想を離るといふなり。文 蘊の阿

(一)極細妄執　煩惱の極微細なるをいふ。
(二)除蓋障三昧　蓋障即ち煩惱を除きたることとして菩薩の初地の位に入りたるをいふ。

頼耶の業受の種を除くとは、即ち第三劫の(一)極細妄執を離る、是を除妄執といふ。第九、明鏡の偈を釋して云く、若し此れと相應する時は、即ち普門の漫荼羅に於て(二)除蓋障三昧を得、能く一切衆生の爲めに無比の利を作す。云云　除蓋障三昧とは、即ち是れ第三劫の極細妄執を離るゝなり、之を思ふべし。

一切諸法性等。　此の八句の偈は即ち略出經の全文なり。大日經に對すれば文少異あり。大日經に云く、持眞言行者、復た明鏡を執るべし、無相の法を顯さんが爲めに是の妙伽陀を說く。諸法は形像なし、清澄にして垢濁なし、無執にして言說を離れ、但だ因業より起る、是の如く、此の法は自性染汚なしと知れば、世の無比の利を爲て、汝佛心より生ず、具さには第九卷の釋の如し。

師弟子に於て等。　此は略出の文を擧ぐ、經第四廿一明鏡を明し畢て云く、次に復た金剛杵を收め取て、師、弟子に於て恭敬を生ずべし、此の人は能く諸佛の種を紹ぐが故に。文解して云く、金篦を以て無明の膜を除き、心の明鏡を見て大菩提心を成す、自成を以ての故に、輪を轉じ螺を吹いて衆生を利樂す、即ち是れ佛種不斷の義なり、故に諸佛の種を紹ぐといふ、是を以て恭敬の心を生ずるなり。

(一)白傘　事記に註す。
(二)傘蓋行道　事記に註す。

次に大阿闍梨(一)白傘を執て等。此は正覺壇を出で、(二)傘蓋行道をなすことを明すなり。白傘とは、疏は但だ傘を持すといふ。今時は赤白の二傘を用ふ、白を金となし赤を胎となす故に白傘といふ、文は即ち疏に依る。第八廿四に云く、阿闍梨、次に傘を持し用ひて其の上に覆ひ、引いて漫荼羅を旋遶せしむること三匝すべし。先づ第一の行道院を遶り、次に第二の行道院を遶り、後に第三の行道院を遶る。是の如く行道する時、阿闍梨、吉祥、極吉祥等の偈を誦すべし、或は吉慶の梵文を誦すべし、既に周り畢已らば、復た西門の二龍廂衛の處に至て、其をして慇懃に禮拜せしむべし。其の傘は身に隨て上下して、而も以て之を蔭ふべし、即ち爲めに三昧耶の偈を說くべし、所謂る秘密藏中の四種の重禁なり。此等は皆な是れ阿利沙の偈なり、下に之を釋すべし。文解して云く、三重の行道院を遶るは、七日造壇の曼荼羅に約す、今時は但だ三たび大壇を遶るなり。三昧耶偈を說くとは上に之を辨ずるが如し、此は戒相を示す。即ち第九所釋の三昧耶の偈を說く、今時は此の義なし。

次に立て曼荼羅に對す等とは。　此は三昧耶の戒相を示し畢て、次に曼荼の前に對して弟子に告ぐるなり。第八に云く、漫荼羅の前に對して爲めに三昧耶戒を說く、

汝今已に漫荼羅、持明の阿闍梨を成就し竟んぬ、諸佛菩薩及び眞言主、一切の天神已に共に汝を知りたまひぬ、若し衆生法器となるに堪ふと見ば、彼を怜愍するが故に、當に爲めに漫荼羅を建立して而して之れに教授すべし。

次に共に還着等。　此は小壇に還着することを明す。新阿西座に着すとは前の座と相ひ反す、所表更に尋ねよ。諸尊に白す等とは、此の文に依らば新阿西座に着き畢て、大阿此の文を唱ふ、唱へ畢て次に東座に着く、此の義は今時の行用と異なり。今時の行用は口決に云く、壇前の所作畢て將に小壇に入らんとする時、屏風の外に於て、師、蓋を持し乍ら此の語を作す、諸尊に白す等。云云　此の語を作し已て蓋を放て小壇に入るなり。唱ふる所は即ち瞿醯の文なり。第八廿四に云く、瞿醯に云く、弟子西門に至り禮拜し已らば、阿闍梨當に諸尊に白して云ふべし、我れ某甲、已に某甲のために灌頂を授け竟んぬ、今諸尊を附屬して明藏を持せしむと。此の語を作し已て、當さに傘を放て、其をして起立せしめて、漫荼羅の前に對して三昧耶戒をなすべし。文　解して云く、今諸尊を付屬すとは、言は諸尊の三昧耶を以て弟子に付屬するなり。然るに古德の解は、皆以て弟子を諸尊に付屬すとは、恐くは不可なり。また按ずるに、式には疏の文前却して引いて分ちて二節とす、疏には、佛子汝今等は後にあり、文を披いて見るべし。また疏の意は、二龍廂衛の處に於て三昧耶戒を授く。根本四重　次に瞿醯を引いて三昧耶を授くる義を證す。即ち諸尊に白す等の文なり　次に灌頂壇に入て、三昧耶戒を受くるが故に、曼荼羅の持明阿闍梨を成就し竟ることを明す。即ち佛子、汝今等の文なり　疏の意は式と同じからざることを見るべし。

次に闕伽を行ずる印眞言等。　此は(一)前供養なり、新阿闍梨已に佛位を成ずるが故に供養を獻ずるなり。第八二十二に云く、所有の塗香●燈明●闕伽水等は、先に已に如法に加持せり、專ら上の法の如し、阿闍梨先づ彼の香水を奉り、次に塗香を用ひて遍ねく其の身に塗り、花鬘を以て其の身を冠飾し、以て瓔珞となす、次に焚香を奉て之を薫じ、諸の燈明は其の前に布列し、幷びに諸食を獻すべし。凡そ此の供養物に總じて十三坐あり、謂く四金剛と四菩薩と四使者と、幷及び弟子となり、其の弟子の供物は最も豐厚ならしむること、猶し本尊を供物するが如きなり。また略出經、本名の上に金剛の字を加ふる次に云く、また香花種種の供具を以て、所灌頂の者を供養せよ。云云

次に大阿念誦を取る等。　經疏には此の義なし。

(一)前供養　事記に頭註せり。

(一)後供　事記に頭註ぜり。

(二)夜の作法　金剛界灌頂、即ち初夜作法なり。

(三)ザ、薩怛縛に、三昧耶薩怛縛になり、金剛薩埵の印なり。

(四)初重印可を授くるに、重位あり、次第あり、其の最初の位を初重といふ。

次に(二)後供を行すべし等。

按するに、式に後供の次に略出經の阿闍梨、五鈷●金剛杵を執る等の數條の文を出す。經の意は、此に正しく三昧耶戒を授くることを明す、即ち大日經の傘蓋行道畢て根本の四重を授くるに當るなり、然るに今は之を略す。何が故に之を略すとならば、凡そ今時の行用は三昧耶戒場に於て、總じて諸戒を授け已る、故に(三)夜の作法に於ては更に此の義なし、故に之を略するか、更に尋ねよ。

次に印可を授くとは。(三)ザ(サトバ)の印に一字の明なり、是れ野(ヤ)●澤(タク)同授の(四)初重の灌頂の印言なり、經疏に出さず、是れ師傳なり。印可の時は別に口說有て之を示す、灌頂の時は其の義なし。灌頂を授與す等とは、此は瞿醯經に依て偈頌となす、具さに上に疏の文を引いて之を解するが如し。本圓記に云く。問ふ。印可を授くる偈に灌頂を授與し竟んぬ、佛子佛位に昇る。云云　爾れば新阿闍梨、實に佛果を證すと云ふべしや。答ふ。爾らず。弟子、灌頂の職位を受けて師位に住し、佛種を紹ぐが故に佛位に昇るといふ、正しく佛果を證するには非ず。疏第十五に、譬へば世間の刹利(セツリ)の種の如し、其の繼嗣を紹いで王種を斷せざらしめんと欲する爲めに故に、其の適子の爲めに灌頂を作す○今如來法王の子亦た復た是の如し、佛種をして永く斷せざらしめんが爲めの故に、甘露の法水を以て佛子の頂に灌(そそ)いで、佛種をして永く斷せざらしむるが故に、世法に順ずるが爲めの故に、此の方便印持の法あり、此れより以後一切の聖衆に咸く敬仰せらる、亦た是の人畢竟して無上菩提を退せず、定んで法王の位を紹ぐと知る、諸有所作の眞言身印、瑜伽等の業、皆敢て違越せざるなり。文　明らけし法王の位を紹ぐに約して佛位に昇るといふ、實に佛果を證するには非ざるなり。

國譯傳法灌頂初夜作法理記下終

後夜は胎藏界灌頂なり、前の初夜の事記を更に理の上より記述せし故に理記といふ。

國譯傳法灌頂後夜作法理記

金剛子曇寂

大都初夜の作法と異らず、今且く異りある者を之に記す。其の餘は初夜の法に准じて應さに知るべし。

覆面等の事等。　今時の行用は、胎藏の灌頂も亦た金界と同じく普賢三昧耶の印言を授く、恐くは是れ相傳の義ならん。今按ずるに大日經に云く、眞言法敎の如し、而も用ゐて其の首を覆ひ、深く悲念の心を起して三たび三昧耶を誦すべし。第八紙に釋して云く、此の綵淨の帛を用ゐて周ねく弟子の面門を覆ひ、當に深く慈悲護念の心を起し、耳語して彼に三昧耶戒を告ぐべし、諸餘の未入壇の者をして聲を聞かしむること勿れ、此の一偈は轉字輪曼荼羅行品の中に於て之を說く。文解して云く、經の三誦三昧耶とは、是れ入佛三昧耶の眞言なるべし。疏の釋に三昧耶戒といふ、此の眞言は是れ法性無漏三昧耶戒なり、覆面の時に之を授けば、即ち此の戒受得の義なり。轉字輪品に於て之を說くとは。彼の經に云く、繒帛面門を覆ひ、悲愍の心を起し乃至耳語して彼に無上正等戒を告げ、次に當さに彼が爲めに正等三昧耶を結ぶべし、彼に開敷せる華を授けて菩提の意を發さしめ、其の所至の處に隨て學人に敎へ、是の如きの要誓を作し、一切傳授すべし。第十三に釋して云く、時に師、弟子をして結護せしめんと欲するが故に、耳語して之に敎ふ、所謂る菩提の心を住せしむ、別に說處あり。彼既に菩提心を發さば一心に誠仰して住せよ、師自ら印を作し、其の頂上に向て之を着く。更に何の印なるかを問へ云云解して云く、更に何の印なるかを問へとは、疏主決釋せざるなり。然りと雖も經に耳語戒を明して正等戒といふ、其の印を明して正等三昧耶といふ。明けし是れ三昧耶の印なり。故に具緣品に云く、三たび三昧耶を誦せよと。疏釋に三昧耶戒といふ。知んぬ是れ正等戒とは、入佛三昧耶の眞言。正等三昧耶の印とは即ち入佛三昧耶の印なり。應に知るべし胎藏は入佛三昧耶の印言を授與す。是れ金剛界の普賢三昧と其の義相ひ同じ、具さには上に禪要等を引いて之を明すが如し。(一)演密抄八に云く、疏に更に問へ何の印とは三昧耶の印なり。何を以て之を知る、謂く第二の經に云く、次に自ら諸佛の三昧耶を結んで三轉、淨衣に加ふべし等と。また即ち此の經に云く、耳語して無上正等戒を告ぐる等と。此の三昧耶を名けて一切如來の金剛の誓

(一)演密抄　大日經義釋演密抄十卷あり、宋の燕京圓通寺覺苑の撰著。

(一) 密印品　大日經中の密印品なり。

(二) 髻　頭髮を總べ結びたること。

(三) 大空云云　𑖀字に大空點あるもの即𑖀字なり。

戒となす。此の眞言の印は(一)密印品にあるのみ。文

佛子今已に如來眷屬の中に入る等とは。　此れより已下の諸の眞言等及び四禮は皆な金界に同じ。是れ其の作法、金界に依るは皆是れ相傳なるのみ。

新阿闍梨西座すとは。　胎藏の曼荼羅は西門より入て西の座に着す、諸尊は皆東より西に向ふが故に、受者西より東に向へば、諸尊と相對するなり。

次に大阿闍梨彌陀定印を結ぶ等。　此は灌頂し已るが故に弟子毗盧遮那と成ると觀ずることを明すなり。轉字輪品に灌頂を明し畢て云く、(一)髻の中に(二)大空闍字門を授與すべし、心に無生の句を置き、胸は無垢の字を表す、或は一切の阿字髮髻金色にして、白蓮花臺に住し仁者に等同なり。第十三の釋に云く、また復た未だ灌頂せざる前に、弟子の頂の十字の縫の上に於て闍字を想へ作せ、其の心中に極想して阿字を作じ、また囉字を想ひ胸上に在け、亦た可ふべし阿字を想ふて一切處に遍して用ふるなり。金色の光髮冠白蓮花に坐すとは、謂く彼の弟子の心中に白蓮華圓敷圓滿せるを作し、毘盧遮那如來其の上に座したまふと想へ、然る後に之を灌ぐ。經に仁者といふは即ち是れ毘盧遮那如來なり。若し此の法を以て灌頂する者は、即ち是れ十方の諸佛、

灌ぐに法水を以て法王の位を授くるに同じ。爾らずんば徒らに灌ぐのみ、能く爲すことなし。文　解して云く、此は秘密灌頂を明す、故に未だ灌がざる前等といふ。先づ此の觀を作し已て、次に事の灌頂を作すなり。故に第十六(二十九)に云く、囉字淨除すとは、先に已に阿字及び囉字を作し、淨除し了り亦た前法の如し、弟子を淨除するなり。即ち是れ前方便囉字の火を觀じて、彼の障法積業を燒除す、悉く淨めしめ已て、方に復た甘露の法水を以て之に灌灑し、死灰の中にして道牙を生ずることを得、是の故に次に彼の闍字を授くるなり。師、瑜伽の座に住して阿字を觀ずべし、上に點を加へて弟子の頂上の十字の縫の中に置くべし。當に知るべし此の上に點あらば、即ち是れ甘露の法水を用ゐて其の頂に灌ぐなり。文　今胸上の𑖀字は是れ能燒の火、心中の阿字は是れ所燒の體即ち弟子の身なり。故に次に遍一切處といふ、遍一切處とは謂く一切の支分に遍す、即ち是れ所謂る弟子の身を燒くなり。頂上の𑖀字は即ち甘露の法水なり、弟子の身中の業受の種子を燒いて佛樹の牙を生ず、即ち是れ灌頂の實義なり。具さには第八卷及び第十六卷の釋の如し。また心とは謂く心位所(ソ)所謂る勝根なり、胸は即ち扶根(ブコン)なり、其の別なること知るべし。然るに式の意は、此等の字を觀ずるは、弟子大日尊と爲る

ことを明す。疏の意と同じからず、其の義知るべし。また但だ𑖩𑖿の二字にして𑖩字を略するなり。𑖩字(一)百光遍照とは、經の第六百字位成品に云く、百光遍照の眞言に曰く、南麽(ナウマクサンマンダボダナンアン)三曼多勃馱喃暗。第十八の釋に云く、百光遍照眞言とは、謂く此の一字より百法の光明を放て遍流して出すなり。此の字若し翻じて遍となれば、亦た正しく其の理に當らず、若し翻じて放光となれば、放光の義も亦た未だ盡きず、大都は是れ遍出の意なり。百の威德の光此れより出づるなり。此の眞言は先づ一切の佛に歸命して乃ち說くなり、金剛手此の眞言は眞言救世者なり、大威德あり、佛は自ら即ち是れ一切自在牟尼なり。乃至此の眞言は即ち一切自在牟尼とは、此れ即ち毘盧遮那の別名なり、此の眞言の慧方便の光、能く一切無智の暗を破すこと、猶し大日出づる時、衆冥自滅するが如し、普く謂く一切衆生の、頓に一切の無明の暗を除くなり。文應さに知るべし、𑖩字百光遍照王とは、即ち是れ大悲胎藏毘盧遮那の眞言なり。

次に如會身會三十餘印言を行ずべしとは。(二)青龍軌(セイリウキ)に如來慧刀より平等開悟に至る二十五の印を擧げ畢て云く、已上は如來身會。文然るに式に亦た三十餘印といふ、或る人の付紙に云く、如來身會は大慧刀より平等開悟に至る二十餘箇の印言なり。今三十餘といふは詳かならざる也。今按ずるに三十とは恐くは是れ二十の寫說ならん。今時の行用は略して(一)大慧刀と大法螺と滿願と毫相と悲生眼との五箇の印明を行ずる也。

次に金篦を以て等。　此は金篦●明鏡、法輪●法螺●其の次第大日經の疏と同なり。

次に立て曼荼羅の前に對し、爲めに三摩耶を說くとは。　初夜の作法には爲めに三摩耶を說く語なし、此は第八の疏文(二十四紙)を擧ぐ。疏は傘蓋行道を明し畢て、根本の四重を授く。今時は此の義なきが故に初夜の作法を正しとなす。而も今之を擧ぐるは是れ同文の故に之を擧ぐるのみ。

次に殊に五股を授く等。　式には初後夜同く後供の次に於て五股杵を授く、今道敎は初夜は之を略し、後供養の次に直ちに印可を授く。何が故に初夜には之を略するや、此の義口決を聞かざるなり。今窃に按ずるに、此は金胎一夜の作法なるが故に、初夜には之を略し、但だ後夜のみに於て之を授くるか、此は略出經の意を取て之を明す。經第四(二十一)大壇前に於て根本の四重を授け畢て云く、また五股金剛杵を執て、之に授與し告げて言く、此は是れ諸佛の體性、金剛薩埵の手に執らるゝ者なり。汝堅く禁戒を護て常に之を畜持すべし、弟子受け已りて、此の決定要誓の密語を授け、其を

(一) 百光遍照𑖩字より二十五字を生じ、各々四轉して百字を成じ遍照の德なるをいふ。

(二) 青龍軌　前に註す。

(一) 大慧刀云云　印の事は事記に註せり。

して之を誦せしむ、密語に曰く、唵薩婆、怛他揭多、悉地跋折囉、三摩耶底惡吒願（シヤ）沙（今ナトバ）怛（嚩亡可の切）含（亢井切於我なり）駄（ダラヤ）囉野（メイ）冥（我今持するなり）跋折囉（バザラサトバ）薩埵、係（形以の切）係係係（キキキキ）、吽（ム）。論に曰く、一切如來金剛薩埵、三昧耶を成就し、願くは我所に住して、我常に守護せん。是の如く作法已りて、所有の一切の曼荼羅、秘密三昧耶智を、師教授すべし。若し弟子三摩耶の契に於て退失ある者は、師遮制して毀壞せしむることなかるべし。弟子師に於て恭敬尊重すべし、師の短を見ること莫れ、同學の所に於て相ひ嫌恨することなかれ、之れに告げて言ふべし。汝一切衆生に於て常に慈愍を生じ、哀矜して示誨すべし、厭離を生ずること莫れ、爲めに偈を說いて言く。

三界の極重罪は猒離には過ぎず　汝貪欲の處に於てすら、猒離の心を生ずること莫れ　弟子をして堅持して歡喜せしめんと欲するが故也。爲めに偈を說いて曰く、

此等の三摩耶は、諸佛汝が爲めに說きたまふ、守護して善く愛護し、身命を保つが如くすべし、弟子師の教を受け已て、師足を頂禮して白して言く　師の教誨の如く、我誓て修行せんと。文

解して云く、今五股杵を授くるは、正しく是れ三昧耶戒の體なるが故に、諸佛の體性等といふ。また眞言の中に、三昧耶を成就し願くは我が所に住して、我守護すべしとは、是れ戒體の心中に住することを明すなり。秘密相經の中卷に云く、灌頂を受け已て然して諸佛成就の大金剛杵を得受すべし、復た次に頌に曰く。

汝常に此の金剛杵を持す、　即ち金剛手堅固の戒なり、　金剛薩埵の勝修の中に、

一切斯に由て成佛を得るなり。文

此の文は明かに知んぬ、五股杵は即ち是れ戒體なり。夫れ五股は(一)五智三十七智を表す、即ち是れ金界の曼荼なり。凡そ此の宗は曼荼羅を以て戒とする故に、此の義は具さに(二)秘密戒義に之を辨ずるが如し。是の如く作法し已て。以下は正しく教誡を明す、是れ弟子を教誡するなり、長行の文の意知るべし。三界極重罪等とは。初の二句は猒離の過を明す、謂く二乘の心なり、次の二句は教誡なり。貪欲所とは謂く三界なり、是に於て猒離せず即ち菩薩の大貪なり。義釋第八三十一成就を作す人の二十種の德を釋する中に云く、第二十に樂作成就とは此は菩薩の大貪なり、此の貪欲の因緣を以て種種の法界不思議の色を染着す。猶し世人以て六塵に染着して、自ら捨すること能はずして、種種の業受の身を成ずるが如し。故に瑜伽宗には灌頂を受くる時、阿闍梨要誓を

(一) 五智云云國譯辨顯密二教論及菩提心論に出づ。

(二) 秘密戒義具には秘密三昧耶佛戒儀、本卷に掲載せり弘法大師の作

立てゝ言く、汝今より已後慎んで貪欲を斷ずること勿れ、貪欲を斷せざるを以ての故に、則ち世間の佛種を斷せざるなり。誓へば巧に王の膳を說き樂ふて仙方を學んで、具さに烹飪の宜を曉らめ飛練の決を傳ふるが如し。而も方便を說いて無心に服食す、誰か能く之を强いんや。若し此の二十の德を具する者は、乃ち成就を作す人の支分と名くる也。文又此の一偈は即ち法輪の印言と、及び大欲の印言との意なり、此の二印言相接すれば、即ち是れ此の偈の意なり。(一)蓮心軌に云く、阿賴耶識の中に菩提に違背する種あり。次に法輪の印を結んで彼の猒離の輪を摧く、即ち前の蓮花の印の、檀惠を交へ竪て、自心を摧製して、即ち二乘の種を滅すと。云云初の二句の意なり次に大欲の印を結ぶ眞言の中に、薩囉多嚩曰羅の句あり。釋經に云く、蘇羅多とは世間の那羅那哩の娛樂の如し、金剛薩埵も亦た是れ蘇羅多なり。無緣の大悲を以て、遍ねく無盡の衆生界を緣じて、安樂利益を得んと願ふて、心曾て休息すること無く、自他平等無二なり、故に蘇囉多と名くるのみ。文無緣の大悲とは二乘の自利の心に違す、即ち菩薩の大貪大欲なり。次に一偈は正しく敎誡を明す、知るべし。

國譯傳法灌頂後夜作法理記 終

(一)蓮心軌 蓮華部心儀軌なり、前に註せり。

國譯傳法灌頂護摩理記

金剛子曇寂

傳法灌頂護摩とは、傳法灌頂は餘時を簡ぶ、即ち灌頂護摩なり。蘇悉地疏第七に云く、護摩とは是れ西天の語、此れ即ち焚燒の義なり。文疏第十五十四に云く、護摩は是れ燒の義なり、護摩能く諸業を燒除するに由る、一切衆生は皆業より生じ、生によつて業を轉ずるを以て輪廻已ることなし、業除を以ての故に生亦た除くことを得、即ち是れ得解脫なり、若し能く業を除かば名けて內護摩と曰ふなり。第二十卷に云く、凡そ護摩とは謂く慧火を以て煩惱の薪を燒き盡して餘なからしむるの義なり。文疏は字を分て釋す。ॐとは、ॐ字の本體は是れ因業の義、上の點を煩惱と名く。涅槃經に云く、烏をば煩惱の義に名く、煩惱をば名けて諸漏といふ。ततः は是れ大空の義、即ち惠火の體なり、故に諸業を燒除すといふ。また ततः は是れ解脫の義、梵に ततः といふ、ततः 字を體とするなり。

凡そ灌頂護摩を修するに、金胎の本文及び今時の行用に時分異りあり。先づ本文の異

を明さば、略出經は灌頂畢て次に護摩を修す。經第四に、弟子を引いて大檀前に至り、三昧耶戒を授け畢て云く、復た諸の已灌頂の弟子の爲めに、其をして寂靜法を圓滿せしむべきが故に、其の災障を除かんが爲めの故に、與に護摩法を作すべし、灌頂壇●火天方に於て、絶た遠かる應らず、四肘壇を作れ。云云

大日經に引入投華畢りて（引入弟子の支分と名く）未だ正覺壇（灌頂支分と名く）に入らざる前に於て護摩を修す。

第八卷に引入投花を明し畢りて云く、次に當に諸の弟子の爲めに寂災護摩を作せ、是れ（一）扇底迦法なり、亦た翻じて息災となすべし。此れは是れ一種の支分。云云 又護摩を釋し畢り十九て云く、經に云く爾の時毘盧遮那世尊、復た執金剛秘密主に告ぐ以下、灌頂法を明す、亦た加持敎授支分に屬す、云云文分明なり見るべし。而も今時の行用は、金胎一夜作法なるが故に、初後夜の中間に於て而も之を修するが故に、稱して中間護摩といふ、此は亦た相傳說にして經軌と同じからず。演奥鈔第二十六、第八卷の護摩を釋して云く、當時傳法灌頂護摩は斯に當るなり。文 恐くは意を得ざるなり。

息災爐は本尊を懸けずとは。　先づ息災の義を明さば、大日經に云く、曼荼羅の中に於て不疑慮の心を作すと。第八十紙釋して云く、疑慮せざるの心とは、即ち是れ

（一）扇底迦法　息災と譯す。

息災の意、應に一緣不亂にして之を作せ。若し行者、奢字門に住して、諸法は常に寂然なりと觀ずれば、疑悔永く盡き蓋障淨除す、即ち是れ寂然護摩の本意なり、文 此に息災といふ。𑖭字を體となす、故に𑖭字の義を以て釋す。また𑖭は息なり、𑖮は災なり、故に或は寂災と云ひ亦た息災といふ。また𑖭は不なり𑖮は疑なり、是を以て不疑慮即ち息災の義なり。息災爐とは略出四三十に云く、四肘壇を作り高さ一磔手、中に（一）君荼を鑿り、徑圓一肘深さ十二指、好淨にして泥拭、兩重に緣を作り、高闊各〻一拇指、外緣高闊各〻四指あり、底は平正なるべし。即ち其の底に於て泥を以て輪像を作り、或は跋折羅、兩柄南に向ひ、出づること丁字の如し長さ四指、闊さも亦た四指、横頭の長さ八指、高闊各〻四指、次に外に土臺を作れ形蓮葉の如し。文 息災は圓爐見るべし。然るに疏に二說あり。第八十紙に云く、曼荼羅を作るの法は、自身の肘量を取り、縱廣一肘、其の深さ之に半す、周帀緣を安き廣さ四指節高さも亦た是の如し。凡そ護摩の壇は方●圓●三角なり、事業に隨て轉ず。但し此の中の作法は方壇を用ふべきのみ。文 又云く、方壇を大因陀羅と名く。云云 第二十卷四紙に第一因陀羅火を釋して云く、第一を名けて智火となす、方の名稱なり、色黃端嚴なり○此の中方壇とは梵には摩訶

（一）君荼　爐のこと。

因陀羅と名く、是れ帝釋の別名なり。また則ち金剛輪の別名なり、智は是れ内證なり、其の外發の表は金剛杵形に作る。此の方座形與に相似せり○若し順世間の故に而も壇を作らば、當さに方爐を作るべし。周匝して光焰あり、自身も亦た黄衣を着け、火爐中に此の本神ありと想へ、三昧に住すること上の如し○此の法は息災と相應す、是れ堅固の法なり、初の菩提心は阿字門なり、此の因緣に由て智具足するなり。文第十四二十に云く、また此の瑜伽の座は、是れ黄金剛の方輪なり、即ち是れ金剛の座なり、方は是れ息災、圓は是れ增益、三角は是れ降伏。云云方壇黄色を息災とすること見るべし。また第十一二十四に云く、即ち下身とは謂く臍より已下想ふて皆純金剛に作す、此に内外あり、内は謂く上の所説の如し、外は謂く自身の坐處を想ふて方金剛壇の中に在くなり、其の壇已に上に説くが如し。大因陀羅と名くとは、此は是れ金剛中の極剛の者なり、能く金剛を破すれども、而も金剛は彼を破ること能はず、また是れ極黄色なり。此の紫磨金色の如し、此れに阿字を想ふて之を爲すを金剛輪と名くるなり。○凡そ一切の增益の事は、若し作んと欲せば皆此の座に坐せよ、增益は亦た圓滿と名く、謂く能く一切の所願を滿すなり。若し此の增益の法を作さんと欲はん時は、持誦の人は此の

なり。

(二)金剛壇の中に於て、佛、三昧に住して身眞金色なりと想ふなり。云云第十二二紙ヰ字圓壇を釋して云く、次に嚩字門を明す、即ち是れ上の嚩字なり、先づ其の體を明し、後に三昧の畫を兼ぬ。其の想法は此の字を想ふて純ら白色に作せ、猶し雪山及び牛乳等の鮮明皎潔なるが如し。○此は是れ息災の中に最も第一たり。文此等の文は、方壇黄色を增益の法となし、圓壇白色を以て息災となす、此れ常途諸軌の中の説と同なり。密かに按ずるに黄色は必ず白色を具するが故に息災に通ずるか。

本尊を懸けずとは。　謂く本壇の諸尊を召請す、而も火壇に入るが故に別に本尊を用ゐざるなり。故に第八十丁に云く、今灌頂壇を以て、又須らく正しく中胎に對すべし、此の壇を移して稍く南に近づかしむべし。乃至西南の角より以來は、皆是れ三位相望するに、理に於て失なし。文應さに知るべし火壇の大壇の西にありとは、意ろ大壇の諸尊を請召することを明すなり。鈴と五鈷を置かずとは、本壇に於て修法を作し已て護摩壇に入るが故に、此等の道具更に所用なし、故に之を置かず、但し三鈷杵は今の所用の故に之を置くなり。打鳴を置かずとは、亦た當さに准知すべし。淨衣白裳とは謂く息災の服なり。第八十六に云く、凡そ護摩各〻所應の事業に隨ひて、或は寂靜を

以て或は歡喜を以て、或は威猛の心を以てし、所被の衣服(一)白・黄・赤・白は息災、黄は増益、赤は降伏を表す。(二)北に向ひ息災なり、東に向ふは増益なり。(三)圓・方・三・圓は息災、方は増益、三は三角なり。(四)トコ 獨股の略字なり。(五)曇 恐らくは蟲の字の寫誤。向ひ東に向ひ南に向つて坐すべし、其の曼荼羅亦た(三)圓・方・三角の異りあり、色も亦た知るべし。

次に嗽口香水を加持し。所持の(四)トコを以て等瑜伽護摩軌に云く、嗽口の印は、右の羽は金剛拳。進力を舒べ水を攪きて加持すること七遍し訖て、便ち四度を屈し、掬を作し水を抄し、臂を垂れ掌を身に向はしめ、右旋して火に灑ぐ、眞言に曰く、唵引(ラン)𣚤羅(バラ)娜(ダ)、𣚤曰羅(バラ)引二合(タン)曇。文此の印は恐らくは獨股の形、今直ちに獨古を用ふるなり。眞言句義、ॐは施願(セクワン)なり。ॐは金剛なり即ち文殊の眞言なり。三世最勝心明王經に護摩を明す中に云く、また水を灑ぎ、また火天の與(たの)に口を漱ぐに、文殊師利の眞言を以てす、漱口の眞言に曰く。唵一嚩(バ)囉娜、𣚤曰囉二合(ラ)曇二。師云く、旋遶は是れ漱口、眞に灑ぐは淨火(五)第十三に、金手の種子ॐ字を釋して云く、𣚤字幷に施願吉祥金剛とは是れ文殊なり。種子を以てとは是れ麽字即ち空點なり、𣚤字を用ひ加へて鑁字と爲すのみ。文應(まさ)に知るべし施願金剛とは即ち文殊の異名なり。

次に羯摩加持。　口決に云く、三股を本處に置き、珠を左腕に懸け印を結ぶなり。

先づ順に三轉、明三反、次に逆三轉、明三反合して六反、右、左を押し印の面を身に向ふ、右を內にして腕を交ふるなり、

大日加持常の如しとは。　智拳印、ॐ、羯摩會の印明なり。印を結び明を誦す先づ三遍、次に四所加持、明各〻一遍合して七反なり。

次に三平等觀。　口決に云く內外護摩あり、三平等觀は是れ內護摩なり、先づ內護摩に住し次に外護摩を行ずるが故に、慇懃に之を行ずべし。今文を解して云く、初に如來の三密を明す、如來心是れ實相とは是れ意密なり、爐の總體を身密となし爐の口を口密となし、總じて如來の三密を成ずるなり。火は即ちの下は、行者の三密と無二平等なることを明す。火は即ち行者身中の智とは、意密平等を明す、行者身中の智慧は即ち是れ實相智火なるが故に。如來身口の下は、身口平等を明す、中に於て三種の平等を明す、初めに如來の身口と爐の身口と平等なることを明す。及び行者の下は、行者と平等なることを明すなり。問ふ。如來と行者と凡聖を異にす、云何んが平等なるや。事鈔道快に云く、遍知院別記に云く、三火は五大の所成、また如來と並びに爐と及び行者の身口意と皆五大の所成なり、是の故に五大と五大と相ひ離れざるが故に三和するなり。

(一)本尊　意密に當り、火は口密、自身は身密に當る。(二)毘盧遮那　意密に當る。(三)慧火　口密に當る。(四)我が身　身密に當る。(五)火　口密に當る。(六)神　意密に當る。(七)自身　身密に當る。(八)本尊　意密に當る。(九)眞言　口密に當る。(一〇)印　身密に當る。(一一)印　右手を竪て四指を散じ立て大指を掌中にし、左手は大指と中指相捻し、三角の印となして胸に置く。(一二)明　阿擬羅曳　陀羅尼。(一三)智慧の手　右の手なり。(一四)施無畏　佛が無畏を衆生に施す印明にて、臂を擧げて五指を伸べて掌を外にし物を與ふる如き形にす。(一五)空輪　大指なり。(一六)撥遣　事記にあり。(一七)一切諸法云云　阿字の釋なり。(一八)萬行云云　之れ俄字の釋なり。(一九)所行なし、所行は俄、なしとは阿字に當る。(二〇)無師　自覺は俄字なり。(二一)大空云云　娜字の釋なり。(二二)諸法云云　曳字の釋なり。(二三)薩般若　智慧なり。

私に云く、(一)三火とは本尊と行者と爐との智火なり、即ち意密なり。所成の三業は麁細の差ありと雖も、能成の六大は因果の別あることなし、故に三平等の義を成ずるなり云云文今按ずるに第二十卷に云く、內作とは(一)本尊即ち火、火即ち自身なり。今謂く理釋せば、本尊は即ち是れ毘盧遮那なり、此の(二)毘盧遮那は、自然の(三)慧火に異らず、此の火は(四)我が身に異らざるなり、即ち一の自性三和合を以て內護摩と名くるなり。三和合とは謂く(五)火、(六)神に異らず、神は(七)自身に異らず、和合とは爲く本尊即ち火、火即ち自己に同じ三事等しきなり。文意の明さく、本尊を意となし、爐を口密となし行者を身密となす、此の三平等なるを內護摩となす、今の三平等觀とは其の義同じからず、三平等の義を明す、往て閱よ。

次に火天の印を結び身の四處を印すとは。　口決に云く、(一一)印は文の如し、但し掌を舒べ外に向け、先づ(一二)明三遍を誦し、次に四所加持し、明各〻一遍合して七遍なり。密印品に云く、前の如く(一三)智慧の手を以て(一四)施無畏の相を作し、(一五)空輪を以て掌中に在け、是れ請火天の印なり。第十六に云く、請火天の印は、當さに右の手を側め申べ、其の風指の第三節稍〻屈し、又空指の上節を屈し掌中に向け、若し直に屈せば是れ請召、若し先づ屈して還て展ぶれば是れ(一六)撥遣なり。第八に云く。若し請召の時伊係伊係の字を加ふべし、撥遣の時に至て揭車揭車の字を加ふ。云云　四處を印すとは、今本尊三昧に住す、故に四所を印するなり。終に息災の句とは是れ息災護摩の故なり。瑜伽軌に云く、唵引阿誐那曳娑嚩二合訶引今扇底迦の句を加ふ故にいふなり。第八に云く、次に火天の眞言を說く、

南麼三曼多勃陀喃、阿揭娜曳娑訶。

初句は諸佛に歸命する義、前に說くが如し、第二句の阿揭娜曳は是れ火の義なり、此の中寂初の阿字を以て種子となす。(一七)一切諸法は本不生なるを以ての故に、即ち金剛智體に同じ。俄は是れ行の義、諸法本不生なるを以ての故に。(一八)萬行を具足すと雖も而も(一九)所行なし。是の故に名けて(二〇)無師自覺となす。若し是れ無師自覺ならば、即ち是れ(二一)大空遍一切所に同じ、敎に娜と同體なり、(二二)諸法無師無行なるを以ての故に。遍一切處の故に三界に於て動出せずして(二三)薩般若に至る。是の故に乘及び乘者なし、爾れば乃ち大乘と爲す所以なり。三昧の聲を加ふ、意明けし此の乘定慧均等なり。諸佛、

菩薩の道を行ずる時、皆是の如きの慧火を以て一切の心垢を焚燒す、正法光明を熾然にして、是の故に如實に之を說く、即ち眞言を成ずるなり。

次に扇を取て火を扇ぐ等。　略出第四二十三次に即ち火を燃す、口を以て吹く勿れ、物を以て扇ぐべし。文　尊勝軌下に云く、着火の法は口に吹くを得ず、要らず淨處の水を取て、法に隨て用ゐよ、或は扇を以て之を扇げ。扇上𑖨字等。(一)護摩達磨に云く、觀せよ扇の上に𑖨字あり、因業不可得なり、是の字は即ち(二)大力自在の義なり、風能く物を摧く、動力大力の義。虛空は質碍なしとは、大自在の義なり、字變じて風輪を成じ、大智光熾盛の炎を吹き發す、是の如く想ひ了て之を扇げ、𑖨字𑖨。文　今云く、此は大力大護眞言釋の意を取て釋す。文の中引點の義なし、恐くは引點なきを正となす、當に𑖨に作るべし。眞言に曰くとは、諸軌の文に依るに燃火の眞言と名く。十一面軌に云く、木を燃すべし、木に依て火を燃す、密言は唵步入縛羅二合吽。烏芻澁麼軌に云く、燃爐誦後に明三遍加持を成ず、唵一步入嚩二合攞吽二。

次に彌陀定印を結ぶ等。　此れは自觀なり、略出經に云く、火焰の中に於て想へ嚩上聲字あり、變じて火天となる、白色髮黃、三目四臂、左邊二手、一手に(三)君持を執

(一) 護摩達磨　護摩法なり。
(二) 大力云云　𑖨字の義なり。
(三) 君持　軍持ともいふ水瓶なり。

り一手に杖を執る、右邊二手、一手無畏相を作す、直く前に掌を舒べ掌を竪て外に向ふ　一手數珠を持つ、想へ火夫の身遍ねく火焰を生ずと。

次に火天を勸請す。　此は爐中に火天を請することを爲す。先づ其の座を儲くるなり。瑜伽軌に云く、然る後一花を取り、火天の眞言を以て、三遍、或は七遍。火中に擲げ、然る後火天の印を結ぶ、○進度鈎の如くし來去之を招ぐ。定印を結ぶとは、此は鈎召已て前の如く彌陀定の印を結び此の觀を作すなり。

次に火天の印を結ぶとは。　謂く召請なり、口決に云く、(一)召請●撥遣●單印を用ふるなり。右手施無畏にして(二)風指三召、明一遍。左拳腰に按し次に(三)四明印を結び、次に金剛掌にて啓白を唱ふるなり。第八に云く、第二句阿揭娜曳は是れ火の義なり、云云若し召請の時は伊係伊係の句を增加すべし、撥遣の時に至て揭車揭車の字を加ふ。云云

次に嗽口等。　第八十三に云く、既に請召し已て先づ閼伽香水を以て三度灑淨し、三たび嗽口の水を獻ず、即ち諸の五穀●蘇●酪等の物を取り、以上所說の眞言三遍、護摩して火天を供養す。凡そ護摩の時皆先づ大杓を以て淨蘇を盛滿し之を焚く。次には則ち柴を焚き次に飯を護摩し、次に諸穀に及ぼし、或は乳粥を以てし、次にまた蓮花

(一) 召請云云　事記にあり。
(二) 風指　頭指なり。
(三) 四明印　四攝の菩薩即ち鈎、索鏁、鈴の印なり、之れ大日來の鈎召、引入、繫縛、歸入の三昧となす。

等を以て意に隨て之を燒く。中間施す所は皆小杓を以てす。所以に經に云く、應當に滿てる器を持し、而して之を供養すべきなり。

次に嗽口。三度　此の供養已て尊口を嗽ぐなり。第八に云く、供養已ては重ねて香水を灑ぎ及び閼伽を傾く。人の食し已りて水を用ひて澡漱するが如し、更に香花等を以て供養し、當さに運心して火天を引送して本座に置け。

(一)第二部主段。　略出經及び疏の第八に本尊段に次で諸尊段を明し部主段なき也。寶生尊とは、夫れ灌頂とは、息災・增益二法合するが故に、寶生尊を以て部主とする也。

次に灑淨等知るべし。　次に定印を結ぶとは、此れ自觀なり。金剛寶如來とは、謂く寶生尊即ち如意珠の異稱なり。

第三本尊段。　略出經。疏第八に本尊段なし。何が故に爾るとは、凡そ護摩は火天を本尊とするが故に別に本尊なし、今時の行用はみな師承に依て(二)五段護摩と爲す、故に經疏と其の義同じからず。問ふ。火天を本尊とする云何ん。答ふ。第八十一に云く、當さに瑜伽に住し、火天の種子を以て轉して火尊を作り、三角漫曼羅の中に在く、下の品の中に示す所の十二火尊の如し、隨て其の一の事業と相應せん者を取る、

(一)第二部主段護摩の段の事は護摩事記にあり。

(二)五段護摩事記にあり。

云云第十五十五に云く、外護摩を釋せば其の三種あり。一に本尊、二に眞言、三に印。一に本尊とは本尊也た供養の爲めの故に之を置く、所宗の門に隨て而も之を置く。或は火中に是の漫荼羅の位あるなり。文　應さに知るべし本尊とは謂く火天なり、十二種の中に於て法に隨て一尊を用ふ、故に所宗の門に隨ふ等といふなり。問ふ。今の次第は初金後胎夜中間の護摩なり、何ぞ唯金の大日を以て本尊とするや。答ふ。小野の所傳金界を要とする故に爾るか、更に尋ねよ。

次に加持物、大阿闍梨兼行の時等。　略出四二十三師北面して坐し、諸の弟子を引いて左に次に蹲跪す。文　疏の第八に諸尊段を釋し畢て云く、又閼伽を奉じ然る後に諸尊を頂禮し諸の弟子を召す、上の文の所說の如し。散花等の法を作し、乃至告げ語ること却竟れば、方に一一弟子を引いて、護摩の所に於て阿闍梨の左邊に於て、恭敬の心を以て蹲踞して住せしめ、師左手を以て弟子の右の手の大指を執り、寂灰の眞言を誦す。一誦毎に一たび火食を施し、此の如く二十一遍に至る、諸の弟子是の如く之れを作す。文　弟子の手を執るとは爲た何の義を表すや。按ずるに維摩須菩提章に云く、爲た衆魔と共に一手にして、諸の勞侶を作す、汝衆魔及び諸の塵勞と等ふして異りあることなし。

云云今弟子の手を執るは即ち傳授與して佛種族となることを表すなり。

第四諸尊段とは。　謂く五部の諸尊の一切聖衆を供養するなり。略出第四二十五に云く、若し意欲せば別に諸菩薩等を供養すべし、即ち各〻隨て誦し本心密語、或は三七遍、或は七七遍、意に隨て之を沃せ。以上一百八枚、小柴一一兩頭を酥密の中に刺し、時時火を投げ所作法已る。疏の第八十三に云く、次に當さに諸尊を奉請す、先づ一花を取り、成辨の眞言を以て去垢作淨して、部主眞言を以て加持す、兩手を合せ捧げて心生じ口言ふべし。唯願くは諸尊、此處を加持し我が微供を受けたまへ。即ち當さに爐を隔てゝ擲ちて漫荼羅に向ひ、其の遠近に隨て擲んと欲する時は、先づ此の花を觀じ、遍ねく一切諸尊の座位に至り、彼の隨類の相應座と作す。復た成辨諸事を用ひ、爐内に於て去垢作淨して、方に諸尊を請し、或は彼の尊の眞言を以て一一に別請せよ、或は一部の眷屬に隨ひ、乃至眞言王を用ひ一時に都て請せよ。また此の火爐既に火界に同じ、請する時但だ諸尊を觀ずるに、本座を動せずして來て降臨したまふ、事了るの時、亦た以て去相なくして本所に還りたまふ。云云

次に外五古印を結ぶ等。　此は諸尊通印の言か。

第五世天段。　略出第四二十五に云く、次に供養給施すべきこと上の所說の如し。座して復た外八方諸天神眷屬等、前に准じて密語の法を誦し火中に酌沃す。文　大日經疏に別に世天段を說かざるなり。

四臂具足とは。　事鈔に云く、瑜伽軌に云く、中心に四臂不動尊を置く、肉色二手金剛拳、頭指・小指各〻曲て鉤形の如く、口の兩角に安いて相は牙の如し。右の手刀を持し竪てしめ、左索を持す、半跏右左を押し、磐石上に座す、威焰光明身に遍し。私に云く、軌に神供中尊に四臂不動を安き、八方に八天を安き、上下に梵地を安く。今の次第は彼の天を横にして世天段の觀想を明す。是れまた軌に所見あり、不動尊は世天の主領なり、故に之を加請す。世天の主たる時は牙印に住す、故に四臂となる。

(一)安鎭の軌は亦た以て是の如し、右の手に所持の刀は利劒を刀といふか。はたまた如常の天等持する所の大刀か。世天、刀を持す、是れ中智に非ず、有空の邊智を表する故なり。云云　今按ずるに、牙は是れ金剛夜叉三昧、一切有情の無明煩惱を斷滅す、四牙は四攝を表す、內大悲を具するが故に、外忿怒夜叉の相を現ずるなり。心要に云く、悲怒威猛にして金剛の牙を持し、自ら口中に安きて能く一切有情の無始の無明、及

(一)安鎭の軌具には聖無動尊安鎭家回等法といふ、金剛智譯、不動明王の地鎭法の本軌なり。